川物核



No. 854

七月号

創刊大正十三年 通巻八五四号

日川協加盟

第5 鳥 取県民文化祭主催事業

第 22 回

ところ 5 倉吉シティホテル(20858-10月11日 (日) JR倉吉駅から南へ徒歩7分 午前10 時開 場 26 6

1

1

兼題と選者

谷鈴白熱大天桑高 木根田家根田杉 圭 風夢 砂鬼 詩 輝

芳弘み朗太草守遊 選選選選選選選

出句締切 欠席投句 9月20日締切(当日消印有効)用紙自由 前11時半厳守(各題2句・

費 当日 ₹ 689221 鳥取県大栄町由良宿2072-一会費 2000円(昼食・ 発表誌呈) 次男 17 あて

参

加

宿 泊(夕食会も) 倉吉シ 欠席投句 15000円 ティホテル10月10日午後6 000円 (予約=先着40名) 発表誌呈 時 から

*7月末まで受付

連 絡 先 **∓** 689-2221 鳥取県大栄町由良宿2072-17

主 催 鳥取県 市・新日本海新聞社 ĴΪΪ 柳作家協会・鳥取県文化団体連合会・鳥 谷口 次男(20858-ほか 37 4735 取

Ш 柳た けはら五〇〇号突破

記念誌 川柳大会

大会を開催します。 で誌齢五○○号を迎えます。 竹原川柳会会誌「川柳たけはら」は、平成十年八月号 これを記念して、誌上 げます。 柳

宿 ご支援くださいますようお願い 題(各題二 句• 題 别 連 記 申

Ш

原 原 宵 蘭 明 幸 選 選

東広島市 市 小松原 伯 爽 介 峯 選 選

静 か

中

市

選

各題の三才に選者染筆色紙

賞

締

平成十年九月三十日(水)

当日

消印

参加費 表 一〇〇〇円 (郵便小為替

◎市販の原稿用紙または適宜用紙に、 川柳たけはら十二月号誌上

725-0022 参加費同封 の上、 左記 までご郵送ください。

住所・氏名

投句先

を明記

広島県竹原市本町一 島蘭幸方「 竹原川柳会誌上大会」 四 二 三 係

電話 0846 22-6626

こんにちは

川柳塔です

橘高 薫風

「こんにちは、川柳塔です」というタイトルで川柳塔の役員通信を出すことを決めたのは五月の常任理事会で、以来若決めたのは五月の常任理事会で、以来若決めたのは五月の常任理事会で、以来若決めたのは五月の常任理事会で、以来若決めたのは五月の常任理事会で、以来若決めたのところ私が常に強調する地方との緊密な交流、また地方相互の和の大切さ緊密な交流、また地方相互の和の大切さを認識し、川柳塔社の機構を更に強固にして来世紀を迎えねばならないとする方針の、具体的な布石の一つでもある。役員(本社運営執行の役職、相談役、会計監査、参与、理事)各位の幅の広いご意見と地方同志の連繋に寄与する積極的なご支援をお願いする。

ある日、編集作業を終えた雑談時、私でことであった。それには虚心坦懐、決しことであった。それには虚心坦懐、決しことである。

「僕は僕で常に気を遣うてるんやで。「先生は何故本社句会で句をお作りにならんのですか」と。

知会でも参会者が今日はどんな顔をして いるか。新参の人にさり気なく声を掛け させるには誰が適当か、などと会場を見 さいると、作句してたらお留守になる」 という答えだった。

先生は一人一人の顔付きを見て、生活の上にも思いやって下さっているのかと、のすいなり、作句には如何に真剣に対処されていたかをも感じさせられたのだ。それは、指導者とは上から下へ力を致すものではなく、後進から先輩へと盛りまかるベクトルを頼む大切さに触れておられる。傲慢な思い上がりは、たちまちられる。傲慢な思い上がりは、たちまちられる。傲慢な思い上がりは、たちまちられる。傲慢な思い上がりは、たちまちられる。傲慢な思い上がりは、たちまちられる。傲慢な思い上がりは、たちまち

垣に当る一般同人誌友の人たちに、川柳己を殺すこと、人を活かすこと、城の石

みているのは、役員の責任ということだ。

路郎先生から受けた薫陶で私の身に沁

た油断から、突如呼吸困難の発作を起しを殊更に強調したのは、私の思い上がっを殊更に強調したのは、私の思い上がっを殊更に強調したのは、このようなこと結果が出てくるものだ。

素吸入と静養を申し渡された。 心臓が頑健そのものだったことで回復に 心臓が頑健そのものだったことで回復に とで、救急車で病院に運ばれる。幸いに とのものだったことで回復に とが、対急車で病院に運ばれる。

「こんにちわ」と問い続けるつもりでい 役員通信をフルに生かして頂くよう、 役員通信をフルに生かして頂くよう、 でこんにちわ」と問い続けるつもりでい こんにちわ」ともに私は七十五歳と

路郎忌

媾曳も酸素ボンベを背たろうて酒とろりとろり母似の観世音節とろりと思わずや酒と恋誰そ彼も彼は誰もなし夏の酒



JII 柳 月 号 目 次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

川柳塔

同

中尾藻介.....

東

野

54

51 4 2

『夕立・雷

俄雨』

■巻頭言

こんにちは川

柳塔です

橘

1

西

雄 風

> Z 風

選

: :

郎師

水煙抄 古川柳歳時記 川柳の群像 自選集

大空のこころ

(90)

橘 西

高

風

:

83 58

瀬

石

を

田柳宏子選

60 56

た時である。三鴨美笑氏(故人)と米子駅頭

でお迎えしたが、師は小さな鞄を一つ持って

博 大

美

鑑

賞

水煙抄 同人吟………

在に至っている。 川柳塔が発刊された翌月からも投句して、 った四十年九月号まで、 をした。 そして 路郎師が死去され終刊とな 強し二十五年八月から投句 雑誌を購読し、 和二十四年四月、 連続で投句を続け、 一年間勉

記念川柳大会へ、 著書『川柳とは何か』を購入して精読し、 私には川柳のバイブル的な存在である。 でも書棚から度々出しては再読を怠たらず 昭和三十年十一月に発刊された、 師と最初にお会いしたのは、昭和三十年四 川柳雑誌社米子支部松露川柳会の創立 柳話と選者としてお迎えし 路郎氏の

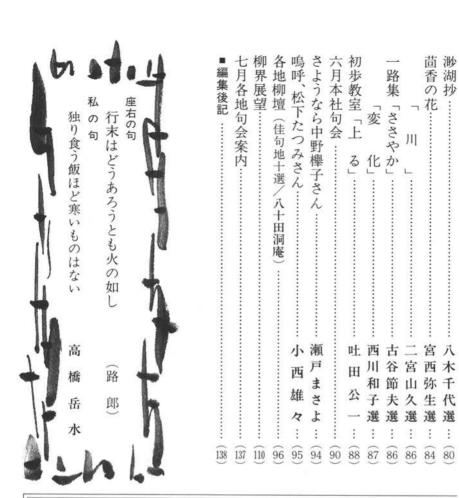
師と美笑氏と私の三人で、ささやかな祝宴に 特別二等車(特一)から降りてこられた。 すぐ会場の皆生温泉の友恭寮へご案内

麻 郎師を偲ぶ

西 雄 々

小

現



山陰のお酒は味が良いと、お褒めの言葉なのような優しさを感じた。

に保し、路郎忌には必ず飾って、当時を偲い」の句を、お願いしますと答えた。硯と筆い」の句を、お願いしますと答えた。硯と筆の場によう、どの句が良いか……」と言われ、あげよう、どの句が良いか……」と言われ、のただいたが、突然「雄々君、短冊を書いていただいたが、突然「雄々君、短冊を書いていただいたが、突然「雄々君、短冊を書いていただいたが、突然「雄々君、短冊を書いていただいたが、突然「雄々君、短冊を書いていただいたが、突然「雄々君、短冊を書いていただいたが、突然「雄々君、短冊を書いていただいたが、突然「雄々君、短冊を書いていただいたが、

な激励のメッセージが届き、同人一同、感激松露川柳会が発足すると、師から次のようぶことにしている。

風を吹き込んだ」と、地元新聞にも報道されて、後日放送されたが、「山陰の川柳界へ新さて、創立記念川柳大会は、百五十名の出席者があり、NHK、山陰放送局も録音に来て、後日放送されたが、「山際が誕生した「川柳雑誌米子支部松露川柳会が誕生した」には、何時までも初志を貫徹され……」日は昭和三十年一月十七日朝と記してある。さて、創立記念川柳大会は、百五十名の出席者があり、NHK、山陰放送局も録音に来て、後日放送されたが、「山陰の川柳景へ新聞にも報道されています。」



藤 劦 二度ぐら 簿と記者会見に距 ダブ ル ス 離 1 がある n た

末の子が結論を出す 友達と信じ正論投げ 家庭論 かける

開幕の桜見に来て花吹雪

解体の家屋寂し

やこぶし咲く

竹とんぼこの頃羽根が軽そうで ニュートンのりんごも花がつく五月

花

展

出

7

葉桜の道となり

鳩

かい

飛

ぶ少年の第二土

曜 だ

弘前

市

斉

の嘘はいつ かの 俺 嘘

独 万葉がな他人行儀な見舞状 胸豊か母は怒っ n 居 0 声 出 L たことが無 7 書く 白 記 帳 43

孫の髭私しみじみおばあさん 浮雲を見ながら春の露天風呂 女系家族ににこにこ泳ぐ鯉幟

なんとなくがみがみ出来ぬ淋しくて

しん

みりの

春雨と寝坊してしもう

弘前

市

蒔

苗

果

林

族年金亡夫にすまぬパスポ 11 高知

県

赤

JII

菊

野

拍手ない舞台ひとりで舞 返す事も覚えてひとり生き 10 つづけ

子どもはねダブルスパイの元祖です

唐津市

仁

部

加

郎

蹴

n

りんごの芽園児の

ようにわれ んごの芽接ぎよく

を見る

かたりべの続きり

若草に座るお風呂の中のよう

一人行くりんご花びら敷いた径

橘 高 薫

風

選

4

泰 子

富

H

林

市

藤

田

腕一本ねじ伏す技のはたきこみ	電話での増改築の御用聞き	ジャパンブルー青より青く藍の色	ルノワール展ピンクの若さ羨望す	百体の子地蔵 百の風車	さくら散る涙のかたちの花びらよ	弘前市 今	正眼に構える癖が治らない	もう誰も入りにこない老いの傘	詰め腹を切らされるのはいつも雑魚	八方美人敵か味方か分からない	もう背伸びよそう明日からマイペース	さりげない親切さりげなく返す	高槻市 川	めぐり合うよろこびを待つひとえ帯	失意抱く今日へ優しい山の風	忘却の中でうずまく炎の情	愛と哀 引きずり生きて来た命	神の掌にゆだねる命みがかねば	底の無い袋に愛も夢も詰め	岡山県 山	春雷を遠くに聞いて旅に出る	米を研ぐ私のために米を研ぐ	ふり返る照る日くもる日女坂
						生							島							本			
						恵							諷云児							玉			
						子							児							恵			
少々の事ではもはや傷付かぬ	園遊会パラリンピックの顔清し	西宮市	さわやかに変身妻の夏帽子	ハードルを下げる恥とは思わない	縄のれん隣も錠剤ならべてる	老いふたり粥すすってる夏の風邪	FAXを置くのに家具が一つ増え	サスペンスドラマの虜戻り梅雨	八尾市	賑やかな人から淋しさを貰う	恐竜の背骨少年夢をみる	白鳥は去ったが青田美しい	信心して夏には夏の花咲かせ	いい便りめったに来ないポスト拭く	年とってからの情けは本物だ	島根県	モナリザの絵を見て苦情胸に置く	浜木綿に抱かれ流木の昼寝	虹の橋あれは天女のハンモック	こだわりを捨てたら楽にさくらんぼ	鷹揚に育って敵が憎めない	友が来ている玄関にでんと貨車	米子市
		牧							高							松							林
		渕							杉							本							
		富喜子							千							文							瑞
		学							歩							子							枝

孫進学地球儀買うに異議はなし	九十路の句集 家族でレイアウト	旧道で耐乏おもう万歩計	シルバーパス十年 足も目も達者	病床と粗食 金婚まで来たよ	金婚へ寄せ書き小一が光る	町田市	旅終えて生きるよろこびまたもらう	ゆっくりと時が流れていた田舎	しきる綿毛プロバンスは春の	薪赤々とレストランの楽しみな食事	ここはアルル放し飼いの鶏が遊ぶ	昔の母想うと母の日はずかしい	米子市	いているというであり	人もなる人もあ	上きている正人重を包っている。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	きっぱりと白黒つけて敏ができ	文化人になるには銭がやや足りぬ	ロゼワインゆれる心に火をつける	嫁がせて父の無口が深くなる	鳥取県	鉄砲百合の横に犬 ふとビクター	1	うろうろとした一日が胃に残る	ジャカルタに友達がいる死者が出た
						竹内							青戸								上田				
						紫							H								四俊				
																					,,,,,				
						錆							餌	Ì							路				
深呼吸してから箸をとる珍味	無駄と見た天元の白怖い石	人間のラスト煙は白だった	お色直しにデートリッヒの靴を履く	子供にもなれず大人にもなれず	唐津市	0	言を言い返しては見たけれど	ルニーニョに急かさ	ち切れた愛の行方は別	も角も針れれに楽しつ。	の目の力ししば終してイツング	j	ずけずけと妻が心配してくれる	放っといた鉢が咲いたら大事がり	さてどこの人か挨拶返しとく	難民の子から笑顔を奪る戦	いい、い村の付い付い		熊本県	以下同文の人生でよしすみれ草、	産まず女は子育て論に加われぬ	煙草吸えよ吸うなと自動販売機	ゴマメの歯ぎしり蕨が拳上げている	じゃがいもが籠で芽を吹く五月祭	熊本市
					田						7								高						永
											ţ	刀							野						田
					虹	en to					E	長							宵						俊
					汀						=	7-							草						子

医薬分業行く先々で金が要り大根島のボタンにとても敵わない大山の麓で楽し蕨採り計画になかった老母の救急車	新鮮な酸素がほしい一人旅平均寿命までは生きたいクスリ箱では生きたいクスリ箱	ばいしばい これた日は一日がかり寺 れた日は一日がかり寺 を越え谷越えゴルフ場	コシヒカリ食べても農家嫁が来ず 番艦マーチで送り出されたあの港 香川県 工 藤 香麗事いっぱい並ぶミニ政党 香川県 工 藤	旅人の心も和む花時計 来世紀へ夢いっぱいの学園祭 香川県 木 村
	かおり	マッユ	吟 笑	あきら
打ちしぶく波の叫びの湯に浸り 一切とすじの滝へ杉の木天を突き (那智の滝) 女盛り紅は許そう遍路笠	タリスト今日はうきうき二重橋 休日に出掛ける妻へ唯無口 空港へ便利になったモノレール	R 持ち高っぱいこなり 話口の孫に引かれて汽 きだったことにしてお	たず置い ちれても ないばか	木の薫る新居に余生満つる日々雑草のような暮らしがまだ続き 香川県 成 重 放 任

しっかりと妻に鎖でしばられて	わがまま気まま又風向きが変って来	抵抗へどうにもならぬ消費税	七人の敵の中にも味方が居	味方だと思った女に裏切られ	柳井市 弘 津 柳 慶	鍬が錆びた時が定年だと農夫	かあさんは居るかと息子から電話	苦は楽の種にならない世を嘆く	公約の紙で折ってる騙し舟	家訓などないが立派な父の背	字部市 平 田 実 男	先生の覚悟隠れているナイフ	キレやすい子供は知らぬ肥後守	玉虫色に塗ると本音がすけて見え	じゃがいもの芽がうまそうに伸びている	百尺竿頭それから一歩どう出そう		父の影追うと演歌の節になる	粘りたい椅子で鬼とも手をつなぐ	ピアノの音ときどき狂う恋なかば	花明り少女おんなの影曳いて	羽日		
生き甲斐をみがく米寿のペン冴える(N氏へ)	切り札を握ったままの負け戦	核実験の度に亀裂が増す地球	川灯台に昔ばなしを聞きにゆく	歪み切る日本に空が澄む救い	竹原市 森	無理なものは無理だと妻にさえ言われ	カープがんばれ五月の空は青いです	ある日突然娘が買ったサングラス	菜の花にすっぽり私蝶になる	灰皿はいっぱい悩み見せまいと	竹原市 岩	バックミラーにほのぼの家族立ち尽くす	見つめ合う恋の電話の長いこと	五十歳母に甘えた記憶あり	十七歳よ一緒に旅をしませんか	結婚記念日ワインを二本買ってくる	竹原市 小	着せ替えの人形に似た日が続く	十六歳初夏の光を満身に	あの服はアナウンサーも着ていたね	透け透けも慣れるととても美しい	投げキッス意味があるよな無いような	広島市 森	

本

笑

子

島

蘭

幸

田

文

井

菁

居

寄り合うて金婚祝いしてくれる 「「大学校までは光っていた僕も」を持ちて金婚祝いしてくれる。 「おり合うて金婚祝いしてくれる。」では、「大学校までは光っていた僕も	静	市横田英	大原市 石 原 淑 子正論を吐いてお酒が不味くなり 紫陽花と共演竜が天を舞う 紫陽花と共演竜が天を舞う	竹原市 古 谷 節 夫
長生き万歳怒った顔は見せません 日々喜劇演じて齢は忘れよう 日々喜劇演じて齢は忘れよう	全敷市 田 辺 灸 六渓き沈みくり返しつつきざむ皺と信をわらって絵馬へ手を伸ばすとって絵馬へ手を伸ばす	人移るチクタク時を刻んでる 倉敷市 小 野 克 枝 と と で で で で で で で で で で で で で で で で で	けたれるという幸せを嚙みしめる は近所聞かす声 でえる犬叱るは近所聞かす声 でえる犬叱るは近所聞かす声	岡山市 井 上 柳五郎

橋上で姿勢正して詩を吟ず老人の大学我等大学生名人の大学我等大学生	に助の一輪が待つ茶の心に助の一輪が待つ茶の心を助の一輪が待つ茶の心まであれる。 実家の長押に槍があり支那刀がある	安の起伏みつめつづける鏡かけ すの起伏みつめつづける鏡かけ すの起伏みつめつづける鏡かけ ないが伏せてある手紙 でのひらに小さな夢が来て遊ぶ	た は	
	宗	内	石 上	
	吟	A0070		
		寿 恵 子	な	
	平	子	ろ 子	
終点のことは知らぬが蝸牛八十歳のポチを注射に連れていく双勲には遠く終生米作る	裏切りという切れ味のものすごさ裏切りという切れ味のものすごさを置く祖母の肩また来るネそっと手を置く祖母の肩また来るネでの薬買いに行こ本屋まで心の薬買いに行こ	岡山県 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	岡山県 地獄絵に自分の顔を描いて見る 地獄絵に自分の顔を描いて見る ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	
	舟	當	江 荻	
	木	坂	口 野	
	与根		有 鮫	

大輪の牡丹が見せた髭米心 松江市	佐野木	木	み	え	坊avんが帚くと女物線画く 出雲市	尼	ħ	れいじ	じ
都忘れ咲いて私の春が来る咲き誇る牡丹よ驕る事なかれ					あちこちの骨に打ってある楔秘密です謀反の虫を飼っている				
夾竹桃咲いて父の忌近くなり					父と娘の美学蹴っとばしてやろう				
脳内革命読み終えて飲むレモンティー					お世辞という皮に嫌味というあんこ				
出雲市	吉	岡	きみえ	之	出雲市	板	垣	草	丘
山が好き川好き故郷の風が好き					頭をまるめず火達磨にもならず				
ふいと来てふいと帰る風に遇う					信仰の列がのどかでついてゆく				
花園できいた話がほほえまし					一升を十日で飲めと言うノルマ				
往き交う子みんないい子でご挨拶					何もせぬあなたの分が忙しい				
灰汁ぬきの灰をもらいに里帰り					家族みなお客の顔で台所				
出雲市	竹	治	ちかし	ĩ	出雲市	小	玉	満	江
ぜんざいと銚子並べて小休止					竹とんぼ男はとんで行ったきり				

酒を飲んで沈んでいった人 柄不明で都会の んさいと釧子並べて小休 二は二と知って齢 法の刀は良く切れる 夜が更ける 五十 出雲市 袁 山 多賀子 綿帽子大事な人に手をひか 枝打ちをされてすっくと杉木立 竹とんぼ男はとんて行ったきり 協力をしない女のむだ話 亡妻恋し上手になった玉子焼 出雲市 岸 桂 子

税務調査 1

一笑に付されて寒いわだかまり 忘れたい言葉残してたたむ傘 沈黙を守ると空気重くなる 丹満開 島 根 の県花誇ってる

お言

世辞でも

悪い気はせ

2

掌の

温み

饒舌が人を刺したと知らぬバラ

倖

せは

静

かに訪う沙羅

0

花

捨てられ

ぬ過去を秘めてる欠け茶碗

ふと曜日間違える夫未だ卆寿

い負けて置こう白髪の目立つ嫁

只

子

朗

美

江

何となくワインのような人が好き髪を切り決意の証みてもらう	朝だから暗いニュースのテレビ消す	何もかもゆったりみせる春霞	若い気にさせてもらった試着室	鳥取市	気まずさはあくびとあくび鉢合わせ	招かれぬ席を出たり入ったり	裏話先ずは一ぱい吞んでから	逢って来た匂い隠すに一苦労	念入りに書いた手紙が返される	鳥取市	酒止めた途端酒豪の痴呆症	血圧にゃ酒よりペンが悪さする	天狗の軸飾る所が見当たらぬ	贈られた新酒へ一念発起する	線香の煙にむせる二日酔い	鳥取市	逆立ちをすれば若さが戻りそう	オンリーユーと言ってはくれぬ人といっ	胸の内明かすにお酒ちょっと要り	写経する冬から春になってゆく	咲いたまま散らすは神の気まぐれか	鳥取市
				岸						前						西		る				倉
				本						田						村						益
				孝						-						黙						_
				子						枝						光						瑶
切腹の影武者君は犬死にか祈れども神が外泊してごさる	政界の改革なんてインチキさ	正義説く神も仏も勇ましい	外はもう春だ北風眠りなよ	鳥取市 両 川 洋 々	ポケットの中で謀反が目を覚す	夫婦して歳だ部品を変えようか	コマ切れの党が内ゲバ始めだす	アメリカに総理よノーと言えますか	野心ある旗でまだまだ染め直す	(前月分) 鳥取市 両 川 洋 々	葉桜が浮かれた気持ちたしなめる	子が投げたボールはちゃんと受けてやる	趣味ひとつ話して医者と通じ合う	わが不倫本で情報売る時世	ユーモアに嘘も織りなす芸達者	鳥取市 美 田 旋 風	飼犬にかまれた傷がまだ疼く	ふて寝した夜はさびしい夢をみる	金持の財布に金は無いらしい	出目金に運動不足笑われる	予報士の資格あげたい雨蛙	鳥取市 岸 本 宏 章

朝帰り優しい妻が鬼に見えを指をまだまだ燃やすママが居るを握れる方へ回りたい。	又 月	終盤は速度飛車角捨てて攻め ライバルが不参加とても気にかかる 三吉に小春 私にも愛妻 鳥取市 坂	7六歩角道開けてさあやるぞ 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	鳥取市 武
房	Ĩ,	田	木	田
看	ij	和	圭	帆
办	<	和 歌 子	郎	雀
同感はせぬが共感できる敵で中ポーを迎えに走る松葉杖ピーポーを迎えに走る松葉杖とっていますカスミ草	愛うすい女が伸ばす赤い爪昭和去り義理人情が軽く浮く昭和去り義理人情が軽く浮くれたくしを宝と思うことに決め	さみしいね煙みるひと皆無口 さみしいね煙みるひと皆無口 さみしいね煙みるひと皆無口 さみしいね煙のるひと皆無口 さみしいね煙のるひと皆無口 さみしいね煙のるひと皆無口 さみしいね煙のるひと皆無口	古稀迎えひときわ古稀迎えひときわひたむきに打ち込ひたむきに打ち込	
感できる敵 に走る松葉杖 に走る松葉杖 にあるメガネです	い爪 く浮く とに決め とに決め	さみしいね煙みるひと皆無口	古里におふくろと言う朱がある古稀迎えひときわ弾む陽が昇る立き笑いした急な坂ふり返る日に一度そば食べないと落着かぬ日に一度そば食べないと落着かぬひたむきに打ち込む鍬は背かない	鳥取市
取	い爪 く浮く とに決め とに決め	鳥るれきる		鳥取市 杉
取市	い爪 く浮く とに決め	鳥 る れ ぎ る 市	市	
和	い爪とに決めとに決め	鳥 る れ ぎ る 取 市 近	植	杉

原本・			鳥に話せない					らみんなが
はみんなの集う陽だまりへときわ目立つ星になる としてても白髪増えてゆくときの目の中に、米子市 田 中 亜 弥 生きるのがつらくなったら合図する としてても白髪増えてゆく 米子市 石 垣 花 子 久々にわが家いきいき娘の帰省 来子市 石 垣 花 子 たしてても白髪増えてゆく 米子市 石 垣 花 子 たしてても白髪増えてゆく 米子市 石 垣 花 子 たしてても白髪増えてゆく 米子市 石 垣 花 子 久々にわが家いきいき娘の帰省 来子市 石 垣 花 子 久々にわが家いきいき娘の帰省 来子市 石 垣 花 子 久々にわが家いきいき娘の帰省 来子市 木 村 をしてても白髪増えてゆく をあの声がふっと聞える時がある いい種を蒔いていい日を待っている いい種を蒔いていい日を待っている いい種を蒔いていい日を待っている いい種を蒔いていい日を待っている かって集まる三姉妹 来子市 木 村 生きるのがつらくなったら合図する 生かしたい生きたい人が先に逝く あの声がふっと聞える時がある いい種を蒔いていい日を待っている いい種を蒔いていい日を待っている かっても白髪増えてゆく 来子市 木 村 本子市 本 村 本子市 石 垣 花 子 久々にわが家いきいき娘の帰省 来子市 光 井 としてても白髪増えてゆく まりいんびり船を漕ぐ 来子市 光 井 としてても白髪増えてゆく 米子市 本 村 本子 であんびり船を漕ぐ 来子市 大 村 本子 であんびり船を漕ぐ 東京で夢いっぱいのスケジュール			記念写真はじめて腕を組んでみる					骨までは折れておらぬとレントゲン
#子市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 恋文を書く便箋に気を使う 恋文を書く便箋に気を使う 恋文を書く便箋に気を使う 変足の朝に卵が忙しい おたしの窓を開けたまま 一			寿まで夢いっぱいのスケジュー					めの事思い
息取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 変との朝に卵が忙しい 本子市 政 岡 日枝子			中亡母に捧げる感謝					のんびり
息取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 米子市 鷲 見 をい振り子が早くなる			々にわが家いきいき娘の帰					のほほんとしてても白髪増えてゆく
島取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 米子市 鷲 見 をい振り子が早くなる 高取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 意足の朝に卵が忙しい かの窓を開けたまま おり	邛			子	花	垣	石	米子市
島取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 米子市 鷲 見 をい振り子が早くなる			羽衣を着れば天まで舞えそうだ					春夏秋冬いつも祭の輪の中に
はみんなの集う陽だまりへ おこしの葬を送るべし おたしの葬を送るべし おたしの葬を送るべし おたしの葬を送るべし おたしの葬を送るべし おたしの葬を送るべし まひときわ目立つ星になる とい振り子が早くなる 高取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 意足の朝に卵が忙しい からが子の貴に勝るなり がージンロードの次に来る愛のそれから ・バージンロードの次に来る愛のそれから ・バージンロードの次に来る愛のそれから ・ボージンロードの次に来る愛のそれから ・ボージンロードの次に来る愛のそれから ・ボージンロードの次に来る愛のそれから ・ボージンロードの次に来る愛のそれから ・ボージンロードの次に来る愛のそれから ・ボージンロードの次に来る愛のそれから ・ボージンロードの次に来る愛のそれから ・ボージンロードの次に来る愛のそれから ・ボージンロードの次に来る愛のそれから ・ボーコのい顔がいききする タンポポ光りつらい話をはね返す ・ 本 村 ・ 生きるのがつらくなったら合図する ・ 生きるのがつらくなったら合図する ・ 生きるのがつらくなったら合図する			種を蒔いていい日を待ってい					む部屋がな
息取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 意足の朝に卵が忙しい かの窓を開けたまま 伸びた新芽の自己主張 一大十色説を持つ 大大十色説を持つ 大大十色説を持つ 本子市 政 岡 日枝子 一大十色説を持つ 大大中の笑顔に逢いにゆく サーカスがやってくるのは隣の野 なったがついていく タンポポ光りつらい話をはね返す かるい明日をおいておく ・ア市 澤 田 ・ア・ 澤 田 ・ア・ 本 村 をきるのがつらくなったら合図する 生きるのがつらくなったら合図する 生きるのがつらくなったら合図する 生きるのがつらくなったら合図する 生きるのがつらくなったら合図する 生きるのがつらくなったら合図する とかしたい生きたい人が先に逝く			の声がふっと聞える時があ					亡母はいまひときわ目立つ星になる
はみんなの集う陽だまりへ 生きるのがつらくなったら合図する はみんなの集う陽だまりへ 生きるのがつらくなったら合図する ときるのがつらくなったら合図する ときるのがことが ときるのが ときるのが こうない ときるのが こうなったらら図する ときるのが こうない ときるのが ときるのが こうない ときるのが ともない ともない ともない ともない ともない ともない ともない ともない			したい生きたい人が先に逝					L
選い振り子が早くなる 高取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 企の窓を開けたまま 一の窓を開けたまま 一の窓を開けたまま 一の窓を開けたまま 一の窓を開けたまま 一大十色説を持つ 一大十色説を持つ 一大十色説を持つ 一大十色説を持つ 一大十色説を持つ 一大十色説を持つ 一十人十色説を持つ 一十人十色説を書く便箋に気を使う 一十人十色説を書く便箋に気を使う 一十人十色説を書く便箋に気を使う 一十人十色説を書く便箋に気を使う 一十人十色説を書く使う 一十人十色説を書く便箋に気を使う 一十人十色説を書く使う 一十人十色説を書く使う 一十人十名の大い古い駅 一十カスがやってくるのは隣の野・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大・大			のがつらくなっ					h
までは、 ・ では、 ・ でがしいがら火を背負う ・ では、 ・ でがしたがら火を背負う ・ では、 ・ でがいたがら火を背負う ・ でがいたがら火を背負う ・ でがいたがら火を背負う ・ でがいたがら火を背負う ・ でがいたがら火を背負う ・ でがしいが足の風 ・ 大力・ 政 岡 日枝子 ・ でがしいがいた来る愛のそれから ・ 大力・ 政 岡 日枝子 ・ は、 ・ では、 ・ でも、 ・ でも、	品美			弥	亜	中	田	米子市
って集まる三姉妹 福田登美 変文を書く便箋に気を使う とい振り子が早くなる こので、大小色説を持つ 米子市 政 岡 日枝子 地越えて母の笑顔に逢いにゆく ナーカスがやってくるのは隣の野えて円卓ふたりきり 米子市 政 岡 日枝子 山越えて母の笑顔に逢いにゆく サーカスがやってくるのは隣の野くなったがついていく 神中カスがやってくるのは隣の野くなったがついていく 神中カスがやってくるのは隣の野くなったがついていく かりかり がいききする はなったがついていく ゆンポポ光りつらい話をはね返す タンポポ光りつらい話をはね返す タンポポ光りつらい話をはね返す かりのの窓を開けたまま ため息が千の賛辞に勝るなり かりの窓を開けたまま ひ 岡 日枝子 山越えて母の笑顔に逢いにゆく サーカスがやってくるのは隣の野くなったがついていく ゆうがよりつらい話をはね返す 変文を書く便箋に気を使う 楽子市 鷲 見 かりので、大田では、大田では、大田では、大田では、大田では、大田では、大田では、大田で			屋の隅あかるい明日をおいてお					弟はいつも荒縄持たされる
くなったがついていく は、日本学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学・大学			つらい話をはね返					相談があって集まる三姉妹
て円卓ふたりきり			が一つ幼い顔がい					がついてい
人十色説を持つ			カスがやってくるのは隣の					空席がふえて円卓ふたりきり
株子市 政 岡 日枝子 株子市 澤 田 大子市 ステー ステ			越えて母の笑顔に逢いにゆ					顔あげよ十人十色説を持つ
て淋しい部屋の風 バージンロードの次に来る愛のそれからびた新芽の自己主張 びた新芽の自己主張 ため息が千の賛辞に勝るなり したから火を背負う 遠足の朝に卵が忙しい い振り子が早くなる 窓文を書く便箋に気を使う 米子市 鷲 見	T		市	仪子	日	岡	政	米子市
びた新芽の自己主張 B29をまだ忘れない古い駅の窓を開けたまま ため息が千の賛辞に勝るなりしたから火を背負う 遠足の朝に卵が忙しい 遠足の朝に卵が忙しい 意取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 米子市 鷲 見		6	ージンロードの次に来る愛のそれか					しい部屋の
の窓を開けたまま ため息が千の賛辞に勝るなり したから火を背負う 遠足の朝に卵が忙しい 遠足の朝に卵が忙しい 鳥取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 米子市 鷲 見			れない古い					雨上がり伸びた新芽の自己主張
したから火を背負う 遠足の朝に卵が忙しい 意取市 福 田 登 美 恋文を書く便箋に気を使う 米子市 鷲 見			賛辞に勝る					窓を開け
い振り子が早くなる 恋文を書く便箋に気を使う 米子市 鷲 見			の朝に卵が忙し					たから
取市 福 田 登 美 ※子市 鷲 見			恋文を書く便箋に気を使う					突然の出逢い振り子が早くなる
	JĽ.		市	美	登	田	福	取

鞭打って芸のリズムを植えつける初恋の思い出甘くジャムを練る	ぬ春の	春愁やひとりの部屋を花で埋め	ちょっとした窪みで止まる夫婦独楽	倉吉市 淡路 ゆり子	かすみ草のお陰で薔薇に間がもてる	金字塔いまルピナスが登りだす	野バラ咲くみんな振り向かないでゆく	金魚草プランターでも泳ぎだす	スイートピー背丈のほどに人を恋う	米子市 白 根 ふ み	門は少しゆるめに君を待つ	桜散っても夢つぎつぎに花暦	綾取り おはじき おでこを寄せた遠い日よ	母の胸で流れて行った梟の声	かたちないものの恵みは忘れがち	米子市 野 坂 な み	本物の思い待つ程つのり出す	鏡の中鬼門と悟る赤い服	大切にし過ぎた木には背かれて	仕合せの尺度計また探している	夢求め初夏の山路へもぐり込む	米子市 木 村 春 枝
小出ししてわたしが禿びぬようにするずる休み後でご馳走出たそうな	足し算が出来てぼんぼん一人立ち	野次馬がよそ見したまに駆け抜ける	笹舟の無欲が波に溺れない	倉吉市 松 本 よしえ	ひこ生えの伸びる力に負けそうだ	饒舌な広告ピントずれている	地獄耳内緒話がすぐ洩れる	こっそりと耳打ちされて鬱になる	鍬洗う父の横顔画布の中	倉吉市 最 上 和 枝	内緒話がとっても好きな村雀	豪邸のわりに粗末なお茶が出る	一枚の紙で追われた都落ち	堪忍袋もそうそう厚いものでない	公園で花咲かす人散らす人	倉吉市 野 口 節 子	減塩が目的なのに鮭茶づけ	饒舌な女の周りは皆無口	頷いておれば事足る独り者	胆石にちょくちょく刺激される腹	茄子紺の背広で社会人になる	倉吉市 山 本 玲 子

求愛 テッ 新緑 隙間 暑がり 金をの 春なの 辞書つれて自分さがし 中 なんじゃもんじゃ炎えて命日また巡る 111 はっきりと梢が見えた眼 母 鳥 うかう 一が抜け二が抜け も地 肌 崖 n 柳 吹 0 一藻介 は ばなしをきれ センと言えば分 K に心をあらう が か H 0 に家族 切 かく to 立 0 せるとほんわかとする手のひらよ ら貧乏神 か 0 寸 0 のい 日どこ なし 蘇らせ 据え膳 つほ 父の と誘 子陛下に せぬ素性のぞかれ 公会議 ど酒 墓 ないこの世となりにけ 鮭 Va 0 も人の た銀 が 前 妙 に いに 子 眼を洗う E 届 乗 は金のこと みんな他 が好きら 転げ込む に傘をさす けたい 0 0 供も寄って来ず かるにクレマチス かしこまる 子 聞 F の旅に出 て朱に染まる 7, 0 40 カルテ た桐 人 顔 る 12 鳥取県 倉吉· 倉吉市 鳥 の花 る 取 県 市 n 新 さえき 米 Ш 家 中 H 完 幸 康 之 子 子. 司 新聞 恋歌 61 慣れ 葉桜 野 散 老ゆること肩身を狭くする世 八 天うらら地もうららなり白寿坂 勝算はどうあれ農 娘まだ恋し 道 目に青葉鰹 Ш バスに乗り お爺さんが揚 念だけ を聞 椒魚 垂れ 歩する道 飲み友なのにとっ 破 + に疲れ 天気なのに 算で願 八 0 すぎた平和も怖 になる間暫くしょぼく 記 死 夜朝 が棲んでいる水の < 旅 にできる万緑がまぶ n 事 ど物忘 顔を蒔 から Ŧ で な 0 いましては国会なり の叩き買って来る 汽車に乗るの げ降ろり 何 お方は 頭 将張り上 12 JII 0 だか に残らない 柳会 はすることに か化粧せぬ き菊 n しする 歌 早口 か ても気をつかう いものと識 げる が出 一へ行く 芽挿 U どい 2 もお だ る n 場 鯉 す 情 しい 0 る 0 鳥取 鳥 鳥 きあ る ほ 取 取 取 県 県 県 n 県 63 乾 H 林 士: 橋 村 喜 きみ子 露 与

杖

螢

志

手刀を切って辞令を受けている	これからも愚痴は言います仏さま	全国に名が売れている雨の町	ン	涙腺が切れないように泣きました		お酒好きだろう声音が太すぎる	怖いもの知らずで通す癖になり	気に入った傘の行方が気にかかる	連休のプランへ老いが外される	魚攫う海は空っぽかも知れぬ	鳥取県西	犬猿の刺激があって生きられる	登るとき下山のことは考えぬ	飲み口の良さに油断をしてしまう	潜りたくなるほど薔薇が美しい	木の芽どき私を忘れそうになる		これからは笑ってばかり居られない	三歳児的を得ている口答え	舟盛りの鯛の目玉と目を合わす	フルコースのナイフ大きな音を出す	豊かさが腰の回りに付いている	鳥取県西
					橋						原						木						Щ
					は						艶						公						和
					るお						子						弘						子
山茶花の花びらすこしエロチック	罪を消すお経毎日読んでいる	灰汁掬う母の秘伝はこのあたり	野の花と内緒ばなしをする童	美しい仏になった母に会う	鳥取県	放し飼いの鶏にも増えた無精卵	掘りたての筍とどく郷に住む	沈黙の夫の傍に居る安堵	灼熱の壺となる恋ならばよし	一瞥がナイフにもなる目を恐れ	鳥取県	今年からドルの生る木も植えておこ	花の種いずれ独りになる庭へ	花植えるゆとりも悲し店を閉ず	客の無い館に二人ケアの日々	見離された家業の果てに老いて住む。	鳥取県	少年の人を信じぬ目が痛い	小粒でもあしたへ残す在来種	酒くさい腐った鯛を飼っている	表彰という引導をわたされる	正論に少しノイズが入っている	鳥取県
					土						岩					四十年のホテル業閉ず)	绤						原
					橋						崎					のホテル							7
					睦						みさ					業別ず	寛						みさ
					7.						マン					2	7.						+ .

みさを

みさ江

寛子

睦 子

性味を持ったこどもの子食ってスズムシ美声	る言葉がちくり胸を刺す	妬けたのか急に波風立てやがる	揉めごとが金であっさり解決し	鳥取県谷	私にも虫がつかないつばめ住む	温かい気持ちもちよる隣組	一合の酒が本音をしゃべり出す	デート場所今は荒野の枯すすき	茶柱を信じて逢瀬の紅を引く	鳥取県太	母の日は母いない事思い出す	野の花の名前を孫に教えられ	名水を掬う若い手若い声	ふきの葉で名水掬う山仕事	ピカピカの接木ナイフを子にゆずる	鳥取県国	つかれきり深い眠りにつつまれる	腹割って話せる酒があってよい	それぞれの人の心が見えてくる	病む人の心気づかう草芽立ち	門出する春らんまんの風に乗る	鳥取県 権
										田						森						代
				次						幸						武						康
				男						枝						子						女
に寝てまるい地球の内の鬼一匹がい	等法男も内助光らせる	父の日にエプロン娘から届く	鯉のぼり卒業をしたランドセル	鳥取県 羽津川 公 乃	ふところのひみつが出そう五月晴れ	山越えた夫婦へ愛が溢れてる	紅つけて女心を溢れさす	雑木林の緑溢れるものがある	こじんまりの借家でひっそり生きてます	鳥取県 黒 田 くに子	良心に叱られる酔いざめの水	眠れぬ夜柱時計をとめてみる	年金を待って本音は語らない	嬉しい日隣の犬に声かける	城下町牛をつないだ石がある	鳥取県 石 尾 かつ乃	夏の陣どっちつかずを狙っている	ご論議のナイフで癒着切りなさい	大好きな彼さえ請け判は押さず	長雨がだらだら言い訳が立たず	親孝行を乞わぬ畑の葱坊主	鳥取県 乾 隆 風

鳥取県	橋	本	多哥由	
ときどきは涙を流し気が晴れる				エプロンの
学生が先生を刺す怖い世だ				大学祭ピア
自画像に句集を入れて夢を描く				襷掛け姑の
楽な道とおれば裏に罠が待つ				子の頭ほど
後にきて列の先にはすわれない				千年の池

ままうたた寝や

初夏に入り

戸

市

中

村

P

夢に 陣 0 でた亡妻の言葉が聞こえない 春風 に舞う花 0 乱

よろこびと悲しみ纒め経をよむ

種を蒔く日本に四季の んで今日まで生きた足のうら あ る限り

鳥取

県

石

谷

美恵子

土.

公園 幸せ つからか大笑いしたことが 0 は ブ 同じ ランコ自閉の子と揺れる 価値観 もつ夫婦 ない

10

何匹目かの鬼が私の からは数珠も心 の隅にお 胸 に棲 to

これ

0 門まで行ってしめ出され <

鳥

取

県

近

藤

春

恵

尼崎

市

春

城

武

庫 坊

眼

どん底で母の優 天国 向こうから別れた妻がやって来る ときどきはおしゃれも ボランティア優しく手話の指動 Vi 声がする したい紅を引く

L

鳥 取 県 Ш 本 IF. 光

手 無菌室のような暮しを望 0 支え心の 支え車 · 椅子 む

遊園地無料子供に還る六十五僕一人叱られなくて悲しいよ 僕一人叱られなくて悲し ラ ンドを着せてサイフは 火 0 車

眼 裏 E しかと刻 んだ祖谷 0 藤 尼崎市

棚田は天へ川をよこ切る鯉 露天風呂女盛 りの Ŧi. 六 人 0 ぼ

ŋ

夏とや青葉滴る ごとに怖い夢みる何の お葬 式 罰

花の茶房に裸婦二人の絵リラ 鏡 拭 く眼鏡にたまる疲 n とる 0 1

雑学の 出来て娘安らぎある言 書きにしては見事な筆遣 知恵が正論曲げたが 葉 る

孫

ほどの のことなど祭りずし ス 御 仏 声 ボールが陽に忘れ お 高に屋 わ す 台店 声 がし 7

戸

市

池 善 守

春

達筆と思っているのは自分だけ	砂時計哀しみ落とす皆落とす	好きだから横顔だけを見ています	人を待つ人を見ている待ちぼうけ	臓器移植 人は機械と違うはず	西宮市 奥 田 みつ子	足る事を知れよと天の声がする	五月晴れこころの襞も干しに出る	夢に出る背景にある里の家	埋められて里に小川の唄がない	稚児行列が背負われ眠る雨祭り	西宮市 門 谷 たず子	異常なしそのため通う診察券	無縁主婦ノーベル賞の回し読み	しゃあしゃあと読めぬ金文字書棚占め	高価い本積んでわたしを休ませる	減税にやっぱり惑う小市民	西宮市林はつ絵	曝け出し活路見つけたカラス瓜	母なればこそ覗かせるドアの音	ワンクッション置くと空気もやわらかい	水溜り葉擦れにさえも波が立つ	信頼の旗は不言か有言か	尼崎市 長 浜 澄 子
					1						1						MA.						1
心配をさせなくなった娘たち	嬉しかった水が出るただそれだけで	雲流れわたし一人が残される	春の雲ゆったりひと日過ぎてゆく	子の出世親も一緒に褒められる	芦屋市	惜しまれて去って行く人ふりむかぬ	惜しみなく黒い組織に軍資金	褒めること知らない母に育てられ	荷はいらず小鴨引っ越す春の雲	雪雲厳冬ラスコリニーコフ住んだ町	西宮市	小さい村で一人目立っている帽子	なにごとも起らず仕舞う夏帽子	裾え膳の妻に酌する浜の宿	美人画のモデルひっそり路地に住み	絵筆では及ばぬものが春の彩	西宮市	跳ね橋が上がったままを待つ月日	一柱と数えられ君帰り来ず	身仕度に半刻をかけ共に老い	山の駅待合室は話し好き	反応ゼロたかをくくっている証拠	西宮市
					黒						井						XIJ						秋
					田						上						田						元
					能						信						泰						て
					子						子						討						る
											- 2	22 -											

長の入り	加古川市 吐 田 公 一男一匹女の群れにいためられ愛の字を義理人情が縛り上げ愛の字を義理人情が縛り上げ	甘えてた孫が嫁ぐ日淋しいよ 相生市 中 塚 礎 石有頂天気持かくせぬ心電図 恋愛映画見てストレスがなおたまる ぶくがないバラ咲いて元気をもらってる	は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、	伊州市 山 峪 君 子
くを替する	「四市 松原 「四市 松原 「四年	では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	宝城市 黒 ム致死量を溜めたときからほがらかだ なる里の味は船場煮へそまんじゅう 松羽目に句友は葵上となり なの量を溜めたときからほがらかだ ステテコに父ありき (水府泡灯	宝塚市 嵯峨
				M-T

洋 敏 伊佐武

松本ただし

子

コンパスをぐるり私の勢力圏置き手紙夢を追いたくてと記す明日にまた明日あり逃げられぬ明日にまた明日あり逃げられぬ	雨の日の身辺雑記辞書の冷え 趣望が青い服着て佇っている 絶望が青い服着でで纏れ居り	書きていた。 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	別れ話切り出せずおく花の寺	えた世代消えてた鼻の下にもあ
	牛	木	堀	大
	尾	本	端	谷
	緑	朱	三	幸次
	良	夏	男	郎
歳月が鬼の牙まで丸くする職人の技は要らない釘打ち機職人の技は要らない釘打ち機	おようと がれませてる 酸々な 和歌山市 青 は なんだろうそうやメーデーいまや古稀 なんだろうそうやメーデーいまや古稀 は かんだろうそう かんしゅう かんじゅう おいま かんじゅう かんしゅう しゅう かんしゅう しゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう しゅう かんしゅう しゅう かんしゅう かんしゅう しゅう かんしゅう しゅう かんしゅう しゅう かんしゅう かんしゅう しゅう かんしゅう しゅう かんしゅう しゅう しゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう しゅう	のでは、このでの誕生日 でまうと思った傘が盗まれる 東ころころ雑木林で光りだす 東ころころ雑木林で光りだす でま浴びてひとりの誕生日	月下美人視線を意識して疲れ フピーカーに導かれてる遍路笠 スピーカーに導かれてる遍路笠 和歌山市 川 東	を避けて取る座席 引き抜いておく根元から 和歌山市 桜
	枝	本	上	井
	鉄	美智 子	大	千
	治	字	軸	秀
		— 24 —		

豊かすぎ暗いニュースが多くなる病気してから愛犬の甘之癖しがらみをふっ切る始発駅に佇つしがらみをふっ切る始発駅に佇つ	クルージング鏡の如き瀬戸の海空よりも海のまぶしき船の旅	ニー	事歌山市は対け、対対は、対対は、対対は、対対は、対対は、対対が対対が対対が対対が対対が対対が対対が対対が対対が対対が対対が対対が対対が	和歌山市 屈 田
	三 千 子	初	稚	青
	子	子	代	子
紫 再 す ち だ 間 違 界 良 !	新竹給	:チに 同美沈 :エわ じし黙 :ッと 種いが	パプリカ 高に 高に の の の の の の の の の の の の の	
紫陽花の気分ころころ七変化再々婚たしか男に懲りた筈うちだけがどうしてなどと思う事うちだけがどうしてなどと思う事	新緑を目の栄養にする五月 竹トンボ昔の空は広かった	クしておこうラーメン屋開店 りと同じポーズで薬飲む りと同じポーズで薬飲む 和歌山市 距離から未来語り合う	# 1	和歌山市 也
の気分ころころ七変化たしか男に懲りた筈でしか男に懲りた筈の気がと争えぬないとりしてなどと思う事でした。	和歌山市田中	クしておこうラーメン屋開店 りと同じポーズで薬飲む 和歌山市 古久保 時いていい出来悪い出来 再際から未来語り合う	# I I I I I I I I I I I I I I I I I I I	歌山市 也 ì
の気分ころころ七変化たしか男に懲りた筈でもお隣さんと争えぬてもお隣さんと争えぬ	和歌山市田	クしておこうラーメン屋開店 りと同じポーズで薬飲む りと同じポーズで薬飲む 和歌山市 距離から未来語り合う	# T	

酒うまい間死ぬことないだろう時代劇好きでテレビの時代劇らい一人酒鯖缶も結構うまい一人酒がンビの誕生 奈良の五月晴	トラーラーに焦 トスだく確とい トスだく確とい トスだく確とい アムセッション	和歌山市 楠 見 章	和歌山市 宝 田 ・ 子 フェロモンが騒ぐあなたに逢うてから一生感動一生青春ステキな瞳一生感動一生青春ステキな瞳カングラスわたしを隠すサングラスカ歌山市 宮 ロ 克 子 フェロモンが騒ぐあなたに逢うてから
殺虫剤地球環境あざ笑う古都友情牛車ゆっくりシャンゼリゼ古の栄華を偲ぶ朱雀門よの栄華を偲ぶ朱雀門	らか心心	野市 北 山	ないでは、 ないでは、

最高の旅でしたとは妻の言愛してるだから時々嘘もつく愛してるだから時々嘘もつく藍の色人に連なるものがある	近くみどりの風に がず がよそ見をさい かっぴん かっぴん かいしたく 見をさい かんしん しんしん いんしん いんしん いんしん いんしん いんしん いんし		大和高田市 岸 本 豊平次 関いて働いて趣味のない父 上のない片目ダルマがゴミ箱に 運のない片目ダルマがゴミ箱に 乗りない片目ダルマがゴミ箱に まり かられ まん しょう
ためらわずビール高々母元気をといの字イの字の沓脱ぎ場を者さんハの字イの字の沓脱ぎ場が頂のように梅肉鱧冴える	乗の音がみどりにこだまする 変情が切れたか孫を叱れない 変情が切れたか孫を叱れない で拾う縁起の本を持ち歩く	端	大阪市 神夏磯 典 子級の風よ爽やかな世にしておくれている。 大阪市 本 間 満津子あてにならんと言いつつ当てにする天気をの風よ爽やかな世にしておくれた 大阪市 本 間 満津子

お茶一杯ヘルパーさんのかたい口	朝と夕間違う妻をいとおしみ	浴室改造クルクルチェアの世話になり	デーサービス出して休まる小半日	七色の薬飲ますに一苦労	大阪市 北	七十路来てやさしさマシンに弱くなり	忘れたい過去 忘れたくない過去も	達筆の友の手紙がワープロに	たっぷりの乳のんだ子のよい寝顔	母の日は母知らぬ母が母恋う日	大阪市 中 日	リゾートへ水着携帯する六十路	雨足とあじさい寺のにらめっこ	郷愁へ独りぽっちのハッタイ粉	人人人野島断層保存館	偉業達成明石海峡只無口	大阪市 津 字	海の日に改め海を意識する	原点に戻れと額の中の亡父	得るよりも失うことに気を遣う	欠点を知り目をつむるのも度量	人に花持たせ自分の道を選る	大阪市 河 井
					D#						田 *						守枷						井庫
					勝						あいて						柳						庸
					美						子						伸						佑
お話は承	求婚の	遅れて	雲流	夏雲		新党	娘	夢	核	上		た	木	簡	八	息		梅	Ŧi.	山	ば	幸	
事るが貸し渋る	言葉忘れぬ妻がいる	てるアテは待てないコップ酒	れ知覧の空の未帰還機	へ親子揃えの麦藁帽	大阪市	兄は迷走過程の吹き溜り	には居て欲しくあり欲しくなし	の橋片や夢散る船会社	武装お釈迦様には何と言う	品な和紙にも負けぬ文字を添え	大阪市	にっぷりと陽を浴びている素焼鉢	本棚に並ぶ私の好奇心	単に握手したがる風見鶏	十路坂禁酒禁煙しない父	つぎが下手で溜息隠せない	大阪市	雨空のあしたは晴れる夕茜	五月晴石切さんへお参りに	日みどり空の青見る京都線	ばら園のばらに陽ざしが眩しすぎ	せは花活ける時カーネーション	大阪市
るが貸し	言葉忘れぬ妻がい	待てないコップ	知覧の空の未帰還	へ親子揃えの麦藁	大阪市 小	は迷走過程の吹き溜	は居て欲しくあり欲しく	の橋片や夢散る船	武装お釈迦様には	品な和紙にも負け	大阪市 川	っぷりと陽を浴びている素焼	に並ぶ私の好奇	単に握手したがる風見	路坂禁酒禁煙しない	ぎが下手で溜息隠せな	市川	空のあしたは晴れ	晴石切さんへお参	みどり空の青見る京都	園のばらに陽ざしが眩	せは花活ける時カーネーシ	大阪市 辻
るが貸し	言葉忘れぬ妻がい	待てないコップ	知覧の空の未帰還	へ親子揃えの麦藁	市	は迷走過程の吹き溜	は居て欲しくあり欲しく	の橋片や夢散る船	武装お釈迦様には	品な和紙にも負け	市	っぷりと陽を浴びている素焼	に並ぶ私の好奇	単に握手したがる風見	路坂禁酒禁煙しない	ぎが下手で溜息隠せな	市	空のあしたは晴れ	晴石切さんへお参	みどり空の青見る京都	園のばらに陽ざしが眩	せは花活ける時カーネーシ	市
るが貸し	言葉忘れぬ妻がい	待てないコップ	知覧の空の未帰還	へ親子揃えの麦藁	市小	は迷走過程の吹き溜	は居て欲しくあり欲しく	の橋片や夢散る船	武装お釈迦様には	品な和紙にも負け	市川	っぷりと陽を浴びている素焼	に並ぶ私の好奇	単に握手したがる風見	路坂禁酒禁煙しない	ぎが下手で溜息隠せな	市川久	空のあしたは晴れ	晴石切さんへお参	みどり空の青見る京都	園のばらに陽ざしが眩	せは花活ける時カーネーシ	市

子

子

笑

信

原章 久 思いようで一人暮せる有難さ	パリーで時代祭をする話 寡黙もよしモナリザの微笑なら ことばの倹約かしら物言わぬ子が面白い 仏像の魅力に溶けている私 壊れゆく文化が惜しい古都の美と	ī ν Έ	な五本買うた倒産処分市 本を取る まっまり に倒産処分市 はましいまでの母の愛の日よ悲しいまでの母の愛のおいまでの母の愛の母の日よ悲しいまでの母の愛のおいまでは、	大阪市 板の大阪市 板の大阪市 板の大阪市 人阪市 板の大砂です で は 視線外して 照れてます で が は 視線外して 照れてます かん で が は で が は で が で が で が で が で が で が で が	
大阪市 稲 本 凡 思いようで一人暮せる有難さ 雪の無い富士を展望台でみる 満一歳お鍋の蓋がお気に入り 娘から三大橋をみる誘い 日めくりの裏が私の日記帳 大阪市 玉 漫をおもいワイン白から赤に替え 湯槽より長い菖蒲を長いまま 若葉には風もやさしくなるらしい いちめんの杉菜 土筆を見たかった 見た目だけきれいな胡瓜多すぎる 大阪市 杉 アル多き私を救う応一字 終焉で忘れ得ぬのは何だろう 終焉で忘れ得ぬのは何だろう 終焉で忘れ得ぬのは何だろう きれいなはよう今日の雲に乗る 霊が好き見る度変わる雲が好き 見るべきは見つと茜の雲となり	田	I	水	東原	į
世界の (大阪市 稲 本 凡) (大阪市 稲 本 凡) (東京	達	Ē	絹	倫章	ĉ
大阪市 稲 本 凡 大阪市 稲 本 凡 大阪市 稲 本 凡 公うで一人暮せる有難さ 無い富士を展望台でみる 無い富士を展望台でみる 歳お鍋の蓋がお気に入り ら三大橋をみる誘い くりの裏が私の日記帳 大阪市 茎 もり長い菖蒲を長いまま には風もやさしくなるらしい めんの杉菜 土筆を見たかった 目だけきれいな胡瓜多すぎる 日だけきれいな胡瓜多すぎる 日だけきれいな胡瓜多すぎる 上りまた歩きだす迷い犬 城のベンガラ色は兵士の血 で忘れ得ぬのは何だろうで忘れ得ぬのは何だろうで忘れ得ぬのは何だろう 大阪市 福 岡 雅 き私を救う忘一字 き私を救う忘一字 ちの子の血を吸うた 大阪市 福 岡 雅 き私を救う忘一字 まれを救う忘一字 さは見つと茜の雲に乗る	子	1	子	子 久	
楓 汀 子 子	べきは見つと茜の雲となりがき見る度変わる雲が好きで忘れ得ぬのは何だろうき私を救う忘一字大阪市 福 岡	スカスはうちの子の血を吸うたのベンガラ色は兵士の血りまた歩きだす迷い犬あれだけ飲んだ証です	大阪市 杉 澤	大阪市 玉 置 英めくりの裏が私の日記帳 大阪市 稲 本 凡いようで一人暮せる有難さ 大阪市 稲 本 凡いようで一人暮せる有難さ	

夕焼けに今日の余韻が心地よい受話器手に一人芝居の賑やかさ時効だと思う話で一波乱時効だと思う話で一波乱	哲学の道で結婚ばなしなど 堺 市 宮 本 かりん で気という宝お前にあるじゃない で気という宝お前にあるじゃない おいっぱい かいん である いっぱい はい かいん は は ないん は は ないん は かいん は は ないん は ないん は は ないん は は ないん は ないん は ないん は ないん は は ないん はん は ないん はいん はいん はいん はいん はいん はいん はいん はいん はいん は	市神原	場 市 桑 原 道 夫働いて働き抜いて我死なん 関しさに慣らされ早く呆け始め と意気な中学生がよくなつき	大阪市 岡 本 久 峰
ブーメラン話に尾鰭つけてくるやりすごした電話再び鳴らぬベルやの視野にやさしい母の湖	帳には夫の病の走り局というないでは、それでしずが事には夫の病の走りがある。	要本陰文殊菩薩と一休み 関本陰文殊菩薩と一休み 要本陰文殊菩薩と一休み でる 要本陰文殊菩薩と一休み	界市山本半れいを忘れ死んではならぬというが借りたことすっかりお忘れのようで信り忘れてる妻の誕生日やっぱり忘れてる妻の誕生日	堺市 志 田 千

銭

砂

子

代

特売へ女の足は疲れない	写経する窓の緑に目を休め	横文字の落書きもある子供部屋	さりげなくゴミ拾ってるお人柄	ドイツの旅窓々に花咲き揃う	岸和田市 原 さよ子	西安の夜をかざったディナーショー (唐楽宮)	城壁へのびのび朝の太極拳 (西安城)	楊貴妃の湯浴みが浮ぶ石の風呂(華清池)	紅扇の太極拳がお出迎え (小雁塔)	乾陵墓守る武将の顔二十 (乾陵)	岸和田市 芳 地 狸 村	雑念が渦を巻いてる座禅堂	ふる里の駅に降りると母匂う	武将の面影を残すかしわ餅	薫風に泳ぐ鯉も赤ん坊も	さわやかな風だ若さを持っている	岸和田市 高須賀 金 太	老いの坂えっちらおっちら日を重ね	表彰状台所に立つ妻の背に	若者の欲望ピアス キラリ揺れ	一善のドラマへ人の温さ見る	遠ざかる孫との距離を針仕事	和泉市 西 岡 洛 酔
ジョギングに妻と揃えた軽い靴	恋人はわがままさえも魅力なり	類似品に注意と各社PR	ギャル達がワッハワッハと大ジョッキ		岸和田市 長谷川 呂 万	核家族若しも年金無かったら	父の死を嘆いた母の三回忌	未だ生きてますかと現況届来る	浪々の身にはムカつく天下り		岸和田市 田 中 文 時	生きているそのいとなみの素晴らしさ	限りある命いとしむ八十路坂	明け方の匂いに心癒やされる	花衣花の余韻の香に浸り		岸和田市 古 野 ひ で	格式の家に女官の嫁が来る	買い渋り半額セールで奪いあう	不況風老舗の暖簾重く垂れ	職安に働きバチが詰めかける		岸和田市 井 齋 一 齋

菩薩像腹の出っ張り気にかかり、はけたふりしているうちにぼけてくるをはけたふりしているうちにぼけてくるをいたと平気で言える断酒会を発の上に大きな穴があり	にこのにまれている。	営 使つ本り粧	羽曳野市でランコが大きく揺れる愛と憎いっていますかたつむり人並に焦っていますかたつむり人並に焦っていますかたつむりでランコが大きく揺れる愛と憎いる。
	三	福	酒吉
	好	田	井川
	専	満	一
	平	州	壺美
風媒花風の善意を信じきるペン走らせて聞き流す妻の愚痴不足ない齢だと訃報見る他人何といりない。	いそれた祈りボケませんと 堀で田辺聖子の本を買う 桜に負けじと並べるお弁当	真車代弁してくれている技書機装置きが男の嘘を聞き分ける器用すぎる男便利に使われる公内リアのトッポジージョの話などイタリアのトッポジージョの話などイタリアのトッポジージョの話など	写 に に に に に に に に に に に に に に に に に に に
	置	本	岡 島
	重		
	人	今 日 子	智恵子 由
	/		

夏負けを知らぬ女の二重顎	比べたらあかんあの人元モデル	どないしよ孫の寝顔に蚊が止まる	笑うより笑われる事多くなり	出会いから長いドラマの幕が開く	藤井寺市	腰据えて構える外はない不況	新人が出る度記録破られる	あっと言う間に新人に超される世	帽子かぶるとまた一段と冴えるママ	帽子脱ぎやっと駅長昼にする	藤井寺市	居住まいを正して夏と向かい合う	一本の線がわたしを苦しめる	逢いたいと思う人あり雨の部屋	覗かれてからの壁画の不眠症	絶叫マシン誰の顔やら解らない	藤井寺市	あこがれはみどりの雨に消えた人	葉桜になっても独りまだひとり	常得意霞ヶ関で引き継がれ	核よりも怖いとなりのごみ焼場	昼寝から起きて阪神どうなった	藤井寺市
					中						福						高						吉
					島						元						田						岡
					志						み						美						美
					洋						のる						美代子						房
みんな来てカーネーションに包まれる	菜の花の海原をとぶ蝶ひとつ	赤い羽根つけて善人らしくする	蓮の花願いを包みもうしぼむ	したいことしてると夫思ってる	八尾市 吉	すんなりとはいかぬ男の水仕事	口やかましい母は自立が出来ている	振り向けば妻堂々とついてくる	当分は別居と姑の方が言う	地に足をつけてお百度詣りなり	八尾市 宮	ときどきは悪女になって酔うてみる	他人の眼さけて小金を貯めている	またたきのうちに人生おりかえし	満開を待たずに辞令渡される	五月晴みんな心のかようひと	八尾市 宮	賑やかな声は戸が開く前にする	白牡丹主役女と写される	サボテンの構われたいと思う時	ふたり居てこころとからだやわらかい	幸せを地下鉄乗って抱きに行く	藤井寺市 鴨
					村						崎						西						谷

風

瑠美子

弥

生

職場での拳緩める家がある	本好きがオアシスにする古本屋	野に咲いた花の無心がまぶしくて	ひまつぶし辞典端から読んでいる	火の粉降る中でライバル旗を振る	八尾市	若やいで錆びつく脳を磨かねば	出直しの出来る明日がある弾み	一つずつ許して空が青く澄む	化けの皮すっぽり脱いでから気楽	ひまわりが夏に恋して天を指す	八尾市	笑顔忘れて心は風邪をひいている	弟と酌む酒いつも度を過し	何事もなく電話ひとつも鳴らない日	遠足の電車笑いに引き込まれ	それとなく追ってる日傘追いつけぬ	八尾市	花陰の小さな命見ていたり	大ぜいの仲間と橋を架けている	このあたり牛歩している楽しさよ	新緑のしたたり浴びてああ余生	うの花匂う歌ごえ喫茶に夏がきた	八尾市
					村						大						生						高
					上						内						嶋						橋
					剛						朝						ますみ						タ
					治						子						み						花
道普請小さな山が向い合い	遅桜 門前の川の水明り	岬まで一本道の低い屋根	遊覧船よその子供の相手する	島めぐりどちら向いても波光る	守口市 森	方針が変りましたとそれっきり	よくあくびする妻と暮して三十年	箸の先何か楽しいことがある	女六十箸がこけても笑う時	駅弁の短い箸も旅の味	東大阪市 谷	童歌孫に教えて妻至福	自分史は書けぬが写真帳がある	一坪の緑見ながら朝のお茶	トーストの焦げも気になる恐怖心	不況時に男が化粧する不思議	八尾市 神	愛とも知らずうす味に文句言う	問いと答えの間うろうろしています	誰だか知らぬひとがにこにこ寄ってくる	ふるさとの風は辛抱強く待つ	頂上は低い山にもありました	八尾市 村
					JIJ						П						原						上
											H												
					まさお						義						まさと						ミッ子

一ぺんで懲りた激辛のカレーがティックと本屋銀行のかえり道鉋目を残し丹塗りの朱雀門を残し丹塗りの朱雀門のかえり道の最近のからず野面に朱雀門	核実験ガンジーの国亡びたり 豊中市 安 藤 寿美子柩がまだ脅しのタネになる地球をもよいのにみんな死ぬドラマのながともよいのにみんな死ぬドラマー枚の辞令でクビをきられた日	癌細胞増える記録の検査漬け 豊中市 田 中 正 坊海開の桜ぼんぼり窓あかり	しげ	守口市 結 城 君 子
引き合えば張り近づけばゆるむ糸が羅双樹。花の陰にも白い花のとど菖蒲の色に身を染める。	通学路で四季をおぼえたクレヨン画 通学路で四季をおぼえたクレヨン画	社訓にも承服できぬふたつ三つ 豊中市 滝 北 博 生調にも承服できぬふたつ三つ	朝夕にケンカしながら支え合い 無概むような話に惹き込まれ のでないが様子見ようと出す薬 のではれるだろうと聞き流す のではいるがら支え合い のではいるがら支え合い。 のではいるがら支え合い。 のではいるがら支え合い。 のではいるがら支え合い。 のではいるがら支え合い。 のではいるがら支え合い。 のではいるがら支え合い。 のではいるがらするがらする。	豊中市 井 上 直

光

次

史

子

人の倍働いて今あきまへん生きている実感賞うラッシュ時後ろ姿目にやきつけておく別れ孫の来た時だけ爺になる傘寿いつのまにこんな年にと五月晴	大木市 島 元 ふ み間のであって友と花見酒 大木市 島 元 ふ み間のであると活力運んでよりでめと書いて葉桜も入園料である。 これ かい の	大きにて手からを襲してる 無記名で字の存在を知らしめる 先進国余暇に読書は欠かせない こころまで握手をしない友と酌む とろとろといのちを削る癌細胞 一次木市 藤 井 正 雄窓際が雲と対峙をしてる午後 雛祭りワインで祝う世代の差 兄嫁が旬を届けるくに便り 国宝の落語ラジオで聞く夜長	
勲章を欲しいと思う猫のひげ頭はこと考えて時計の音を聞く連体が済むと老人動き出すのではないか	寝屋川市 江 口 度のでは、 のというである観光地で、 のと、 では、 のと、 では、 のと、 では、 のと、 のお酌で、 のとなり。 となり。 のお酌で、 のお酌で、 のとなり。 となり。 のお酌で、 のまの、 のま	き 史 燃 ねっとく 図目にりをえばたいな鑑が男	

遠い想い出麦茶はったい粉の香り	今日といういのち母家の湯にひたり	素直な姪と人間のはなしする	義兄さんに逢ってきました里の藷	仏さんにただいま言ってほっとする	寝屋川市 此	花好きの友居て花のプレゼント	幸せは花と語らうお玄関	亡母さんの姿になった影法師	力瘤大きい方がお母さん	若くなる魔法お願いしてみたが	寝屋川市 平	イエスノーだけははっきり言う寡黙	ようやくに枯れてご苦労さんと言う	言うことを聞かぬ臓器を撫でてやる	無神経と無邪気に少しずれがある	ふりむきざま孫に唇ぬすまれる	寝屋川市 本	綺麗ごとだけでは済まぬ京の路地	達筆にこれは気丈な未亡人	アデランス試着七歳若返る	ダイエット達成出来て無愛想	戴帽へ献身の灯を捧げ持つ	寝屋川市 岸
					柴田						十松						森						严
																							25/121
					英壬子						かすみ						茜						あやめ
家具その他少々捨てる解放感	ちょっと寒くて雨の日がいい人嫌い	たわ事よ人の心で育つなよ	迷彩色たくらみごとがあるらしい	欠席の返事一気に投函す	寝屋川市	退院も造花の命捨て切れぬ	タンポポの炎えるこころを誰が知る	赤ワイン ココア 緑茶と万歩計	単身赴任大工仕事が待つという	雑踏に藁一本を探す旅	寝屋川市	妻の留守驚かされる家事の多岐	妻病んで悔悟と感謝走馬灯	面会謝絶廊下で子らに励まされ	摘出の胆囊片目で凝視する	妻手術関白亭主過去を詫び	寝屋川市	亡き友の帽子をかぶり山男	腕時計見て立ち読みのつづき読む	麦藁帽蟬は怖さを知っている	廃校の門に蔓ばら咲き乱れ	伴もなくトップのくぐる禅の門	寝屋川市
					籠						後						酒						堀
					島						藤						井						江
					恵						黎之助						勇太朗						光
					子						助						朗						子

は 3 b りと浮 10 て見え(明石大橋渡る旅 方市 前 た 怒りた ときも X 妥 協 癖 吹 H 市 Ш 本

海 高 < 橋

千 載 遇 気に島 に灯が点る

震 橋二つ渡ればそこは 度7野島 断層今静 阿 波 0 玉

年金五人橋 のたもとの 洒落た宿

老

枚方市 海

池

洋

深呼吸 万年筆僕 の性格. たくなるよな風景 知 りつくす 画

寝

坊

1

列

車

延

着

証

明

書

手術 して指 本の 有難 3

蟻 なればノルマ減ろうに हिंह 続

日フェ ンスの 時 計 草 花 ひらく

方市

森

本

節

子

にささっ

た釘そのままに

生きてい

る

吹

田

市

夏立

0

だん だんと出番すくなく客ぶとん

クイズ凝る馬鹿になら フルーツでビタミン摂れば果糖過多 ない切手代

思 出 の絵をさがすのに兵庫まで

枚方市

寺

111

弘、

よく 、怒り 出したと気づく六十五

コンビニにそろりと入る六十五

生命 老人会お誘 線見ながら生きる六十五 13 断る六 十五

一当に

駄目な俺かと鏡見る

母 を看 る闇 U とつ抜 计 3 た 0 抜け

舗装路 降 片る嵯 峨 野 路 0 雨 ょ

シル リッチな午後 15 1 シート 美術 のおしゃれ 館 からコ な帽子夕陽浴び 1 ヒー 館

歳月よ 摩 文仁 の若 10 笑 10 击

吹

田

市

JII

喜美子

ホテル の灯 いくさは遠く半 世 紀

冗談 ばんやりと座ってる 0 通 じぬ人といるホ だけ テ 良 Vi ル 仲 間

新緑 iz 価 干 金 深 呼 吸

水やりは心 の癒やし 花 0 朝

好奇心 ロビー 辺り見 までガーデニングという 回し カアー と鳴 < 流

n

恋は 埋み火のごと胸 0 底 吹

 \mathbf{H}

市

茂

見

よ志子

進学 老い 1 ちょ 0 口 0 出 US す幕 ŋ 空 は な 2 ŋ か け

夏 不 -精の背 0 風 去 年を回 な押し 願 にくる青葉風 恙

セミを見たと情景 娘 0 便

瀬

戸 まさよ

38

女坂登り切れない夏の風妻の座も母なる海も遠くなり街に出て京都訛りを風と聞く) と 帝 らて を た の の で 重 い う 区 に 住 ん で の 眼 を 着 き つ け	いつまでもじゃんけんあいこでいたい女どの松も芽が総立ちの意気示す 首都を裾野に移せば少しは広い視野 京都市 都 倉 求 芽	珍本に弘法さんでめぐりあう 珍本に弘法さんでめぐりあう といにゆく吊り橋狂うほど揺れる をいにゆく吊り橋狂うほど揺れる となった。 大阪府 籾 山 隆 盛 四季めぐる燃える列島赤い夏	輝きが曇りはじめた第九条 吹田市 石 原 靖 巳珍客に手早く妻の二三品 吹田市 石 原 靖 巳
エアコンもOFFで達者な里の母背番号じみたカルテのバーコード縦割りの家を赤子が輪に変える	車の糸でいい なにも大きな なにも大きないをそのまま	死にたいよーが豆大福の三つ目をたっぷりの美辞や麗句でめった切り春愁やアドレス帳に引く朱線富山市 舟 渡 杏 花	年老いて日々正論は嫌われる 年老いて日々正論は嫌われる 京都府 稲 葉 冬 葉乗り越した訳は話せぬ精算機 京都府 稲 葉 冬 葉	京都市 大 河 未佐子車両下タンポポ首をすくめてる 電本経にのばす指のさき がは子の転勤先に絞りこみ がは子の転勤先に絞りこみ 京都市 大 河 未佐子

口ほどは動かない手の庭仕事	チューリップだけしか知らぬ人といる	ふた親を失くしふる里遠くなる	欲のない明治の母に死の化粧	極楽に行きつくまでの長い日々	可児市 板	石川門を見上げて往時を追想す	平凡な返事で妻をすねさせる	アルコールが最後の決意してくれる	情けなさ今更脱藩できぬ会	胸襟を開いたあとの親密さよ	羽咋市 三	飲むほどに抑えの効かぬ鬼がいる	やいやいと小言も愛の裏返し	腹決めてからの素顔がいさぎよい	逢魔ヶ刻と教えはじめている白髪	曖昧な挨拶 阿吽ともいえず	富山県増	友達に叱られ止めた頭痛薬	手を拭くと忘れてしまう手の汚れ	チューリッブ散って連休明けとなり	逢い引きが三途の川と言われても	守護霊がまた一つふえ花明かり	富山市島
					山						宅						田						
					ま						ろ						紗						ひか
					み子						亭						弓						る
花つけていた雑草は残される	満開の桜に免じ許される	豪放な人で汚職に名を連ね	男みな児に戻りたい子供の日	ストレスが散るなら法螺も吹きたまえ	横浜市 菱 田 満 秋	雨続き大きめの傘持って出る	過信した蟻青虫をもて余し	ほととぎす良い子が育ちけたたまし	一撃で仕止める女の蠅叩き	あと二キロ痩せろと医者は言うけれど	静岡県 薗 田 獏 沓	万緑に明け暮れ老いの命哉	みどり緑寝椅子の窓は茜富士	晩年はいいちこ酎が常備薬	FMはシューベルト玄関はブザー	初夏を呼ぶみつばつつじの映えて生き	富士宮市 渥 美 弧 秀	ムカついただけでナイフが人を刺す	気持ちよく貰ってもらう難しさ	正直に生きたは自慢にもならず	自慢の子は東京にいる畑仕事	大概のことならしかし金は駄目	大山市 早 川 盛 夫

海原に希望を託す川がある	花吹雪月もおぼろな津軽三味	頰杖を組めば鳴り出す古時計	定刻を五分遅れのバスが行く	朝風呂が続き桜の陽気なり	弘前市 小 寺 花 峯	結論は出ずなにはともあれ飯を炊く	春の風鳶に貰う大きい丸	椿落つ秘すべきことは秘すべしと	生きのびてブラックホールにたどり着く	平々凡々老いゆるやかに眉をひく	弘前市 佐 治 千加子	葉桜も五千本なら日本一	城垣の矢傷の跡に散る桜	花冷えを部屋の中まで持ってくる	飲む前にごくんと鳴った花見酒	花便り津軽三味線浮かれ出す	弘前市 中 山 雅 城	勲章は額に納めて飾ってる	ネクタイを外して目口話し合い	連休明け赤信号へ大あくび	海外旅行キャスター付のトランクで	三面を賑わしている十五歳	仙台市 川 村 映 輝
極楽で鬼も和みの酒を酌む	弘前の虹放映されて和む朝	病窓の我が家辺りに目を凝らす	山笑う森で憩いの握り飯	新芽摘むわれに大らか山笑う	弘前市 岡	西空は明日の命の絵の具皿	むしゃくしゃを入れる屑籠買いにゆく	なんとなく生きた背中の曲り癖	人間に哀しい責めの痴呆症	ローカル線視野の広さに牛が寝る	弘前市	褒め言葉だけはすとんと胃に落ちる	壊すには惜しい見事な蜘蛛の巣だ	忘れん坊だから節目に石を置く	親馬鹿のバカなら少し許される	渦を描く夫婦の長いものがたり	弘前市 高	ぬるま湯に浮き輪のままの五月病	漫才のドボンジャボンに落ちがない	熟年の背伸びが墓穴かも知れず	田植後の米価の季節今は過去	還暦の切り取り線と言う老後	弘前市 相
					本						戸						瀬						馬
					花						"						霜						銀

石

波

ネ

匠

障害を汗と涙で減らしてく	作業場が狭いが通す一輪車	寒いねとセーター着込む初夏なのに	晩酌を休んで酒の味を知る	花よりもだんごの人は葉桜で	十和田市 小笠原	置炬燵睡眠薬が入れてある	万札を入れて背広が軽くなる	日曜日首輪もとれてよく眠り	家計簿が黒字昼寝の癖がつき	携帯電 社長気分で胸を張り	弘前市 須 郷	葉桜の輪廻に光る陽を乗せて	まんまるな赤い太陽花ぐもり	水仙の咲くこの川は今が旬	咲きたての薔薇は切れない花鋏	まんさくの目立たぬように山に溶け	弘前市 福 士	摘み頃を孫に伝える春の野辺	毛虫焼く殺生戒にさからって	花吹雪く老いも若きも酔い痴れて	春眠の手元を滑り落ちる本	花の種子蒔く一隅をねんごろに	弘前市 高 橋
											井						一慕						岳
					人						蛙						情						水
失																							
入速のわたしに青い空がない	握られた弱み左遷で返される	峰打ちでうしろ暗さが落ちました	千鳥足風にぶつかりながら行く	歩道橋ヘッドライトが川になる	砂川市 大	肩車して青空を摑ませる	男一匹買い物籠を下げてゆく	夏だから水族館でデートする	アルバムを開けば飢餓の物語	神でなく仏でもなく人愛す	青森県西	男性もつるりの肌にする時世	一杯でぴたりと止んだ手の震え	悲しくてスープのように出る涙	東にも西にも好きな女がいる	下心あるとなかなか酔えません	黒石市 相	老眼鏡かけ指のとげ抜く母の愛	銭湯は子供にマナー教える場	耐え忍びやっと咲かせた夫婦花	して聞い	ありがとう素直に言える子に育て	十和田市 阿
速のわたしに青い空がな	られた弱み左遷で返され	打ちでうしろ暗さが落ちまし	鳥足風にぶつかりながら行	道橋ヘッドライトが川に	川市 大 橋	車して青空を摑ませる	一匹買い物籠を下げてゆ	だから水族館でデート	ルバムを開けば飢餓の物	でなく仏でもなく人愛	森県 西 谷	性もつるりの肌にする時	たりと止んだ手の震	しくてスープのように出る	にも西にも好きな女がい	あるとなかなか酔えませ	石市	眼鏡かけ指のとげ抜く母の	湯は子供にマナー教える	え忍びやっと咲かせた夫婦	ぬ振りして聞いてやる聞き上	りがとう素直に言える子に	和田市
速のわたしに青い空がな	られた弱み左遷で返され	打ちでうしろ暗さが落ちまし	鳥足風にぶつかりながら行	道橋ヘッドライトが川に	川市 大	車して青空を摑ませる	一匹買い物籠を下げてゆ	だから水族館でデート	ルバムを開けば飢餓の物	でなく仏でもなく人愛	森県 西	性もつるりの肌にする時世	たりと止んだ手の震	しくてスープのように出る	にも西にも好きな女がい	あるとなかなか酔えませ	石市 相	眼鏡かけ指のとげ抜く母の愛	湯は子供にマナー教える	え忍びやっと咲かせた夫婦	ぬ振りして聞いてやる聞き上	りがとう素直に言える子に	和田市 阿

「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」「大きない」	役易の明からの酉ごりもな位無冠ゆれたりはせぬ象の念のみぐるみ闇を搏つ蛍の本の素肌と思う青畳の本の素肌と思う青畳	あやまちをおかすと青い実が落ちる念仏を唱え少うし楽になるで東があって油断をしてしまうさっそうと女が仕切る鏡割り	美弥市 光る日を信じて今日もみがく石 平凡になってしまった胡蝶蘭 平凡になってしまった胡蝶蘭	を 大陽は赤だと現実見ずに言う 大陽は赤だと現実見ずに言う 大陽は赤だと現実見ずに言う	
時	三	5	安 平 欠	川 矢	
広	宅	2	次	崎 野	
_	不	5	弘、	ひ	
路	朽	ì	道	か り 雲	
種まく一期一会の土かの旅に青空澄み過ぎれの旅に青空澄み過ぎ	娘になってか急にそぼそとめおとで品な電話の声に思い案が浮かばずゆ	切り札に金庫のキーを握ってる膨らんだ頼っぺのキスは乳臭いユーターン切り札にするブーメランストローで吸いすぎている缶の底	松江市消すことへのあせりだろうか水の音部屋の灯を消すとあなたがよく見える無言より重たいものが見当らぬ素人の皿真っ白な音たてる	紅絹裏に亡母の幻追うている 単立つ子の部屋に大きな世界地図 単立つ子の部屋に大きな世界地図 製萌え道草しているランドセル 岡山県	
富	浦	4	安	川 福	
H	377		^	本原	
Щ	辺		食	27.0	
蘭	静		友	悦畔子	

小心だから爛漫と咲く花が好き	隙間風まだまだ亡夫が胸に棲み	春風に淡い夢抱き紅をさす	好きと言う心が彼を縛りだす	米子市	お人よしの梟ただ今昼寝中	ボウボウと身内を走る風の音	あの時の風紋決して忘れない	かたち見て信じて仕舞うくせがある	米子市	ストレスは寄せつけまいぞ鬼あざみ	ゲートボール旅の終りの舞にする	がんなのか蕾のままの落椿	愛の手にひかれて登る寺まいり	米子市	聞き役の兵は一人のハバロフスク	半世紀過ぎて心に散る桜	百寿とか神様おぼろになさってる	羽衣を掛けた松さえ忘れてる	出雲市	不美人にお金があって鶴に化け	正論の子に負かされたのが嬉し	きっぱりと言えと言ったらこの騒ぎ	古く生き壊れかかった時計に似	出雲市
				永					中					茂					石					板
				井					井					理					倉					垣
				三津子					Ø					高					芙佐子					夢
				子					き					代					学					酔
ς.) ε.)	胡	楽	-																					
寝顔卆寿の母はどんな夢	瓜トマトが庭の一番席占める	不しみは小さなわが家のハーブ園	耳に鶯 水田へ白雲 風みどり (美山町にて	神戸市	天国の亡母へ雲雀を使者に出す	恋人を求め雲雀が空に舞う	我が姿水に映して衿正す	後輩がどんどん迫る椅子の位置	鳥取県	夢やぶる雷 初夏のおとずれか	花野から私をさそう風がくる	野心等抱かぬ瞳が愛らしい	いのちある如く渓流岩をかむ	鳥取県	同級生の退院聞かぬ六ヶ月	活魚煮る愛に犠牲はつきものよ	お祭の余韻三日も食べている	手抜き粥もう作るまい余命見る	鳥取県	行儀よく夏用布団掛けたまま	セパともに逆さ首位行く元チャンプ	トラキチの俺に雲間の薄明かり	女性とは雀百まで信じます	米子市
	トマトが庭の一番席占め	しみは小さなわが家のハー	に鶯 水田へ白雲	戸	国の亡母へ雲雀を使者に出	人を求め雲雀が空に	が姿水に映して衿正	輩がどんどん迫る椅子の位	鳥取県幸	やぶる雷 初夏のおとずれ	野から私をさそう風	心等抱かぬ瞳が愛らし	のちある如く渓流岩をか	取	級生の退院聞かぬ六	魚煮る愛に犠牲はつきもの	祭の余韻三日も食べてい	抜き粥もう作るまい余命見	取	儀よく夏用布団掛けたま	ともに逆さ首位行く元チャン	に雲間の薄明か	女性とは雀百まで信じます	子.
	トマトが庭の一番席占め	しみは小さなわが家のハー	に鶯 水田へ白雲 風みどり	戸市	国の亡母へ雲雀を使者に出	人を求め雲雀が空に	が姿水に映して衿正	輩がどんどん迫る椅子の位	取県	やぶる雷 初夏のおとずれ	野から私をさそう風	心等抱かぬ瞳が愛らし	のちある如く渓流岩をか	取県	級生の退院聞かぬ六	魚煮る愛に犠牲はつきもの	祭の余韻三日も食べてい	抜き粥もう作るまい余命見	取県	儀よく夏用布団掛けたま	ともに逆さ首位行く元チャン	に雲間の薄明か	女性とは雀百まで信じます	子市
	トマトが庭の一番席占め	しみは小さなわが家のハー	に鶯 水田へ白雲 風みどり	戸市山	国の亡母へ雲雀を使者に出	人を求め雲雀が空に	が姿水に映して衿正	輩がどんどん迫る椅子の位	取県幸	やぶる雷 初夏のおとずれ	野から私をさそう風	心等抱かぬ瞳が愛らし	のちある如く渓流岩をか	取県 津	級生の退院聞かぬ六	魚煮る愛に犠牲はつきもの	祭の余韻三日も食べてい	抜き粥もう作るまい余命見	取県 吉	儀よく夏用布団掛けたま	ともに逆さ首位行く元チャン	に雲間の薄明か	女性とは雀百まで信じます	子市 本

肩車した子の肩に背負われる に対すりきな道を行く を軽いジョークで受け流す デュエットで溜息をつく老いの日々 デュエットで溜息をつく老いの日々 大阪市 うの花という名にひかれおから買う までいまに腐るよエルニーニョ 列島がいまに腐るよエルニーニョ	大阪市 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	意気投合していたときは酔うていた 意気投合していたときは酔うていた	海れ衿ショヤレ	和狄山市
渡	井	米	三	夏
沿	上	田	宅	亰
8	白	恭	保	公
さ と 美	峰	昌	州	子
アメリカ村奇人変人否ファッ 対来の田舎みやげに亡母重ね 対来の田舎みやげに亡母重ね 対来の出きみやげに亡母重ね が、 対に夕立さけてハイキング 対はまるでなま 素し素しと外気はまるでなま 素しましと外気はまるでなま	た本ほた	政治より選挙準備の参議院朱雀門昔の人の技が冴え	蝶羽ばたく迷路になっれかけなりないンサムを鼻にかけないまれずれで守っていまった。	
高人変人否ファッション みやげに亡母重ね さけてハイキング さけてハイキング 大阪市 レベータのごと降りる 外気はまるでなまり色 外気はまるでなまり色	阪 居	を 表議院 大阪市	たガラス窓たガラス窓	大阪市
り りり 大 ショ	阪市る	議院 シギャル 大阪	たがラス窓	大阪市 小
り り も を 市 ・ ンョン	居る 松	議院 え シギャル 大阪市	たがラス窓 大阪市 清	市
り り も も も 田	居る 松 尾 柳	議院 シギャル シボャル 大阪市 藤	たがラス窓 大阪市 清 水	市小

九条無視少し煽りがすぎないか町かわく本屋がひとつまた消える良心に問われてひとり手を上げる心きめ全て許した空の青	1 55	みし融橋	おさかに手が子に手が	だざいだけ はいい かいこれ はいい に 雨変化あい に 雨変化あい に 雨変化あい ない に 雨変化 あいか ごは 母の 膝な
岩	i	池	柿	寺 奥
佐		田	花	井田
タ ン 吉	•	寿 美 子	紀	東 良
吉	8	子	紀 美 女	雲 子
ライバルも背伸びしたまま歩けないいろり消え故里水洗トイレなり体にはどうあれ心に満たす酒く生享く草の抜きやすし腐葉土に生享く草の抜きやすし、八尾市	尽しても尽しても目は硝子玉この頃は生きる年数かぞえたりあの時の話そうそうあれっ切り桜吹雪別れた人を思い出し	国のためだけは私に義理がない一合で泥を吐き出す縄のれんを引れ薬の詰め合せ	直ぐ顔に出てくる薄い面の皮悲しくて五臓六腑に浸みる酒頭から突込んだのは破れ傘の年期にもどして貰う渡し舟	の日を祝いの嫁とちらし約へ手数かけたと言う利月の婚に結納急ぎ足
内		植	井	小 藪
海		村	上	池 野
幸		喜	喜	しばい
生		代	酔	げ い 子

梅雨晴れ間黄門気分二人旅新名所平城宮跡朱雀門平成も平安同じ恋心	交野市 よい香り酔わしめ給えエンピツよ エンピツに如開く夢を貯めているエンピツに鉢巻させて	東大阪市 後悔の腕組み直し飲み直し 後悔の腕組み直し飲み直し	東大阪市他愛なく夏の風邪引く夕ごころ ひそやかに女心くすぐる衣替え 切るがまま生きる幸せ葉の桜	八尾市 いま時に美味しい話信じない ここ一番女は的を外さない ではいるとのである。 八尾市	八尾市
	山	安	森	長谷川	篠原
	Л	永			41
	出	暁	愛	春	つふみ
	出子	子	論	蘭	4
定年の間	つ出岸二 ら世壁で の	トラヒラ 大風呂敷 とラヒラ	五 新 明 幸 月 緑 日 せ	あ 梅 美 び そ ん	
定年の鬱を癒してくれた趣味油断した花へ突然来る寒波いじめから逃れる擬態毛を染めるあっさりと子供に還す古写真	つらい別れ急き立てている発車ベル出世競うふたりに明日の夢がある岸壁で男泣きした復員日二度の職決まりほほえむ台所	のスーツで悩みかのストレス見事赤のストレス見事赤	五月晴れ雲の流れや鯉幟 新緑へ連休末日の露天風呂 明日生きるために飲みほすコップ酒	を持ちたし全快に を持ちたし全快に を持ちたし全快に を持ちたし全快に がそんでた力顔みせ夏近し	吹田市
鬱を癒してくれた趣味た花へ突然来る寒波がら逃れる擬態毛を染める	日の夢がある 日の夢がある でいる発車べ	ヒラのスーツで悩みかくせないさいのストレス見事赤いろに きが包んでありそうな	暗れ雲の流れや鯉幟 へ連休末日の露天風呂 へ連休末日の露天風呂	しい箸を持ちたし全快さくらに劣るわけは無の魔術一念若返り	H
鬱を癒してくれた趣味た花へ突然来る寒波がら逃れる擬態毛を染めるりと子供に還す古写真	日の夢がある日の夢がある	市いる	晴れ雲の流れや鯉幟 へ連休末日の露天風呂 生きるために飲みほすコップ酒 は妻の寝顔にほだされる	しい箸を持ちたし全快さくらに劣るわけは無の魔術一念若返り	田市
鬱を癒してくれた趣味た花へ突然来る寒波がら逃れる擬態毛を染めるりと子供に還す古写真	日の夢がある日の夢がある日の夢がある	市いる	晴れ雲の流れや鯉幟 寝屋川市 太 田生きるために飲みほすコップ酒生きるために飲みほすコップ酒	しい箸を持ちたし全快にさくらに劣るわけは無しさくらに劣るわけは無しでた力顔みせ夏近し	田市栗
鬱を癒してくれた趣味た花へ突然来る寒波がら逃れる擬態毛を染めるりと子供に還す古写真	日の夢がある日の夢がある日の夢がある	市いる	時れ雲の流れや鯉幟 寝屋川市 太生きるために飲みほすコップ酒生きるために飲みほすコップ酒	とい箸を持ちたし全快にさくらに劣るわけは無しさくらに劣るわけは無しでた力顔みせ夏近し	田市 栗 谷

新緑に輝く寺の中に居る	我が孫がフリーライターだと自慢する	偽善者の笑い影あり淋しそう	金満国まさかまさかの不景気に	池田市 岡	正体が分かって見ればお父さん	高望み順調な道閉ざされる	控え目な嫁で納まる家の中	虎の子をちょっと貸してとのせられる	豊中市 松	頭から割り切る世相除算九九	欠点と後ろ姿の見えぬ老い	戦友会散骨論議よもすがら	ハスキーと毒舌丹下卯の花忌	豊中市湯	Xジャパン検証しつつ魅入らるる	改めることなく裏へ返すだけ	花畑ふとネガティヴの図に変る	春の青どれもいのちが透けている	豊中市 吉	微笑めばほほえみ返す野の仏	休耕田狭い日本なぜ荒らす	世界一日本驕りの橋をかけ	熱狂のグランドきっとタイガース	寝屋川市 坂
				本					岡					浅					田					上
				吉					久					馬					あが					高
				吉太郎					久留美					洗					あずき					栄
焼肉のタレは三通り用意する	梅雨前にダム満水のよい知らせ	風邪声と言われ弁解楽になり	寝乱れも残してふとん陽に干され	横浜市	ライバルの笑い話に罠がある	丸木橋渡ると聞ける戦火の詩	言い勝って少年の夢萌える青	親思いのたけの子天を仰ぎ見る	静岡市	端切れまだ使いようある座りだこ	初夏の風ミニがいきいき濶歩する	ひと言で別れた愛は何だろう	道昏れて残像ひとり家路つく	大阪府	出稼ぎの心は遠いちぎれ雲	夫婦船時々神の手を借りる	父の日が忘れた頃にやってくる	聞くだけで見たことのない処刑台	箕面市	人の世や職退いてなお切れぬ義理	日本一の幅の滝かも西梅田	初夏ですね筍ご飯木の芽和え	遺すものないのに遺書を書けという	箕面市
				清					安					八十					椎					岩
				水					本					由					江					津
				潮					晃					洞					清					よう

庵

授

華

芳

浜 市 後 藤 早. 智

猫年白若 やに は され n 都 会に 交代 なじ 劇 演 8 な V

度樺 0 瞳末が 我が が ボ クの 家も空気入 つぶやき聞 n 変 b 3

出 掛 け に 着 いている 浜 市 菊

政

勝

机に知恵に黙殺され をうか がうように猫 7 心が溢れてるれたタマゴック P < 彭 0 かい 覗 無いと言 < 地

ごお

嫌

前 市

庭 順 風

か n

外吹暗

雪 碓

< に

土

地

譲

渡

0

温

13

主か

乗り

カチ

カチカチと音ば

2

似 日

ても 0

似

てない

大 心

地

±

地

取

得

そこ

で

D

ダンは考え

窓 流

0

行

E

市 1 枝 3 さる

前

女一人 い出 0 きれ せ な 40 10 ごと クラス会

協

せ

ぬ

フ妥 満 ル ネー ですちち 4 思 が 育 てた藤 0 花

老 二人息災祝う子 供 0 H

島

昭

治

〒 事 懇 会

610 前投0121 句 親

n 居 で亡 妻 E 0 想 Vi 出 嚙み L め 戸 3 市

佳片 親独 切 な看 さんチョコ 13 生 きて 婦 3 さん 証 0 に直 お 何 礼は天国 で惚 n 0 る

> 風景 虫宿 長 誘 に話 も訛 i に 花 無職 いりも変 せば退院遅 0 魅 力 b Vi n 魅 7 くなり 旅続く せら れれ 7

2 都 大 路 Ш 柳 社 立 20 周 年 記 念 JII

大

8 月 30 日 せてお 柳

事がおころ 句 か グルー すま京都ホテル プ創主 (母食をすま) 石四 条鳥-越しください 久夫 200

くちびる」 効 < 板峯大樋山阪小奥 木口本本山山 希高紀晴 30 謝 選選選選選氏

す

伏豆恋消

歌

各題2句 出席 者 10 限 る 締 美 裕 岳 子 郎 切 13

宴費 2000円 各題秀句に呈 6 0 0 0円 申記 賞 込念 一み制 品品 . 発表

誌

城 懇親宴 陽市寺田深谷 0 0 申込みは7月 7 4 8 5 58 3 31日までに 中林 6 7 3 酔 3 虎 左 記

都 大 路 JII 柳 社

主

訪 柳

17

諏

— 50 —

野 田 素 身 郎

お 兄 ち 誕 頑 生 張 H n 本 中 かい 負

it

るなよ

西

 \mathbb{H}

柳

宏

子

め ŋ 邓 出 抜 鶴 背 L 1 Щ 泣 柳 だけ 42 てる渓 が綱 L 花 8 坊 出 3 0 n

通

負 切 n ない 願 Va 事 句 碑

波 多 野

庵

Ŧi. 楽

痍 終 着 駅 0 静 不か 倖に サて

大丈夫 雨 トンネルを数 0 H へですよがい は া 0 でえ忘 傘 怖 持 れた痴 Va 0 医者の 呆 症

t へじと書 Vi てお

村

女

-51 -

真母喪母の逝がの かい 先 明 0 夢 て六日 E 孫が 7 1 畳 ま 度 た 手 0 か タイ を出すお菓子盆 間 見 て喪 な

ガ もな

1

スの旗を振

n

かい

明

17

空耳でよし桜ちる音聞

軽石 木の

0

ような男の

顔う

3

43 か

7

V

る

ささや

かな幸

せ

を幸

せとす

3

IF.

本

水

客

千

満

創

過

一労

手

抜き料

理

が

増えてくる

なにくそと長

雨

0 窓開け

はなつ

芽和え春を見送る色とする

通 う 言 葉 12

IÍIL

作 直 0 ij で は な 満 足 10 とや をせ 0 82 n 0

執 手 素

念

かい

傍の

石

12

L

お

1 路

12

利

П

\$

馬

鹿 T

もいて楽し

ぱ腹心 満

虫つ

味

か 古 がない

奥 谷

弘

カ

ルテにもへのへの

朗

露 去 す をすべ べて包

さか 細

B 1

b あ

ず

1

一気飲 母

て見 少年 3

T E 坂

12

る ル

0

お

茶 2 10

13

は

亡

母

思

天風呂私ひとりへ螢飛 2 0 女強 3:

\\circ\rightar	~*************	*********	\$55\$55\$55\$55\$55\$55\$55\$5
トレードマーク白髪ぼさぼさひけらか生りには遠くニックネームは変えられ生中の芽信じ育てる水を遣る土中の芽信じ育する水を遣る	か老獪か	月 強い風吹く鉢植は避難させ 強い風吹く鉢植は避難させ が が が が が の に で が の の の の の の の の の の の の の	恒 お節介が過ぎた入れ歯を責めている 勝つれて人妻と逢う喫茶店 神のいい話ほのぼの聞かされる 中のいい話ほのぼの聞かされる
かれすぬ	村	原	井 松
	太	宵	文 叮
	茂津	明	秋 紅
金のこと以外の無理は聞くつもり運命のいたずら破談に押込まれ運命のいたずら破談に押込まれることは、	汚職記事朝から腹が煮えてくる ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	山門のエンマに笑顔返しとく雨の日はどないしてるの小雀よ雨の日はどないしてるの小雀よっかの鳥神つづれ織に舞う一行の日記も何時かは役にたつ	本都松江橋の多さも城下町 本都松江橋の多さも城下町 を開い欲望が過ぎるとわが身沈下する を開いな望が過ぎるとわが身沈下する を開いな望が過ぎるとわが身沈下する
	辻	小	松る藤
	2.	林	川 井
	白渓	当	杜明
	1/4		

子

的

朗

ロン グラン 遠 Ш П

住

ŋ 4 が n 歩 42 朝 かい 来 3

足信年母 跡 心寄 は 0 太鼓 隣 + 0 で五 猫 今 に 年 ち 時 かい 42 起 ばめ to こされ 12 来てくれる る

+

i

0

高 杉 鬼

退 あきらめ

屈

な鬼

です

脚 V 0) 抜

0 0 過 17

爪

を切

븹 知 言

力

僕

去までさら

17

出

す

らめがが

13

も齢

0

#

10

か

6

X 调

間

母

10

披

露路

Va

游

 \mathcal{T}_{1}

月

0

花

と大

な

友と背

凭

れべ

チ

(チボリ公園

木

Ŧ.

星

6 事

車

親 切 な列に 見なが 四 一人で 何る観 紛れ 覧

夜 П 転 かい 舞う不思 木 届 議 か な 2 ことが グラス通 淋 らせ Vi

7

友だち しあ

が

たんとい

3

ので生きら

n る

小

西

雄

17

b

せと思

12

寂

13

とも

思

42

<

n か

れないも さるの

失楽園

遙か

ŋ

程

度

かい

b

か

3

核

0

ですうちでは

妻もキ \$

+ な

ミソ

1

ル

D 0 糞 n そうじす と地 球 かい まわ 春 0 るとこに

<

住

2

III?

内

天

笑

蛾 束 幼虫でござい を破る快 似 た農薬が 感 知 まし るや 近所 きみ たか夜盗 から

中

浅知 新世

恵でこころ開

け

いど負

0

思考

鬼女と逢う

甪

0

風

か

騒

気ぎだす ば

紀

0

青写

真

ならできてい

かめ

言

葉より

É 囲

寸

志を喜

n

夢二つ

0

ポ

4

"

1

外人と話

かい

出

来る 腐

疎 湯

水端

き残るさつき彩どる無

鄰

庵 来

西

線

京

0

風

情

を変えて出

(塔の会吟行

黒

JII

香

3

どり

湯

豆

0

の塔が浮く つつも

葉若葉黒谷さんの

選者交代の お 知 5 せ

を交代します。 6 年度替りにつき、 水煙: 抄は河 内 天笑 7 月 15 苘 香 日 0 締 花 切 は 西 九 出 月 極 묵 楽 発 表 選者 分

か

き 7 3 1)

> Sp 萬

萬

的

-53 -

JII 柳太平記 (242) Ш 柳 尾 σ 群 像 東 野

年2月15日のことであった。 年2月15日のことであった。 年2月15日のことであった。 年2月15日のことであった。 年2月15日のことであった。

日頃愛用している博文館のダイアリー・ソートの中型日記とそっくりの大きさ厚さの、アトの中型日記とそっくりの大きさ厚さの、方ぬき出し、何度も何度も拾い読みしては、(藻介さん、あんたはんまで先へ行きゃはったんや、なんでや、アホウやなあ)たんや、なんでや、アホウやなあ)と改めて原稿用紙を展げると熱いものが老いと改めて原稿用紙を展げると熱いものが老いの眼から滴り落ちた。

にわたり、彼と川柳の因縁ごとが細かい活字

(いささか長文だが寛恕ありたし)と記してある。以下はその藻介生涯の要約と記してある。以下はその藻介生涯の要約と記してある。以下はその藻介生涯の要約といささか長文だが寛恕ありたし)

「昭和16年23歳の春、偶然という必然によって『川柳』の雑誌に出あい、以来45年間を用で舞鶴の海軍火薬廠へ。終戦後28歳で結婚用で舞鶴刑務支所(今は廃止)に刑務官でし、東舞鶴刑務支所(今は廃止)に刑務官でトした。転勤八回、近畿一円を渉り歩いた。トした。転勤八回、近畿一円を渉り歩いた。思えば発表誌も句会もなかった戦中、戦後思えば発表誌も句会もなかった戦中、戦後の数年を除いて、よくもここまで川柳に熱中してきたものだと思う。抒情詩風の川柳の真

励まし葉書は今も私の宝物である。れの人大山竹二の訪問も果たせた。何枚ものふあうすと調全盛の中で軽味を模索した。憧

古書店の棚から『監獄夢物語』(明治44年 古書店の棚から『監獄夢物語』(明治44年刊)からの奇書を引抜いて、小諸寧三の隠し刊)からの音書を引抜いて、小諸寧三の隠しつた房川素生さん。このお二人から『ほんもった房川素生さん。このお二人から『ほんもった房川素生さん。(中略)

人を記すに止める。影響をうけた友人も数あるが、馬場魚介一

〈魚屋の息子で魚介と申し〉は、ただ事を は、おち・てい)と会えば甲斐なきこと 越智楨(おち・てい)と会えば甲斐なきこと を口にする。

処女句集ならそれも許されよう。に、書き留めておきたい人の事にふれたが、に、書き留めておきたい人の事にふれたが、

ら氏の常駐する校正室を急襲することもあっ三窓さんの来訪をたびたびうけた。こちらか三窓さんの来訪をたびたびうけた。こちらか三窓さんの来訪をたびたびうけた。こちらかにの常生が表している。

のはこの人たちの援護射撃のお陰である。を今更必要ないものの、結局出すことにしたを今更必要ないものの、結局出すことにしたといりなくはなかった。句集を出さない理由のはこの人のように句集刊行を勧めてくださる

だただ有難い人達ばかりだった。くれる新家完司さん、西川景子さん、等々たさん。「どんなお手伝いもします」といって

の殺し文句で電話を切った金沢の本多としき

「藻介句集を見るまで死ねない」

例年を越える酷暑の中、句稿整理の仕事に例年を越える酷暑の中、句稿を担いしい。 の念にせつかれて2000句にも及んだ。 「自選句集」の名は、はじめからの願いであったが、「落すべきは落してほしい」とけあったが、「若井三窓氏に句稿を託し、自選の他選で1750句もの句を得られたのであった。その他アドバイスも数知れず、こうしてた。その他アドバイスも数知れず、こうしてた。その他アドバイスも数知れず、こうしてた。その他アドバイスも数知れず、こうして

最後に、お前より先に結婚しているとばかりに、川柳でのわがままを通してきた40年間りに、川柳でのわがままを通してきた40年間た妻常子への感謝を記し、併せて娘三人にはた妻常子への感謝を記し、併せて娘三人には

以上が彼の句集の「あとがき」のほぼ全部だが、あまり長文では、と当方本誌関係者のだが、あまり長文では、と当方本誌関係者のたがら割愛したし、文中で筆者のことにもふれた部分も勝手ながら省略させて貰った。ともあれ、当方は大の藻介ファンだけに「あんたの句集は出したら忽ち品切れになるほどだ。出すなら早い方がいい」

「川柳塔の西尾菜先生も同じことを申されている。そうやな、考えとくわ」と彼はケロリカンとして答える。 と彼はケロリカンとして答える。 と彼は歯科の技工士で五年メシを食った余徳か、おそろしく手先が器用で、頼みもせぬのか、おそろしく手先が器用で、頼みもせぬのいさいのをとりまぜ、三、四個分もハンコを小さいのをとりまぜ、三、四個分もハンコを小さいのをとりまぜ、三、四個分もハンコをいるで、判代はいくらだと何度きいてもありませんので、判代はいくらだと何度きいている。

知れずオロオロする次第だ。

※介さんは、その人懐っこいお人柄の美事 薬介さんは、その人懐っこいお人柄の美事 まねいていて、橘高薫風さんなどは、彼の句 まねいていて、橘高薫風さんなどは、彼の句 まねいていて、橘高薫風さんなどは、彼の句 といえば、今は亡き小出智子さんが筆頭だっ といえば、今は亡き小出智子さんが筆頭だっ といえば、今は亡き小出智子さんが筆頭だっ といえば、今は亡き小出智子さんが筆頭だっ といえば、今は亡き小出智子さんが筆頭だっ といえば、今は亡き小出智子さんが筆頭だっ

ておこう。

短冊をまっすぐにして家を出る 関番鏡この世は夢を見るところ 萬華鏡この世は夢を見るところ 「大声を出すときがくる浮き袋 大声を出すときがくる浮き袋	"""""""
大声を出すときがくる浮き袋	"
萬華鏡この世は夢を見るところ	"
短冊をまっすぐにして家を出る	"
三尺の縄をすくなくとも愛す	"
竹踏んで曲ったことは嫌いなり	"
まが日くまでまが日くこままってい	

《号は 田中 好啓』

カ列はまて氏カ列はとは思れない

ようとしている。畏友三窓さんのお蔭である当初予想もしなかった身分不相応な本が生れ

19

雷 俄雨』

清

博

美

もある。 もいわれ、 が常である。また、夕立は馬の背を分けると ように降り、一時間ほどでからりと晴れるの 空をおおい、大粒の雨が地面をたたきつける を引用すると、次の通りである。 夕立は、盛夏の午後も夕方ごろ、積乱雲が 夕立について、『日本国語大辞典』の説明 ら夕方にかけて降る。夕立の雨。夕立雨 降る大粒の雨。多く雷鳴を伴って午後か 夏に、雲が急に立って、短時間に激しく 極めて局地的、集中的に降る雨で

> く、夫より一両日も雨降りつべき、湿気の様 たようでもある。 だが、当時はいやに歯切れの悪い夕立が降っ る様に覚る」と。この記事は文化年間のこと に成、雷気いつ迄も止間なく、以前とは違た 曇り、大雨大雷大風にて、間もなく静に成、 元の快晴に成しも、近来初は同様にて晴間な 『続道聴塗説』には、「此程途中白雨(ゆ

急ぎ路傍なる、陋店に立入て、しばし茶煙を せり。余が今日の心境と符合せし事、一奇と 東都滑稽作者六十五翁立川談洲楼焉馬』と題 ぬれまじ物を夕立の跡より晴る、堪忍の虹 図を模写せし雨やどりの上に、『いそがずば 喫しける内に、青天となりぬ。其床に掛たる ふだち)に遇ければ、爰こそ古歌の場所よと 一幅を見れば、北嵩といふ画士が、英一蝶の

記している。「昔夕立と云ば、天俄にかき ったものらしく、『飛鳥川』は、次のように

この夕立にも、時代により多少の変化があ

が記されている。 と、風流人が夕立に閉じこめられた時の模様 ても、総じて事は心静に時節を待べきなり」 いふべし。堪忍の虹、滑稽賞すべし。是に附 夕立や田をみめぐりの神ならば

宝井其角雨乞いの句として有名。

夕立を四角に迯る丸の内 夕立にとりこんで遣ルとなりの子 夕立の戸ハいろく、にたて、見ル 一江戸時代の丸の内は武家屋敷。ここで夕 遊んでいる隣の子を抱きかかえるように 家の中へ。下町の人情。 しかし全部閉めると真っ暗。隙間をあけ 夕立の雨が降込むので、雨戸を閉める。 ことになる。丸と四角の縁語仕立ての句。 たり、雨戸を横に寝かせたりの苦心惨憺。 立にあうと塀伝いに枡形に沿って逃げる

井戸掘は夕立チか来てふたをされ 夕たちにあふと女ハすたる也 夕立が井戸の中に降込むので、 を入れたまま蓋をする。 明元礼4

夕たちに馬を半ぶんぬらす也 に濡れて目も当てられぬ姿になる。 が、女はそうは行かない。着物や髪が雨 男なら裸になって駆け出すことも出来る 6

56

「夕立は馬の背をわける」の諺

の雷

生する。ごろくくと大音響をも発する。神鳴 いかずち、雷鳴 の午後などに多く、入道雲の上昇気流から発 表との間に起こる放電現象が雷。蒸し暑い夏 電気を帯びた雲と雲との間、或いは雲と地

逸、という判断があったのであろう。 句にあたっては、市民の家庭生活を描いて秀 ながら、やっと子供を捕まえるという句。選 の真似をし、「お臍を取られますよ」と言い うとするが、裸の子供は逃げ回る。そこで雷 えられた句で、人口に膾炙。腹掛けをさせよ 頭句「五番目ハ……」に次いで第二番目に据 様。しかし良く的を得た想像でもある。 が科学的に解明されていない時代の想像の神 特に人間の臍を好む神様。雷という自然現象 褌をしめ、連鼓を背負ってこれを打鳴らし、 かみなりをまねて腹かけやつとさせ この句は、『誹風柳多留』初篇第一丁、巻 かみなりさまは、雲の上におり、虎の皮の 初2

初もの、内でかみなりいやなもの るのだが、雷だけは別 初物と言えば大概は物珍しさから喜ばれ <u>-</u> 15

> 雷リか鳴ルとつんぼハ目をふさぎ 神鳴にとなりへにける壱人りもの つんぼうハ光とばかりおもつてる - 一人では心細いので。 一耳の不自由な人には、稲光だけが目に入 宝十二義2 明二礼7 三四15

かミなりか止ムと姑いひり出し いびりを始める。 雷が止むと、とたんに元気になって、嫁 安四満2

0 俄雨

二度も辞典を引用したかというと、夕立と俄 らである 雨は別物ということをはっきりしたかったか なくやんでしまう雨。驟雨」とある。何故、 あめ」の項を見ると、「突然降り出してまも 再び『日本国語大辞典』を開き、「にわか

にましたる宝船の有べきや。見ぬ嶋の鬼の持 し隠れ笠・かくれ蓑も、暴雨(にはかあめ) 天が下に五つ有。 それより外はなかりき。 是 程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事、 書出し間もなくに「ひそかに思ふに、 かろうじて、西鶴の『日本永代蔵』巻一の 世に有

> 付け得た程度。しかし、川柳にはこの俄雨の それが、の家職をはげむべし」とあるのを見 句は非常に多いのである。 の役に立たねば、手遠きねがひを捨て近道に、

張物をいけとりにするにわか雨

8

にわか雨せ戸ものうりハ常の足シ 牛かたのあきらめて行にわか雨 子供から先キへ取り込ムにわかあめ 牛が相手ではあわてようもない。 外で遊んでいる子供を。 洗張りの布をあわてて取込む様。 明四滿2 明四梅3 二 22

せつかちと見へてぬれてくにわか雨 一ほんの少々雨宿りをすれば止むのに、余 戸物は雨に当たっても痛まない。 持っている荷物が重いせいもあるが、瀬 程せっかちな御仁と見える。 = 37

生酔をかついで通るにわか雨 激しい降りのため、傘をさしている者ま で、駆け出したい気分になる。 0

にわか雨傘をさしてくやつもかけ天三・八・15

とも改めて判った次第

るのだが、俄雨に関する文献が皆無に近いこ

そしてまた、夕立に関する文献はかなりあ

にわか雨女がい、と傘かふり あちらからも、こちらからも傘を差し出 美人の徳である。鼻の下の長い男共が、 生酔は泥酔者。これは手に負えない。

57

秀句鑑賞

- 6月号から 中 村 ゆきを

さを何時もしみじみ感じております。四季の感慨を、句に仕立て上げる幸せ、楽し川柳塔の同人として、日々の暮しや移ろう

大も短詩文芸としての川柳の役割りも見逃す ざししている句、そんな句に魅力を感じます。 は光りはじめます。 さりとて余り悲愴感伴う は光りはじめます。 さりとて余り悲愴感伴う はのとした味わいのある句、生命がそこに息 だのとした味わいのある句、生命がそこに息 はのとした味わいのある句、生命がそこに息

ことは出来ません。創られた句が、珠玉の作品として見事に一人歩きするとき、作者に大いなる羨望を抱きます。 川柳は俳句と異なり、風刺精神と思わずニャリとさせられる上質のユーモアが欲しいもやりとさせ出来ません。創られた句が、珠玉の作

☆ 現代川柳は、時代の流れと共に手法も変遷 、 現代川柳は、時代の流れと共に手法も変遷

秀句監賞の責に十分応えられたか甚だ心許

ら選びました。

オムライス裏は見ないで食うものよ

しょう。 解生 アート 麻生 アート

自由とは淋しきものよ眼鏡ふく

ついにきた 鼻にピアスの女の子

中を覗いて下さい。上五句が効いてます。です。機会があれば一度女子高生のカバンのです。機会があれば一度女子高生のカバンのよりな出る子感もします。女の子も頗る健在来事が起る子感もします。女の子も頗る健在

「ゲイです」と造花のような顔で言う

さくらんぼ変哲もなく独り

守柳

い柳歴観に由来するものでしょう。

い柳歴観に由来するものでしょう。

い柳歴観に由来するものでしょう。

悪人を乗せても走る御所車

おした。 おしました。 にました。 にました。 にました。 にました。 には作れない。 にはたい。 にはた

今こそが余生なんだと言い聞かせ

体験句であろうと無かろうと、作者の悟り田 中 正 坊

は到達の生命を慈眼で凝視している。幸せのは可達の生命を慈眼で凝視している。幸せのでしょう。この句には意識があります。 心を切にすると流されやすい、意識は句のスパイスです。 人間賛歌と見ました。

生きるため時々白い旗を出す

八十田 洞

庵

拍手を送りたい句です。

・お先にどうぞという生き方に共鳴ましょう。お先にどうぞという生き方に共鳴ましょう。お先にどうぞという生き方に共鳴ましょう。お先にどうぞという生き方に共鳴ましょう。お先にどうぞという生きがいる。

気分一新 春帽子など買いますか

リズムも軽快な句です。 しかない気分である。常に気分一新、春とにしかない気分である。常に気分一新、春とにしかない気分である。常に気分一新、春とにしかない。人間

川柳の本が売れてる花の雨

すことの出来ない句でした。 見過ね。蘭幸マジックに引っ掛かりました。 見過ね。蘭幸マジックに引っ掛かりました。 見過 幸 小 島 蘭 幸

嬉しくて口笛も出る花の午後

ご一緒に私も肖りたい。心にも花は満開、小 玉 満 江

びきをもって読む人を誘います。

黒いから何時もカラスは損をする

句には作者の哲学がある。
句には作者の哲学がある。
句には作者の哲学がある。

リストラのゴールで蟻が間引きされ

大回の裏まで財産渡されぬ 中ルしている奴等の仮面を剝がすのだ。 一ルしている奴等の仮面を剝がすのだ。 一ルしている奴等の仮面を剝がすのだ。 ルで間引きする悪魔に悪女。リストラをコールで間引きする悪魔に悪女。リストラをコールしている奴等の仮面を剝がすのだ。

孔子様の教えにも耳貸しながらです。期待しましょう。然し、巧言令色、鮮なし仁。全く同感。延長戦に入っても鉄壁の守備を全く同感。延長戦に入っても鉄壁の守備を

人助けした実印がよく眠る

れてこそこの句の生命がある。りとすれば、大役を果たした実印。下五の、るで止めらす 網 井 蛙

は、これでもごりを になる。一流とは情を知ることなりです。 になる。一流とは情を知ることなりです。

スーパーに年中並ぶ初鰹

をつけて。滑稽のうちに考えさせられる句。をつけて。滑稽のうちに考えさせられる句。なれも骨がない。若いお母さん達どうぞお気ち創造主の怒りを買うかも。スーパーの魚にち創造主の怒りを買うかも。スーパーの魚に

生命線途切れたままで生きてます

小糸昭子

夫婦してポックリ寺の酒を飲む も喜びの一つ。生きている事実こそ最高。 も喜びの一つ。生きている事実こそ最高。 も喜びの一つ。生きでいる事実こそ最高。

にいりですね。なによりも情景がはっきり と目に浮ぶ。そしてお二人で少量のお酒を飲 と目に浮ぶ。そしてお二人で少量のお酒を飲 と目に浮ぶ。そしてお二人で少量のお酒を飲

前例がないから石を投げてみる

の政治家や官僚に投げつけてやりたい句。川柳とはこの句を言うと感じました。今時

葉桜の光の中に退院す

奥田良子



西 \mathbb{H} 柳 宏

朝 が来る休 まず地 球 まわってる

青空 スイスイ走る反対車線うらやまし 夢をとばそう竹とんぼ

心臓に悪 (注知らぬ)

握手をしてしまう

来

ぬ金で一

生 棒 米

に振る

これ

から

は

お

まけ

寿に利子が付く

内長野

市 大

西

文

次

夏バテにやれ養命酒やれ鰻仮設にも慣れて心の友が出

成長 の証息子の声がわり

0 月が手にとれそうな水鏡

釜飯

デパ 馬鹿

日へ ートを巡っ 老母ほんのり薄化 て時間 治捨ててす 粧 来る

母の

流行となれば似合わぬ服も着る鉛筆の夢を育てた肥後守嫌ならばすぐに帰れと嫁にやり

母

逝って義姉さん

少し太らせる

和

歌

Ш

市

木

村

親

蹐

津 市

宗

弘、

東大阪 市 北 村 賢 子

になれるほど利口でないわたし の釜が土 産 一の爺 0 旅 羽 曳 野 市 安芸 H

贅沢をするすべもなし老い 人

ささやか 絲 性ぎの つ越 決まらぬ せば他藩 な利息で 偶の親子 田 0 畑捨 国 訛 てられば n

す

観という我が儘もあるらしい

JII

楽しさは

旅行く

前に

あ

る期

すぐに道を歩かぬ癖が

あ 待

3

これしきで酔うはずのない酒に酔

3

赤北

風

12 句

碑

がふるえる日

碕

八

尾

市

Ш

本

宏

して

草

に追

b

n

る老夫婦

酒

エンピツすっ

かりち

びた草競

馬

有

難うと言える子供を育てたい

泰

子

し蟻に生まれりゃぼくごがってあいさつをしつかってあいさつをしつかってあいさつをし	試行錯誤行きつ戻りつ可思う試行錯誤行きつ戻りつ可思う試行錯誤行きつ戻りつ可思う試行錯誤行きつ戻りつ可思う	の生がするが母になってをあやす姿が母になっての先のことは触れずに箸の気配を破る呱々の声張の気配を破る呱々の声	番の前で戸締り思いだすが家にはカレー名人そばが家にはカレー名人そばが家にはカレー名人そばが家のように膳にある	
居酒屋に寂しがり屋の父がいる 童心にかえり蓮華を摘んでいる 竜飛車に軽い男と見たものだ	来の人に出会える春が好き 和ですやさしい妻が強いか 人の夢みた橋を蛸と見る 人の夢みた橋を蛸と見る	き違いした補聴器が か不幸 金婚までも もなく自我を殺して 言葉知らずに種を蒔 でれたこ	看板を心得て去ぬ上顧客 以心伝心こころどうしでする握手 要書にはちと書きにくいラブレター 思うほど人は俺には無関心 をある。	河内長野市 妹
	居	達	部	背

典

厚

善

信

尽呂久

福耳を貧乏神にほめられる青空か幸せという葱切主	分史に書く上り坂下	一線を越えたナイフの孤独な目	少子化に生命線が長過ぎる	札幌市 三 浦 強 一	前頭葉日ざしを浴びて目を覚まし	しんどいと座って指揮は出来ません	蓮如忌や蓮如讃える経を読む	T	朱雀門 大手を振って通り抜け	大阪市 平 井 露 芳	刻み方どうあれ妻のお漬物	しとやかな女の時間花鋏	高金利騙され乗った泥の舟	0	不合格 母の笑顔に立ち直り	北九州市 岡 田 幸 生	迎合をする気などない鼻柱	人脈を武器に優雅な天下り	的を得たジョーク笑うに笑えない	無位無官だから言いたい事が言え	恥辱など既に忘れている文化	海南市 谷 口 義 男
積み立ての利子に無情の税がつき	簡3予生の恵み上の昏隠す心の薄化粧	った橋	大安を選んだ孫の初デート	生駒市 川 端 きぬ子	補聴器に悪いうわさは通りぬけ	四股踏んで闘志みなぎる男の目	若い芽よ胸のボタンの掛け違い	平和の世 甘えの汚職根を広げ	今日も雨遊び心の彩を盛る	出雲市 加 藤 スズコ	コーヒーが冷めて迷いがまだ残る	電池切れなかなか名前出てこない	合鍵を貰って巣立つ燕の子	記念写真は皆 長生きの顔ばかり	肩書をはずすと言葉歯切れよい	今治市 中 村 好 恵	繋ぐ手が鼓動を伝え頬を染め	減反のおかげ美事な花畑	体型が違う夫婦もペアルック	幸せを貰ったような花吹雪	現金が眠っています貸金庫	横浜市 田 中 笑 子

空気 心高る つ 佐 かる	寺る茶	に 水たまり越えた心算の老いの足 大も猫も仲間入りする夕ごはん 大も猫も仲間入りする夕ごはん	我が家襲った野島断層しかと見る 上羽鶴願いを秘めて今日も折る が家襲った野島断層しかと見る が家襲った野島断層しかと見る
	太	的	秦 樫
原	田	場	安 谷
秀		+ 8	夢郁
夫		郎	夢 都 之 b 子
春雨が樹々をぬらして町静か 食事時 初夏の日ざしがまぶしくて 食事時 初夏の日ざしがまぶしくて テレビ見て初夏を楽しむ京料理 場あとの痛みを耐えてする食事 今治市 厳島古い調べが潮に乗り 年なんかあの世へ行って考える 海鳴りが聞こえ鳥がはすに飛び 列島の鮮魚が走る夜行便	ボランティア地球に愛の種を蒔くささやかな平和五勺の美酒に酔うささやかな平和五勺の美酒に酔ういり向けばわが半生は風の中	大正の口には鍵をかけておく 隅っこで万両赤い実をつけて なさんを鯨尺では計れない と忘れで隠した場所をまた忘れ	高知県ないらの数が減る。
渡	鷲	湊	百 ル 渡
邊	見		田 辺
伊		修	南
津 志	章	水	幸奉

輝いております妻のライセンス をはまだ遠く仮設の灯はさむい 時りや亡母へよもぎの旬を摘む 日立市	1	美人ではないから笑うことにする でしたと少し嬉しそう でしたと少し嬉しそう でしたと少し嬉しそう	(おようの企み見せず風を読みなところの企み見せず風を読みなところの企み見せず風を読みなところの企み見せず風を読みなところの企み見せず風を読みなところの企み見せず風を読みるところの企み見せず風を読みるところの企み見せず風を読みる。	大職の軍手汚れを恋しがる表札の裏に苦労の過去がある表札の裏に苦労の過去があるまがある。	尼崎市
ול	1	仲	Щ	西	田
蔣		井	島	村	辺
楮	Ê	素	良	9	鹿
悟	Ĩ.	水	子	つえ	太
難聴が相槌だ! 円空仏 祖母! 遠い母へ電話!	声かけて母の遺かけて母の遺のなるさとの竹のいるさとの竹の	悲しみを塗り	茄子の花約束 なまれることに かんしゅう かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゅう かんしゃ かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゅう かんしゃ かんしゅう かんしゃ かんしゅう かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ かんしゃ	晩学に辞書	
だけはうつ笑顔母を重ねて手を合わす話小さな嘘も混ぜ	影のガラス拭く 子 糠も添えてく	門込めてゆく厚化粧 薄れて年をとる 薄れて年をとる である。 ではいき勢	お束しっかと忘れない とに感謝の鍬洗う とに感謝の鍬洗う	となかよく燃えている しています寡婦の意地 しなかよく燃えている 今治市	倉敷市
うつ笑顔 相聴器外したナ な嘘も混ぜ を を 音	影のガラス拭く 株も添えてくる	込めてゆく厚化粧 れて年をとる れて年をとる 横浜	着モダンになってゆ. 感謝の鍬洗う 感謝の鍬洗う	となかよく燃えてしゃぐ声する子供しています寡婦の	敷
うつ笑顔 ねて手を合わす な嘘も混ぜ を止むたナ	影のガラス拭く ないだこを探しとく	込めてゆく厚化粧 れて年をとる れて年をとる 横浜市	着モダンになってゆく 感謝の鍬洗う 感謝の鍬洗う	となかよく燃えているとなかよく燃えている今治市	敷市
うつ (((((((((((((影のガラス拭く 無も添えてくる ひじニを探しとく	込めてゆく厚化粧 がよい能勢 をとる では小さな風が舞う	着モダンになってゆく 感謝の鍬洗う 感謝の鍬洗う	となかよく燃えているとなかよく燃えている 今治市 越	敷市 家
うつ笑顔 相聴器外したナ な嘘も混ぜ を嘘も混ぜ	影のガラス拭く 無も添えてくる ひじニを探しとく	込めてゆく厚化粧 がよい能勢 をとる があてゆく厚化粧 があるが舞う	着モダンになってゆく 感謝の鍬洗う 感謝の鍬洗う	となかよく燃えているとなかよく燃えている 今治市 越 智	敷市 家 守

までのの音をした。ことも齢とらぬ を	とつ 豆面ト こ面	大阪府 米 澤 俶この歳で勇気と照れが同居するこのこけし旅で見染めた娘に似てるよく出来た自画像どこか他所の人核家族 祖母の躾が伝わらず	面になるときめき背負う瓜トマト を禅草 生きる恵みに手を合わす といて味わう世の恵み 風匂い草木ささやき初夏を盛る	鳥取市 冨 山 雄
重	緑	子	淳	幸
手を洗う心やが	等って付む。 幸せは布団 幸せは布団	電と壇せ	励妥縄慣れ	
三分を待つ熱湯の進化論 三分を待つ熱湯の進化論 三分を待つ熱湯の進化論 室されているとわかった足の怪我 愛されているとわかった足の怪我 愛されているとわかった足の怪我 愛されているとわかった足の怪我	等って付えて以てきになど思う案通りの温さにとけて箸をもつ寒通りの温さにとけて箸をもつ寒ののの高地籠	を出たまま帰らもれて味方がほ	ましの支えがあって立っている 協癖ついて持ち味消えてくる 張りを守り通している孤独	和歌山市
上される 宝田林 野水	きん んきん たい たい とう とう だい いっぱい だい いっぱい かいまい かいまい かいまい とう はい という はい いっぱい はい	を出たまま帰らないを出たまま帰らない	支えがあって立っている いて持ち味消えてくる いて持ち味消えてくる	歌山
上さ足 る火の を 富田林市	う 綾 籠 つ 部 市	を出たまま帰らないを出たまま帰らない	支えがあって立っている いて持ち味消えてくる いて持ち味消えてくる	歌山市
上き 足の な火の粉 中 中	う 綾 籠 つ	を出たまま帰らないを出たまま帰らない 益田市 岡	支えがあって立っている いて持ち味消えてくる いて持ち味消えてくる	歌山市 森

欲しかった絵が売約となっている然々と風に向かって鯉のぼりをなりもどすましたくて茄子の苗	りほくした青葉	こだわりをさらりまぐした青葉虱英語では口ごもらない幹事長予報士を恨んでいますスニーカーまだ健康だから健診申し込む	羽由	進んでるつもり時代に乗りそこねをの旅。唱歌が口をついて出る	は、できずらんできた。 一般の砂丘に生きた波模様 が病みきっと治ると言わぬ医師が病みきっと治ると言わぬ医師	変らずり見兄虽出せる存 というのでは、雑草園に心地よい きゅう はい	横浜市 保 田
	あぇ		み		亜	皎	絹
	きら		つこ		希子	月	子
やさしさが記念切手でやって来る児は帰り静かな午後の障子張り掲りですぎるの情子堅すぎるのれそうで何と丈夫な赤い糸	母の日に気遣う嬢のフレセント	の日こ気置う家のアンゼン後まで男は男の見栄に生き観の噂に引かれ美術館		老人の聞く耳持たぬ話ずきこき母へ八十八夜の甘いお茶温い嫁。距離が増々近くなり	特別を表する気になっているの声聞いて今夜は眠れそうの声聞いて今夜は眠れそうの声聞いて今夜は眠れそう	生きとするほこなっていいで、は付き添って行くご招がるほど歩いた足が骨粗がるほど歩いた足が骨粗がるほど歩いた足が骨粗があるほどがある。	Ą
\$	浜市 秋		出雲市川	t	た 岡議 市 員 中	暦 湯県 - 高 - 高	島根県武り
6	浜市 秋 元		雲市川島	な	市 貝	哲場県 高野	根県 武 島
6	浜市 秋		雲市川	な	中中	暦 湯県 - 高 - 高	根県武

連休は家でゆっくりするが勝ち懐かしい仇名に変わる同窓会腹立って衝動買いをしてしまう藤井寺市 岸 本 寿 代		女房がキレて話題の裏長屋 八尾市 田 中 トシエどん底を抜けた名残の手が温い 浮き沈み耐えて流さぬブイの意地	声出して笑える友と居る花野 マーシからお箸に変る児の笑顔を活に出る と居る花野 という アンボ気取った顔で店に出る とばこにお伽噺のような過去	伊藤	堺市 矢 倉 五 月
生きるとはこんなに哀し紙オムツ 生きるとはこんなに哀し紙オムツ 里帰り母が見抜いた娘の不安 里帰り母が見抜いた娘の不安 天阪府 奥 野 義 夫	ルはき	東京都 清 原 悦 子自己紹介通称だけが覚えられ自己紹介通称だけが覚えられて替りしても電話に故郷なまり	母の日もマスコミばかり騒いでる 散り急ぐ花を賞でてる人の群れ眠れぬ夜 我が余生を考える 医療費値上がり病院一つにし	寝たきりへ鬼にも仏にもなれぬ軽く言うサヨナラはまた逢えるから軽く言うサヨナラはまた逢えるから	川崎市 和 泉 見早子

ほどほどと言う物差しに悩まされ と	をまじめな口の揺でない国なまり ミステリーらしくないのが犯人だ 連なった漬け物嫁の作らしい 大阪市 三 風かおる自然と出逢うハイキング	月すくえそう 一もはじく若者たのもしい かと眺む五月晴れ 横浜市 で柳が好きになり	裏ばかり気付き世間をせまくする 言い訳が自分に向けて投げる石 言い訳が自分に向けて投げる石 言い訳が自分に向けて投げる石 ままりにも巧みな嘘へ拍手する
**	浦		岡 木
			清 美
きくゑ	千 津 子		子 水
を を を を を が と を の を 一人占め して での の が で、 の の で、 の の の の の の の の の の の の の	宣こいる・	れてくる義理れてくる義理を	寺の人の維昏で売れる週刊志 茶髪の子地球にやさしゴミ収集 茶髪の子地球にやさしゴミ収集 ・ 千葉県 大
井	橋蔵	藤	村川
=======================================	鐘 信	道	さ ち 子 翠
=	造 子	子	子 翠

ぬいぐるみ風邪の子供に添寝する化粧する母に見とれる子の笑顔声変りした子が急かすごはん刻	昭和史を刻みつづけた古希の自負幸せにするよと軽く言いすぎたさわやかに会話が弾むレモンティー	おふくろのサイズが美味いにぎり飯口惜しさがうしろ姿に見えているメタリックに響くリストラ春嵐	この国に望みもてずに生きてます手抜きしたさつきひがんで花つけず 木も花も人もまどわすエルニーニョ	木の芽あえ五月の香り盛りつける ない でしょうわさの芽摘んでものびる春日和	大阪市 榎 本 日出 デレビ見てひるねたっぷりこれで良し 咲く花の美しさには汚れなし 居直って青春してる古希近し	八尾市井尻民
	枝	史	ろ 志	Ξ	出 子	子
孫に会う時だけ気取る身だしなみもう少しゆっくり歩け自己暗示久々に肚から出て来た笑い声	すかれ過ぎピリオドを打つ時期のがす。 喜寿祝う心づくしの手巻寿し 心地よい歩幅をくれる友がいる	子育てを終えた人生趣味多忙 連休日財布泣いてる子だくさん 高槻市 執 行 稲 子肩こりを夫婦でいやす露天風呂	輪の中で一歩をゆずる丸い背なハイテクがどんどん奪う主婦の知恵ダム底に素顔の村が泣いている	サヤンセルをしましたぐっすり朝寝する豊かさの中で喘いでいるばかり	頼まれもしないファンの嘆き節敵ながら天晴れ褒めるとこはほめほどほどで可もなく不可もない暮らし	高槻市 乙 倉 武 史

長電話昨夜と同じ愚痴になる	六十から妻のリズムで生きている	週一度妻に戻った大掃除	和泉市 横	年齢考えやと受話器のお節介	失った財布を今も夢に見る	それからに触れぬコーヒー温かい	羽曳野市 芦	隣への客に都会の無関心	とぼとぼと歩けば犬がよけい吠え	櫛の歯が欠けて外出見合わせる	泉佐野市 稲	歯がキレイでした うかつにしゃべり過ぎ	見舞から戻りタバコを止めてはる	ひと言を言いそびれてる喉仏	寝屋川市 井	春の風亡母のにおいを連れてくる	花一輪川へ流して夢広げ	春になり神秘の世界が萌えている	出雲市 栂	急がねば賞味期限の切れる古希	古里の薫る温もり腹にため	咲く色も香りも信じ種をまく	鳥取県西
			Ш				田				葉				上								垣
			捷				絢								す				ミッ				美
			也				子				洋				すみれ				エ				知子
切り札を残したままの負けいくさ	鈍才がみせる不況の粘り腰	戴帽式その優しさと厳しさと	八王子市	悪友が居るかと一本下げてくる	どれにしようあげる菓子にも気を遣う	自惚れをまた強くする他人様	大阪市	路地の花挿して回向の鉦一つ	和菓子舗の九官鳥は京訛り	ポン菓子をせがんだ遠い日の屋台	高槻市	手の内は割り勘と言う飲み上手	四万十に幸が見えてる鮎や蝦	二三歩を人に譲った日の温さ	高知市	古い家四季の思い出詰まってる	待ちあぐむ終着駅に椅子がない	カタカナの見出しばかりで辞書頼り	東大阪市	逝くまでは行こう年金あるかぎり	三人で三角形の旅をする	ジベタリアンに見られた古い靴の疵	大阪市
			井		1		中				左				細				松				尾
			上				井				右田				木				山				崎
			京				正				泰				子								黄

龍

隆

紅

雄

郎

秀

奥の院大師の御膳においかぐ無理無駄を承知で生きた五十肩ご先祖の残した宝健康体	と 肩の荷な	ほっとするばあちゃんの城三畳間空きマンション代りに鳩が住んでいる。 以風で両手を上げた招き猫	大阪市 中澤 孝子 子長そうだ電話待たしてガスを切る 大阪市 中澤 孝子 子表夫婦朝の目覚めに先ず感謝	とちらへも味方はしないやじろべえぬるま湯へ愚痴る余裕のある平和駄目ならば駄目と言ってと言われても	雑草のように二男が逞しいやいやいと言うて子供に無視される贅沢な病気に見える花粉症	愛媛県 安 野 案山子
叱る人なくてながらのひとり膳まだ女うぬぼれてみる風呂上がり労いの声をかけてる散る花に	所の空巣を知ってのお供リュックの	お隣の庭で子育て鳳仙花とさやかな家を支える妻の腕とさやかな家を支える妻の腕とされる。	会はどうあれツツジ見事咲戦を練るコーヒーに味がな戦を練るコーヒーに味がな	東大阪市 今 岡 貞 人不信心勝手な願い鈴鳴らす星占い良いところだけ信じよう	島根県 加 藤 要 子 退屈は地獄パートが楽しくて いい話種子はいっぱい持っている 愛犬の戒名もあるお仏壇	出雲市 名 原 純 子

、 こと ほうどちょう 鳥取市 有 沢 、鳥取市 有 沢 、
せつ子
子
ダイオキシンでのたうっている鯉幟
布
山
щ
嘉

縦じわが消えて優しい顔になる貧乏がいつもファイトをくれていたさくら餅見ているだけで温かい	和歌山市 上 地 登美代為せば成るパラリンピックに教えられバーバーとおやつめあての孫可愛い産声に五体揃えと唯祈り	シルバーシート疲れた顔が並んでる 万病にきく薬草の知らせくる 一人居の愚痴なぐさめてくれる月	オ女でも悪女でもない妻といる追伸に母の甘さを期待する病みあがり延長戦で生きている	窓に来た月と呑んでる独り酒虫の声聞えて来そうな母の文虫が声がない。	隔靴搔痒そんな世相に慣らされる 大物の素質はあるぞ字がまずい 晴耕雨読そんなに甘い農はない	高知県 桑 名 孝 雄
喜びも悲しみも秘め無人駅再建の署名はしても金出さぬ許されぬ失敗。苗の声を聞く	感情は煽られ理性は葬られ 福岡県 本 田 忠 男殿様も金で躓く世とはなりめがね 杖 旅の支度に老い深く	五月雨や漁師は軒を低く住む 豊中市 み き わきみわたし呼ぶ電話はベルの音で知る	れに今る初日	朝市の野菜笑いが止まらないかまど焚く形で老いた母の背ながまとびく形で老いた母の背な	定位置にいて思いきり羽根のばされぬ駅前の募金孫によく似た子の箱へ金脈は夫の年金頼るのみ	和歌山県 坂 東 和 代

たし似の子をひいきする親のエゴ をいっていじめする子にある渇き でなっていじめする子にある渇き をあられずけなされもせず主婦通す でなっていじめする子にある渇き	粒揃い接待に負け地獄道 香川県 ご 地棚に懐妊知らす文供え	大阪市 は ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	が化粧の下で呆れてる。島根県がに気が楽そうと選ばれる。	び抱風呂横浜市	兵庫県
清	神	鈴	福	生	高
水	保	木	間	坂	見
久	坊 太	トョ	博	サト	末
美子	郎	子	利	子	野
欲深く意地を張り合う形見分け を表目に趣味とおっしゃる自信作 母の日にカーネーションが咲き揃う がらずに地のまま行って運ひらく を発く便利屋になるお人よし とおっしゃる自信作	新緑が老いの手帳を埋めてゆく 段のない市バス優しい街に住み	を り気なわたしへセンス野暮ったい が が が が が が が が が が が が が	つめて外がと皆に	リハビリの介護女性も親切に おいだりの分護女性も親切に リハビリの効果自転車乗り回す	橿原市
深く意地を張り合う形見分け 深く意地を張り合う形見分け な しゃる 自信作 と目に趣味とおっしゃる 自信作 の日にカーネーションが咲き 揃 滋賀 になるお人よし な しゅうしゅう しゅう かんしゅう しゅう しゅう かんしゅう しゅう しゅう は しゅう しゅう は しゅう は しゅう しゅう は しゅう しゅう は しゅん は しゅん は しゅう は しゅん は し	大和茶粥で終る旅 大和茶粥で終る旅 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	食になれて心が飢えているり気なわたしヘセンス野暮った	い処見つめて外は目をつぶりょっとだけ噂のネタにされてい宝な奴でと皆にうけている	東京 ハビリの介護女性も親切に ルビリの効果自転車乗り回す	橿原市 西
深く意地を張り合う形見分け を が の日にカーネーションが咲き揃う の日にカーネーションが咲き揃う を が が が が が が が が が が が が が	大和茶粥で終る旅大和茶粥で終る旅中縄県	食になれて心が飢えているという気なわたしヘセンス野暮ったいの気なわたしへもとない。	い処見つめて外は目をつぶりょっとだけ噂のネタにされている宝な奴でと皆にうけている	東京都 が でリの介護女性も親切に がでっと上がった目の高さ ハビリの効果自転車乗り回す	原市
深く意地を張り合う形見分け を が の日にカーネーションが咲き揃う の日にカーネーションが咲き揃う を が が が が が が が が が が が が が	大和茶粥で終る旅 沖縄県 杉市バス優しい街に住み	食になれて心が飢えている 足崎市 軸・細胞減ってあしたが揺れている	い処見つめて外は目をつぶりょっとだけ噂のネタにされている宝な奴でと皆にうけている	ルビリの介護女性も親切に 腕がやっと上がった目の高さ ハビリの効果自転車乗り回す	原市西

よっこりと友がニュース焼の香り祭りを盛り上げ	野茂の吐く息が絵になるホームラン梯子酒他人の靴で帰宅する	限りない魅力あるから登る山底抜けにワインが旨い初夏の野辺羽曳野市	母の日に料金忘れた長電話換きしめた子のぬくもりに母の笑み横浜市	を 度 位 許	過去の事流しきるほど悟れないるとはないがある里遠く縁だんだん切れてくるというできます。	軽く汗流し考え変えてみる新緑の滝道猿に迎えられず内長野市	豊中市
槻	與	山	福	木	野	木	岸
谷	田	本	田	村	瀬	太久	田
仲		た	由	-	昌	正	知
子	明	けし	美子	笛	子	_	香子
の日にファイトで暮らる草もう手に負えぬと	土臭い人の言葉を信じ切る言いたくて言えぬストレス胃へ溜まり 愛媛県 黒 田 茂	ときめきをまだ期待する同窓会派手な服そろそろ着たい熟年期 吹田市 野 下 之	米欧が日本経済振り回す 岸和田市 井 伊 東	オ揃え社は伸びず 寝屋川市 瀧	嵐明け山鳩の声胸をうつ 鳥取市 宮 脇 道過疎の駅花だけどんと生けてある	村	和歌山県 村 中 悦

二年越し石楠花八輪咲き揃う新入生かくれるようなランドセル泉取県	衰しみを癒してくれる孫が居る衰しみを癒してくれる孫が居る	大つ	果だ燃える火種を追って一人舞う未だ燃える火種を追って一人舞う	子や孫に囲まれ母の日幸せな解の子回らぬ舌でよく話す	んし	縁談へ本家の自慢足してある断り返し点から欲の荷を下ろす	今治市
高	伊	土.	門	和	谷	岩	村
尾	藤	居	脇	田	岡	崎	上
京	ふみ	ひでの	晶子	美 寿 子	ふみ	實	久美子
食い初めに にっこと笑い蛸を吸う婚礼のどさくさ年忌疾うに過ぎ 娘佐野	目ざましにやる気のなさを叱られるうたた寝へ周りの音の心地良さ	もくさ	草を抜く草も負けじとふんばっ	山盛りのカレーで	花水木やさしさほのか亡母	早起きは元気印	
初めに にっこと笑い蛸を吸うのどさくさ年忌疾うに過ぎのどさくさ年忌疾うに過ぎなりと負けを認める底力	のなさを叱られる音の心地良さ	来たランドセル 来たランドセル	だとふんばって兵庫県	ーで祝う入試の子 和歌山市	めんやっしゃと孫の声 にほのか亡母のよう	が師となり友となり 大阪市	横浜市
明を吸る 見を 見を野	のなさを叱られる 枚方市 大	の手の温み吹田		和歌山の子	しゃ日との	が師となり友となりの夢運ぶ	横浜市 岡
新を吸う 泉佐野市 凡な日で		の手の温み 吹田市	県	和歌山市	しゃと孫の声 尼崎市	.,,	
和を吸う 泉佐野市 大 泉佐野市 大	大	の手の温み 吹田市 三	中	和歌山市 岡	しゃと孫の声 尾崎市 尾	松	岡

連休は静かでんなと老夫婦野の仏どなたも亡母に似て嬉し	大阪市 亀 井 円 女 受日もまた一日終えて床に付く	内緒することも出来ない狭い家値にならぬ野菜をもらい料理する	何もなく退屈もせず日が暮れる追伸がながなが続き母元気	横浜市 鈴 江 純 子耐えて来た夫婦の余生灯が点る	宅急便温みに浸る新茶の香 鳥取県 平 井 栄 翁目配せが口より先に指図する	学竹で見事あやつる川下り石地蔵に移転を迫る高速道	査いただけ強くなったと思いたい 覚えてる御百度踏んだ足の裏	鳥取県 橋 谷 静 江
車庫入れをすむまで親は見届ける拍子抜け妻簡単に同意する	だ若は貝	 い ヒだ	砂川市 武 田 正 美間と事しゃべる自分に気がつかず	羽曳野市 川 口 信 子豪がつけば池の鯉にもボスが居る	水溜り私の顔が笑ってる 島根県 菅 田 かつ子温かさ森羅万象狂い出し	田に水を張って蛙の大合唱 島根県 松 本 聖 子アスファルトの裂け目に生きるこぼれ種	引出しにしまったままの言葉出ず 直識はなくとも詩に惚れている	松江市 山 根 邦 代

尼崎 市 1 III 富 江

主み h となり て主 好 べまぬ 婦 は 乱 大き がよせて来る Vi 吐 息 つく

取 市 福 島 庸

砂砂 0 0 紋 Fr. べそっ 足 と素足で触れて見 をとら n ては ず む 息

売る仕事に にやさし に生きて語が冴え る 鳥取

える

1

春

H

を

讃

で送っ 1

た亡母へ香を立

IJ

ス

か

釈

迦

か心

が揺

n

動

<

浜

市

曹

H

羊

子

県 藤 Ш 弘、 子.

> 浅漬 ス

け "

0) 10

茄子があるから夏も良

IJ

0

0

ま

先

暑く

なっ

て夏

京都

市

高

島

啓

子

... (2) 句

で昨十九日むすめ事

柳多留二十二篇第四十句目 掲 載

3: か V Ш 柳 0 中で、 わたしにはこの 句が 1 ちば h 印 象

上句 と突き放されることで、 現 九 実感を伴う使いようであ 日 は 43 ごとの が 不祝儀を意味するものと理解 曲 者 筆文字は墨を濃くするが て 真 偽 抑 0 制され I どは る。 下句 た感情 別として数 する。 むす が V でし 0 8 詞 句昨 そう 事 かい 1

悲哀

0

深

淵

読み手を誘

43

こむ。

表

現

た

が忘

れることのできない

句である。

高 は

杉 か

鬼遊 10

ところ

戸 月

,市立勤

奶労会館

7 10

F 時

大

ホ 開

ح

3

10

18

日

日

前

*

場

. 12

IE

午

開

会

〈事前 投 句〉 5人共 選 句

去来川 E 城 . 平山 繁 夫 小小 笠 原 双

城

音 楽 小 春城 Ш 松原 可 武 住 爽 庫 介 坊 . . 伊 尾 坂 佐 本 和 次無 須 子 磨 成 . 真 殿 舎

柳

高 10 藤本静 港子 . 八 ·古川奮水 加 西 村 道 也

111

応募 料 1 0 大森 0 0 甲 円 郵 来 便 住 ロタカ子 小 為

応募 切 7月 文部大臣奨励 神戸 31 市 日 長 金 H 区平 賞 当 . 和 日 兵 台 消 庫 3 県 ÉII Ì 有 知 5 効 事 賞 13

か

第10回兵庫のまつり

-ふれあいの祭典

「根気」 **〜当日投** 美 十653 -0854句〉 岡田 1 兵 部 庫 題2 県 晴 玖 11 句 柳 協 5 大会出 会事 0 0 円 務 席 局 者 11 3 時 12 前 n * 111 限 あ Ŧ. 締 3 1 Vi 切 津 0 藤 子 本 方

句

里

渺冽沙 Ŧ 代 選

アンダーライン眠

ぬことが書いてある

歌山

古

久保

和

火柱を こん 人が来たので箱 君 が得た答えと僕が得た答 な日 まり か 0 B b 転んでか は羊水に抱かれ いなかっ 杖を頼るとまたげ たしを救 封 らの ÉD 0 でする蓋 中 たよう人が去 う 遺 から出ら Kinj 書 たし ょ かい な な n る ない

最

失

マイペ 古 63 作巾を ま香らねばいつ香るの 聞と 一ス高 濯ぐ程 死ん 度で済 だ時間 だかここは 金魚 か 女

新

を東

ねる

風 度目 よりも楕円が好きでお 下で良い子いい子をしてもらう はとても律儀なセロ しゃべりで テー プ

りを忘れ

たく

は

なな

B

身辺 友達 り幅に柔軟剤 理 た真 子報どおりの 0 をまぜてい な薬包 雨に 紙 なる

人間

測るものでなし

宮市

10

わ

時がある

松原

寝屋川 31. 林 浜 池 田 永

歌 取 県 新 JII 新 福 松 家 本 完司 畔

西宮市 歌山 唐津 京 部 iti 市 牧 藤 JII Ė 保 渕 H 富 喜子 季額 芳郎 富 正 湖 剣

米子 歇 取 Ш 木本 本 希久子 公弘

> 後 ぐるぐると部 晴天がおだやか 弱虫と知って セ ひと 戻 友は自分 Ä 心 ŋ のように かい ~ イの裏 アキ つの できな 宴の 0 V 改札 ス腱 は 屋 ことだなと思う いるから 10 ように 目 だとは限ら В を回って案果てる めましょうや世紀なから強い僕 機が であ 面 にかかる なの 2 褒めて 止 ですか たとは D やる

何に 便利かも六十五 救いをもとめ 歳でくくら n 3 紀末

īī

石ひとつばし 誰かが読 乱世なり進む時計は卑 陽溜まりで年を晒 んでくれるやろ日 40 り大きな音がす 怯 記 帳 3

スー 過去形 コンパ 他人より冷たいことを妻が言 根 1 クト自愛ばかりが先に ははお E して一般 で礼儀正 天道さまの始 みなく話 しく 買 発 う 男 駅 う 寸.

命 道 続は くさの から ちこち 力僕 耳 命もろうて に埋まら III-んでみたい 0 いで家出をふと思う は惰性です ぬ穴がある 12 る

> 松原 歌 Ш 取 津 桜井 小池 馬 崎 \mathbb{H} 岡 みさ ちじっ千 H 和 枝 お花

藤井寺 尼崎 唐津 南 竹治ちょ 三宅 仁部 高田 春城 武庫 美 代子 保 四 坊 郎 州

高槻 西宮 尾 門谷 鷲見 川島 高杉 林 諷云児 たず子 瑞枝 步

ち

寝屋川 富田林 鳥取 龍島 藤田 土橋 間はるお IE. 子

18

ズ

12

羽曳野 和歌山 玉 吉 Ш

松川

杜

的匀

出雲市 京都市

石倉

芙佐子

帰る家ある こつこ 花だけ 水色の ぼん たん Ш 虫 オ 風的 ラ が掃 はず 一龍 ---i 巻き 信 に染まぬ 酒 椒 魚 1 用を晒す 屋 8 1I° 喪 7 ばの でない 入 絵 でみ ŋ 0 封 15 失 1 す 0 か 0 D F. 0 トになるならなれといったも 吹き をささ と歩く + 1+ の針 1 糸 虚 n 類 お話 できる 餌 3 n 書 綿毛の 花 濁 に泥 7 鬼 2 0 2 構 h だ んな大きな魚釣 Í 棄桜 溺 溜 行 私の 自己 宥 は迷 乗ると台 の面 生 流 します うのも まり 中 私の ピッ 方 鰌 n 方 E L 0 8 んそう によう よう で見 色みて わず で た to 句 円の 3 甲 È をとり かい ,お月 癇のの 持つ主 のう 読 張 to K La 自 かい んとどけ つくなひ 不 É かぶ 水 に散れるなら 右 詞 気 滅 0 占 つよ過ぎる が甘 なる は さま 虫星回 b 0 1 澄 11 10 便 花 まし ろう さば ます WD 張 極 は あ か 刑 葉に 3 くなる 3 う 1 + t) ŋ なし な n か 0 0 泉佐野 尼崎 枚方市 歌山 歌山 弘前 西宮 米子 横浜市 田林 枚方 15 鳥 美 歌 尾 禰 塚 JII 前 H 庫 取 取 門脇 三村 上山 高 安平 奥 池 斉 坂 春 土 前 中 稲 石 鍛 橋 根 Ш 葉 橋 H 地 - 次弘道 智恵子 らめぐ 2 寿 たも 八 和 幸 つ子 重 美 夕 洋 花 節 次 歌 品 \mathbf{H} 美 Ŧ. 代 子 郎 子 忍 2 城 7 鶴良 里 二日 その 鉄線 欲捨 空き 句 葉ざくら ŧ 美 春 to 寝 人 雨 0 知 n n 作 V 八だっ プの で居 手 7 ごとも b 寸. 6 先 腹 n げ 0 0 10 力 た か って、 紫僧 た人 な嘘だ切 石 お 0 2 は 0 0 か 松 見 るこ 鬼 だんん える 一えて 忘 た大往 火 虫 紳 浅 b 醒 乳 言 0 0 中で譜 か えぬ 伝 0) かい 電 n 8 C 1: 0) 2 10 Vi なかなかなかが Ł 掌だろうあ 哀し ٤ たぎ 7 物 7 育 際 衣 とが大事 と多くを捨 il か b 角 車 とて 深き 羽 3 1 度 П n n む か 私 蜥 生 0 初 6 を轢 夏 面を書 春 0 Vi 3 過 蝎 0 止 刑 か まっ 嘘をつ ごぎた 癖 骨の し忘 届 物 失 終 3 0 0 め 2 10 子と思う 7 きに 7 電 2 南 17 Ħ 少草 0) 老 I 3 0 ネ 語 たたた b 景多 3 7 た WD あ H ギ 欲 2 45 V 症 1 お 無 th るの坊 菩薩 来る 出 ぼ ~ 7 替 人 L 12 一える 会う 1 H か 0 暦 主 10 n 41 10 9 3 17 顔 魚 2 寝屋川 寝屋 岸和 大阪 横浜 屋 Es. 歌 Ш 尾 取 阪 Ш 取 浜 H 市 क्तं 市 大内 井石武上垣田 青枝 太田 野 長 平 坂 渡 石上 茂 四 志 富 ---本 邊 E

み花帆

n 子. 雀 伊

勇

太 志治 子 子.

津鉄悦

とし

克枝

か

高 す

津

よう

齌 H 原 H 坂

羊子

重

宵

代 明 高 朝

群がっ 相槌 余白 今日もまた書くことなしと書く日 仏さまこのごろ花が高こお り急ぎしない い出した記 が欲 1の方が多い手紙を案じてる のあとにも雀帰りこめ てい 0 席で笑 でさ本心 しくて一人芝居 ても寂し 憶 自愛の 0 が 画 い鰯雲 面 嚙み合わ 八重 出 する 急拡 ます 大 ぬ

逃げ 年寄のタブ 注意書き通 挿し木増やして 無記名で切り込んでみ 今だからわ 風がどうあ 皿を割る勇気がなくてウツでい あれやこれ 元気出す昨 道がありそう鉛筆を握 りに 1 日と違う今日にす たれる橋がそこにある れ仏壇に灯を点 一歩踏み出す前 半分だけ 困る塀 効いた副 る投書 守る のドレミフ のこと る 7

> 富田林 吹田 横浜 大阪 大阪 庫県 取 栗谷 中 H 本 Ш 井 水 夏 礎 春 П

并寺 枚方市 大阪 京都市 横浜市 太田 立蔵 海老池 都倉 1 野 张美代 可多留 信子 求芽

記

占

いで未来明るくしてもらう

川西市 鳥取県 岡山県 横浜市 福原 松本 乾 近藤 ただし 悦子 隆風 道子

和 歌山県 倉吉市 歌山 鳥取市 崎市 市 村中 武本 和泉 淡路 植田 見早子 ゆり子 悦男 京

寝屋川市 鳥取市 弘前市 豊中市 佐治 Ŧ 孝子 加 正坊

まぼろしのように菜の花続く

ハンカチで包めるほどの

愛一

えまた

人消

す

住所

が孫に変わって老いてゆ

歌山

一地登

並美代

これ

達筆の誤字を直

ている安堵

力なら 4 V 風 スの城にも 援護射撃もする 3 ンで飲 言 Vi 訳 などは h 花 だワインに火傷する 吹 する は 散 ま 3 寸 7

不祥 期乾期男は愚痴を零す 事はエ 0 番させるよな大蔵 ールニー - 1 11 やと思う ま とく

仁王様哀し 戦争は嫌だが軍歌なつか 独立独歩決めて い顔を怒鳴りつけ 背すじが伸び L て行

の道よけずに風に晒され

遠い絵に ふるさとは寺も無住になっ 剤飲 なる んで自 缶 蹴 一慢を開 りも竹 V て たとか 10 3

風はもう 0 実も私も 葉桜と言うものに 青 風 0 な n

富田林市 弘前市 大阪市 曳 野 文 桝本 加藤 Ш いみつこ 岳水 蕗児

たくさんの別れを懐うのです。 こうなるともう川柳は宗教を超えた境地ですね。 見不公平のようで限りない慈悲ですものね。 に託して川柳に仕立てて下さいました。 だと見上げるおもいです。 迫力です。森茜さんの淡々とした詠いぶりから込み上げるように 便利さの鬩ぎ合 アッネさんの阿弥陀くじ、 からも去りゆく人の背を見送ってゆくのですねえ。 わなかっ たと思うしか無いのですねぇ。 1 語りは静なのに客観の眼は迫力に満ちて一気 人の世の摂理をやさしく深く阿弥陀くじ まして紫陽花 大きな世界を持っていなさる方なん 失速した身に合うた籤 の雨の季節です。 菱田満秋さんの水溜り、 そうして、 突放す勇気と依存 今までも 最初

取 111 山 谷 中 E 村 映

息

熊本県 倉吉市 三重県 大阪市 仙台市 横浜市 南市 本間満: 高 野 17 木森哉 津子 宵草 節子 輝 7 男

和泉市 倉敷市 中川 田辺

1

麻生路郎の作品とその周辺

なのこいろ

(90)

橘

薫

風

高いが、これは昭和10年の小論、 須崎豆秋論は戦後高鷲亜鈍の書いたのが名 福田山雨楼

彼の川柳の底辺を広くしていることか。 しんでいる。この生きた人間修業がどれだけ る。しかも豆秋君は川柳を始める前に仲々苦 た堅実さで粘り強く続ける。晩学の強味であ 刺とし詩才の閃きを見せなくとも世間を知っ 学の方は仲々止めっこない。若者のように潑 止めてしまう例は沢山ある。そこへゆくと晩 た天才作家が、三十になるかならずで川柳を 豆秋君は三十六歳から川柳に手を染めてい 割に晩学の方である。若くして名を挙げ

の瓢逸、

洒脱ぶりに至っては、俳人一茶の風

啞の子の話術ペロリと舌を出

の何れの句を見ても川柳の本流のユーモアが り、稟質的に恵まれていることを物語る。彼 せない。これは彼が生れながらの川柳家であ 底に一抹のユーモアが流動している事も見逃 などにその確かな観点を窺う事が出来、その 植木屋に貧乏寺と見られたり 直角に質屋の中へ折れ込んだ

根を卸しているのである

の肉体からこみ上げる滑稽感である。 などは微苦笑を湛えたものであり、 更生へ馬も早から起される た、のよな鉢へ毎朝水をやる 手ぶらでは鹿も相手にして呉れず 明朗な彼 更に

が、そして割に多作でない事に気がついたの であるが、ユーモアは随所に転がっていた。 格をすら偲ばすものがある。 本誌から彼の句を根気よく拾い集めて見た 昼の月なんば新地で引っぱられ

句に彼の俊敏な川柳眼が沢山向けられている。 などいくらでもある。とりわけ女性を詠った 取り立てにゆく後家の紺足袋 エスカレーター旦那のあとを追っかける 貧しさを猫の顔して笑ろて見た

> プロの味方になって詠い続けている 昨年の秋、豆秋君は名句 金が欲しい欲しいと聴診器へひょき

秋風の中で乞食に拝まれる

惜しまなかったが、秋になれば自ずと口に出 をものした。当時この句について僕は賞賛を で彼の顔を見て胸がすっとするのは僕一人で の熱心と技巧が益々円熟を示す所以で、句会 る程感銘が深い。更に昨年の秋の風水害で、 その他五句をものして之れ又驚ろかした。 いつも句会に出て来て、佳吟を吐くのも彼 大毎も止り豆腐屋も止り

はあるまい。 幻へ春の蚊一つ横ぎれり ()内は課題

夜桜へ下の方から月が出る 出勤へヒョコが少しついて来る 出

買初の子の物は子に提げさせる 中之島身の振方へ蟹が匐う 中之島

いる。 彼は彼の句作態度をしっかり把握して、自己 柳には晩学であるが、全く川柳に生れついて さて結論を急ぐ。前述のように豆秋君は川 磨けば磨くほど光る地金をもっている。

豆秋は、後にユーモアの権化と称せられる。 の命ずる進路にかじをゆるめなかったら、彼 ユーモアは今後完成の域に達するだろう。 この頃から山雨楼に川柳の一茶と謳われた

た句が多い。「生活即川柳」を唱える彼は、

懐にお金があってよくしゃべり こうもりよ又ボーナスが無さそうだ

豆秋君には金の句も亦多い。そして又秀れ



宮 西 弥 生 選

渡り終えた橋の長さよ短さよ おそ咲きの花おそ咲きの知恵 キ屋の苺の旬は何時だろう 埃 あって親しま を持

間

辛抱の 愛とは憎とは生きる限り 面白い話出てくる五目めし 数だけ優し女です 0 石 を積

美しく

咲

かせたいから手は抜

か

x

い日言

葉を買い

にコンビニに

身の程 太陽が照らしてくれる歩かね 七人の敵が待ち伏せする進 りがとう空気に言うた事がな を知らぬ大きなイヤリ ば 7

きょうもきた花からもらう笑う 捨てたつ 1 りの想いを泣かす風 気の音

生きてゆ やばやと飛ぶから蠅も叩かれる 能性ためしてみ 部 0 1 民話きい 掟虫 たい to てる野の仏 虫 なり 向 に風

> 羽曳野 藤井寺市 吉川 永 H H 10 美 b

富田林市 奈良県 鍛原 田 千里

大阪市 西宮市 門谷たず子 政岡日 浦千津子 枝子

米子市 H Ш 木村富美子 本希 久子

寝屋川

坂上

高栄

歌山市

吉村さち子

鳥取県 岡山県 さえきやえ 本

石 亩

歌山市

人生は ポテトチッ 洗濯は を混 まさかまさかの風まかせ およしと西の雲が言 ぜると亡母の声に プス詮無い夢を食べ尽くす

明日 浪費 気落ちした目にじゃ 二つ返事 妻の座でアリバイのない午後 したあとの虚しさ豊かさよ へのハンカチ洗う米洗う の時のあ なたを案じてる がいもの花ざかり

人間 人口孵化海 が真 ん中に 亀戻る浜がな いるクレヨン 画

風向きがあやしくなってぼけたふ もう少しすっぱくてよし 不快指数まともに出している紫 夏みか

乗せられて見たい 嘘をつくことに疲れた胡蝶蘭 ふくろうの グッズに森の風を恋う 言 葉が届 かな 11

こだわりを捨てる切っかけコーヒー入れる

人の世に愛の挽歌を繰 般若心経だけではすまぬ鶴を折 を囁きにくる三次会

チエの輪が解けそう眼鏡かけかえる の肌を育てた糠袋

びでつまら たい なる 0 晴 n 3 大阪 松江 Ш

1

ル

決

80

バンの上 1

の遊

和泉市 歌山 堺 塚市 野村 中川 池田 木本 志田 小野 京子

寝屋川 八王子市 横浜市 八尾市 尼崎市 横浜市 八尾市 西宮市 奥田 近藤 村上 長浜 後藤 播本 高橋 籠島 一みつ子 ミッ子 早智 夕花 恵子

羽曳野 米子市 横浜市 徳山 中井 清水 2 つこ WD 3 華

鳥取県 八尾 倉敷市 淡路 高 \mathbb{H} 村きみ子 ゆり子 步

鳥取県 鳥取 岩崎 土 みさ江

大阪市

稲本

ŋ

明日 大物の姿炎えたをみる伝記いくばくの余生あわてる何 菜種 仮 直 土 正 豊 少子時代 指切りに鬼 U 7 舌先が少しはずんで生 母子 女 E ロン 系 線 一踏まず夫にも見せたことがな 当防衛蜂 と皮を脱い 0 1 1 かさが人 味 あ 0 、翔ぶため か 世で休憩をする はあすの風のサインに任 像に 込 梅 物がなくて農家の嫁となる ネ 道に 雨雑 ブスの 嚙めば許すゆるすと花 2 n 6 がつか たら過 里 見 II 12 减 2 も事 n も 草だけが元気づく 0 3 も仲間に入れ 0 サンマ ば 匹 でやさしくなる鬼 心を切 ン子 静 卵ヒント ほ 0 3 なく 故 去 b か を処刑する 0 衣 たしは を育 に 車 かい < なっ あ 籐 を焼く臭 鯉 + 横 高 n 揃 0 かんべしてやろう む 0 枕 た に頂きぬ 捨 2 が < 0 た粗品 殺虫 れまし ほ 誤 だ勲 b 7 世 0 てる 怖 \$ 10 0 た せ 章 老 きり です 43 か Va

> Ш 寺 鷲見 嶋 本 ます 見 早 寿 IE

歌山 歌 田 桜井 栗田 武 本 干秀

八尾 鳥 取 市 市 坂田 大内 和歌子 朝子

歌山

市

JII

E

富

湖

もう堪忍して下さいなエ

ルニ

1

=

3

愛媛 出雲 大阪 鳳 市 黑 袁 JII 久保睦子 田 Ш 多質 茂代 子

Ш

市

東京都 鳥 取 Ш 県 矢 西 藤 原 内 端 すみれ , 寿恵子 柳子

寝屋川市 和 寝屋川市 米子市 今治士 歌山 村上 家守 井上 Ш П 三千子 久美子 加

佐治千

加

あるはず。

人生は楽し

生はこ

n

0)

返し。

きっ

と「やった」という

たされ

な

焦り、 繰

そし

て喜びがあっ

とい

う

間

to に消

ŋ 切 0 影 かい とう 7 消 あ す なた忘れることにする 0 1 年 1 0 齢 声がありました をとり 過ぎる

寝屋

111

か

すみ

Ш

歌山

本

歌山

坂

東 松

代

黒田

能子

押花 つく カラオケでお 足音を立 の句 づく と鏡 てず 10 II 0 K 0 老い か 顔 に は ょ はやって来る 正 10 直 便 1:

たっ 力まずに ぶりの 夢ふ くら ま すシャ ボ

缶を拾う私 愛があ 0 ばさん青 好 きな なたを困らせる 春とり ン玉 戻 す

> 寝屋川 寝屋川

岸野

あ

やめ

堀江

寝屋川 藤井寺 横 阪 浜 市 本間 太田 保田 太田 とし子 扶美代 満 津 子

さん。 尊しとせずの通 かしさは大変らしい。 に慣 めたステッ いのかも LI 思う。 n わゑさんの これ すぎた人間さまの心を、 甘さ控えたケー 叩 けば埃 れでよい 来より過去のお プ。先頭に出 俊子さんの句 美代子さんの ŋ 0 句 のだろう。 出 1 おくれ る者 この 旬なんか考えてい きも出てい るば 句 ば 世に完全無欠がない た分だけ肥やしを沢山身につけ 1 出足は少し遅 ーシー かり 寿美さん かり Vi が多す でが重なる。 大きく寄せつ -ズンなしの! が良 ぎる 0 しとせず ると商 句 n たが 此 人生 ける事 走 街 0 か 豐 頃 0 売になら 0 b 7 も半 足 Ш か ケ は 面 な生 高きが 元を固 どう 0 白 む 走 丰 V

題

III

宮 Ш 久 選

のない川を渡ってくれます

か

川べりを小声で歌う万歩計 たんぽぽとやがて恋する川向こう 紆余曲折川はいつでも病んでいる 曲水の宴に華やぐ水の音 意地張って我流で泳ぐ狭い川 底で光を放つ五円玉

安美代子

大高 朝

飛び石の中州に咲いていたすみれ 新人の川へ流されまいとする 川の字の味を知らない若夫婦 川の字に寝る幸せの妻の顔 川面にて化粧直しのハイキング 度川と言う字で寝て見たい

もう

惠

老いて未だ遊び心が川にある 球場へわんさわんさと川になる 身勝手な女をはばむ冬の川 夜の蝶ネオンの川を渡り切る

名水も川の流れに逆らえず 下水道完備ほたるの帰る川

> 登 螢 洋 齋良 JII

肩書を川に流して君が好き 心にもないことを言う夜の川 臆病で川の一つが渡れない 橋のない川で溺れてばかりいる

しげお

茂

史 代 曲りくねった川と昔の話する 水がある川を蛍は知っている 川に逆らう一匹のやせ蛙

いじめなど春の小川にない田

IE.

雄

有

朗

弘、

川の字に一粒種を真ん中に

越すに越せないもどかしさ

さち子

郎 子

名水の川あり母は達者なり ちちははを浄土へ送る盆の川

高橋

岳水

ささやかな膳で卒寿の老母祝う ささやかな料理にこもる妻の知恵 ささやかな奢り地酒を揃えてる ささやかな抗議白票入れてくる ささやかな抵抗だったひとり旅 ささやかな反抗口を一文字 ささやかな色気が老いを遅らせる ささやかな事に腹立つ日の愚か

風広郎章

天の川恋は苦しいものです 老いてなお力をくれる母の 川上に昔話がきっとある 川上に住んで汚れを知らず老い ふるさとに大根洗った川が無い

谷川のせせらぎを聞く独り旅 せせらぎに故里思う旅の宿 此の川をのぼれば鎮守の森につく ふるさとの川にメダカはもう居ない 川のない橋の上から見る都会 コンクリートの小川魚に嫌われる

川底の小石世に出る時機を待つ

久仁於

一朗

明

川岸の愛を結んだ虹の橋 あそびしたみよちゃんは孫を抱く

たもつ

重 的

信 ささやかに名前が残る宮の隅

こつこつと溜めて中古のバイク買う ささやかなプライド人の手は借りぬ 色即是空ささやかな夢を追 ささやかな願いを吊す星祭 ささやかな夢にも税が追ってくる コンビニでおつりは募金箱に入れ

ささやか

谷 節 夫

(監) 正

剛

選

ささやかな幸福がある金魚鉢 ささやかな願い妻より先に死 ささやかに和気あいあいと趣味の会 ささやかな気配り生きる土産物 初サラリー母へ小さな贈り物 ささやかなゆとり花瓶に花がある ささやかに翔んで妻の座崩さない 82 (川) 睦 あずき あずま

ささやかで嬉しい孫のプレゼント ささやかな庭へ種選る花を選る ささやかな幸せもらう野の小径 ささやかな母の手料理旬の味 初孫にささやかながら雛かざり ささやかな田畑を守る里の母 ささやかな夢にランプの宿がある ささやかな夕餉一本ついている

変

よしえ

化

西 Ш 和 子 選

和歌子 ただし 登 京 朝 子 妥協したときから壊れだす自然 古希までの人生を見る万華鏡 変化する故郷の景色を絵に残す 嫌われても変わらぬ母の粗衣粗食 エルニーニョ地球が変化する怖さ

喬

新聞がビックリ箱によく変る

治

齋

ささやかに生きておりますゴミの量 隆 良 風 少年の変化を愛がキャッチする 遺伝子に変化がなくて蛙の子 少子化が大きく変えた子の世界 つつましさどこへ捨てたか露出症

ささやかな気持ちを前掛けに包む

古代人土の香りの耳飾り

ささやかな差でもバーゲン追いかける ささやかな抵抗赤い靴を買う ささやかなナースの笑みにある温み ささやかな恋がしたくて源氏読む ささやかな祈りも今日の句読点 ささやかな暮しに満ちている笑顔

句読点打って変化を翔ぶつもり

保護色に変化しているかくれみの

路

ささやかな夕餉もぬくい共白髪 ささやかなときめき閉じるコンパクト 晩学へささやかな夢賭けている

Œ

雄

勝

視

変化球投げて相手の出方見る 熱血の教師変化を見逃さぬ

(監) 正

時

ちかし

匍

岳 風 水 変貌をかくす外壁塗りかえる 変化球妻は無惨に打ち砕く 懐に隠し持ってる変化球 矢面に立てば必ず変化球

ささやかな知恵で神さま怒らせる

ささやかな願い地雷のない地球

小林

周信

どう化けてみても神経痛がでる

しげお

日枝子

車イス変化の見えぬ妻見舞う

日進月歩ころころ変る医療薬 癌かなと思う優しい変身に ささやかな署名反核燃えている

ささやかな画布一枚を子に残す

^(川) 睦志寛

子重 子

多哥由

螢

齊

あずき

心境の変化を笑う札の 酒煙草止めてすっかり他家の人

あずま 俊 朝 勝 男 仏にも夜叉にも変る妻の面 病んでからとてもやさしくなった姑 同居して丸くなったという噂 茶髪の嫁がちょっぴり家風変えていく 母親の涙が変えた娘の態度 変化する世相におくれそうになる シナリオを変えねばならぬ世の流れ 親友にうらぎられては変化する 裏読んで変換キーを打ちこんだ 真実を書くと歴史が変化する 渡り鳥風の変化を見逃がさぬ 変化する時代孤独な影を見る すんなりと変化の出来ぬ裏事情

有一郎 雲海の変化下界は大荒れか 定年後少し変わった欲の質 ソロバンの読みへ流れが向きを変え

可

住

風向きでだんだん変る守備範囲 変化した俺だけが見る虹がある 所得さえ多けりゃ変化でもします はるお 勇 ミツ子 太 郎

不況風変化を待って待ち疲れ 私をどう変えようかコンパクト 捨て石の形に老母の背が曲る 高橋 (稲) 洋

87

たず子

周

宏

治 章 17

俶

子

矿步数室

― 上る(のぼる・あがる)

柳塔本年二月号の巻頭言で薫風先生が 亡母の闇この世は雨が降ってます 字の重さ、 一字のこだわりについて。]]]

なっても丁寧に表現なさらないと効果は半減 すが、ここは「雨が降っています」と下六に れず、お母さんを思う至情はよく理解出来ま と発表した句を見た時実新子さんは間髪を入

どころか思いが半端になってしまいます、と れておられる。 いうご忠告のハガキをいただかれたことに触

が伝わるようにしていただきたいもの。 も反芻咀嚼して句姿を整え、意のあるところ 一字の持つ重みを十分に嚙みしめ、句を何度 川柳は十七音字の表現の世界だけに、その

〇母親の味に山椒煮たき上る

▽たき上げた山椒煮やっと母の味 親の一字を省略し、前後を代えてみる

> ▽雨上りガーデニングに精を出 ○雨上りガーデニングに凝る私 "私"がいわずもがなの表現

〇行き交うて走りを上げるジョッギング 勝 久

中七の表現が今一つ

○予期しない出逢いに声が舞い上り ▽ライバルがいてジョギングの速度上げ 子

子

○燃え上る事も忘れて春うらら 一句を一緒につきまぜると

▽めぐり逢い焼けぼっくいが燃え上る

○好ペアで夫ダンスに熱上げる 上五がもう一つ。参考句もありきたりだが 典

▽定退で社交ダンスに熱を上げ ○転んでもすぐ立ち上る頼もしさ 宗 明

転んでもが冗長

▽立ち上る気力へ親は期待かけ ○上り坂後押してる小さな手 小さな手もいいが、家族とすれば

てる代

▽上り坂後押しをする家族の手

○同窓会就職列車に乗った友 上り列車或は上京の意でしょうが、原句の いない ままでは上りに限定されず、上りが詠めて 捷 也

○棒グラフ妻の支えで上り坂 ▽就職の上り列車に夢を賭け この場合上り坂を上り出しでいかが

啓

子

○大空へつり上る様鯉幟

弘

子

鯉幟の様子だけでなくこの中に人間を詩い

込むこと

▽初孫よ天まで上れ鯉幟 ○盛り上る土の中から見る芽吹き 路

子.

原句の趣旨を重んじると

○雨上るさわやかに晴れ今日がある ▽盛り上る土へ芽吹きのいのち見る タツヱ

▽娘の縁談すったもんだの雨上り 下五が何を言わんとしているのか。

○水しぶき上げて走れよ帆掛け船 下五の表現で風物詩となり、人間が詩われ 真

○アドバルン上げて空から客を呼ぶ ▽水しぶき上げて走れよ夫婦船 ていない。 栄 翁

▽アドバルン上げて客待つ蔵ざらえ 上げて一空から同義語。どちらか省略

○商売も不況続きで上ったり 説明句に近い。

○自販機でメートル上るワンカップ ▽商いも口が干上る不況風

宏

自販機が不要の言葉

▽ワンカップメートル上る旅の空 ○一段を上れば自信孫の笑み

美也子

▽一段を上って拍手歩き初め 切り口のある言葉を探すこと

江

▽血が上る愛に貧富の隔てなく	るだけ題に忠実であって欲しかった。	上ばる上がると幅の広い題ですので、でき	○恋愛は上下の隔てなく平和 静子	▽階段をそっと上った午前様	こんな場合陳腐な表現だが	○階段を上る足音孫帰宅智加恵	▽ドキドキと喉カラカラの初舞台	中七の表現が一。上るを使わなくても	○乾く喉待つ間も上る初舞台 トヨ子	▽大物の魚拓へ酒の味が増し	句全体に切れがない。上るを使わなくても	○海の幸釣れて上ったエビス顔 國八重子	▽上り下りいろいろあった古稀の坂	これでは舞台がない。奥行のある句を	○古稀の坂上れば喜寿の坂が待ち 徳 三	▽頂上へ上るキャリアが墜ちた罠	人間が詠めていない。時事吟として	原句のままでは単に標があるというだけで、	○今少し上れば頂上の標がある 一乗	▽孫自慢花丸増えた答案紙	嬉しくて見せ歩く、縮めて孫自慢	○嬉しくて孫の百点見せ歩く 政子	▽エリートが上った梯子外される	時事吟として官僚の腐敗を詠めば	〇人生のはしご死ぬまで上る意気 美子
▽ムカついて中三すぐにキレてくる	上十二音字が冗長。具体的な対象を	〇辛抱をする事知らず血が上る 義男	▽満点が声はり上げるランドセル	「只今」では夢がない。	〇只今と声はり上げるランドセル みやこ	▽親がいて気楽に上る里の家	に手足が伸ばせるのは親がいる間という。	上五に一考が欲しかった。普通実家で気楽	○何時までも気楽に上る里の家 よし子	ここは郷土力士のとした方が一	○子の声援郷土の力士星上る 忠 男	▽お賽銭論吉を上げた甲斐もなく	下五の疑問詞は芳しくない。	○お賽銭諭吉を上げて効ありやミツオ	▽遺影抱き石段上る遍路笠	上七中八と破調過ぎる。	○遺影を胸に同行二人で上る坂 郁 子	▽早耳が相場上るのネタ仕入れ	二句を捏ね合わすと	○上るというそのひと言で耳動く 哲平	○上るということばの好きな株屋さん 哲 平	▽上げ底の土産に疲れドッと出る	想は立派なもの	吹き返しより本来は振り返しでしょう。着	○上げ底の土産に疲れ吹き返し ト キ
上げ潮の気運に乗った優勝旗	私の句	(時の風=時節到来、いい表現)	舞い上る時の風待つ奴凧 つよし	(時事としてうまく突いている)	取り上げたナイフの行方気にかかる ア キ	血が上りしどろもどろの言い逃れ 省 子	(芥川龍之助の蜘蛛の糸からつまくまとめた)	極楽へ上れるはずの蜘蛛の糸 慕情	(上る=お伺いする。いい見付け)	すぐ上りますと一日待たされる ())雅子	(嬉しい見付け)	長年の床が上って児も噪ぐ 輝 夫	(素直に詠まれて)	オクターブ上げる電話は孫の声 睦子	(アングルがいい)	逆上り出来た子供の輝く眼 泰雄	(元気を出して一)	打ちしずむ風に再起の帆を上げる 志 重	エリートが上りつめては天下るよしこ	初舞台人文字三つのみこんで 要子	上ずった言葉に嘘が見え隠れてる子	上る手の勢い教師見のがさず隆	(初めての佳句、頑張られましたね)	助っ人に効果が上る勝ちゲーム 晩 翠	佳 句

- 89 -

本 社 六月句会

六月八日(月)午後五 1 ナ 大 時 阪 *

屋デパートの火災以来のこと等、 り着けるようになったのは、昭和七年の白木 を生んだ町であること、また語り継がれてい 周辺の名所、粉河寺、根来寺の話、 役所内部のことは話せないのでとことわり、 歌山県庁を退職後も那賀郡の消防本部に勤務、 る稲叢の火の実話などを話す。 徳を偲び、壇上には紫陽花が活けられていた。 会は九十九名の参加により定刻開催された。 、冥福を祈り一分間の黙祷を捧げる 後半は少しくだけて、女性が下着をきっち お話は公務員歴四十年の三宅保州さん。 はじめに五月亡くなった同人中野欅子さん 間もなく一周忌を迎える小出智子さんの遺 雨晴れ間のさわやかな八日夕刻、 女性風俗史 華岡青洲 和

> 花より奇麗そんな娘に騙された 花柄の封筒で来た請求書 あじさいが旅に出ようと囁いた 紫陽花が夫婦の会話聞いている 銀の雨ひきあじさいの筆をおく 紫陽花の雨と契っている風情 紫陽花の心がわりをせめる雨 あじさいのお喋りを聞くかたつむり あじさいははかなきひとを憶う花 梶川 雄次郎 扶美代 頂留子 昭倫 富

慶びに花屋の花がみな笑う 目いっぱい花といっしょに生きてみる 嵐吹く前に逢いたい花時計 咲く日まで耐える女のプランター カタカナ語の花が日本の地に馴染み 口癖にいつかは咲くと言うてはる 病む妻に香りのうすい花を選る 柩にはカサブランカを頼んどく 散る花に想いを寄せる古稀の杖 ひまわりに憧れすぎて炎えつきる 校庭の薔薇みな外を向いて咲き 病んでみて花の生命もいとおしむ 胸の炎を余す向日葵天に燃え

ダン吉

正保吐坊子来

みつ子

セツ子

義

にも及ぶ豊富な話題で会場を湧かせた。

間賞は稲葉冬葉さん(京都府)に輝く。

(記名―月子・いわる (受付―義子・澄子)

たず子

ライフワーク私は五文字核はゼ 少し足短いけれど好きな人 短くて長い縁よ夫婦坂

くちなしの香りにつのる恋心 花一輪挿して詩人になってます ほめられて百合がすこうしだけ揺れた じゃがいもの花をしっかり褒めてやる 母の日にくれる花なら白くとも 好きな花咲いていますか黄泉の国 徒歩通勤 野ぎくの君に会えるから ホッとする処にいつも花がある みぞおちのバラが真っ赤に恋をする 百のドラマを抱いて生き 孫が大学生となる 朝保夕 金 IF.

子

子州花坊

イビスカス咲くひめゆりの塔想う 吉]]] 弄 雄次郎

陽より大きい子の絵の中のチューリップ

たず子

吐 頂留子

胸のうち庭のあやめに覗かれる 生きる道名もなき花に教えられ

花束で嬉し涙を隠してる

よしと短い父の一言頼もしい だんだんと気短になる余命 振り向けばあっという間の七十年 背丈伸びことば短くなる息子 短くてよいのに届かぬ子の便り 謄本に過去が短く書いてある 竜宮城だから短い逢瀬です 日本一短い手紙アイラブ・ユー +

手短に済ませたはずの電話代 野心抱く日から短い二十四時 (清) 勇 たもつ ますみ 太

天しげお 寿美子

友達にしてしまいたい鳳仙花

-90

月見草いのちの程は知っている アイラブユー五文字で足りた若かった 会話短くなって夫婦のめし茶碗 もう少し命がほしいしゃぼん玉 短いが父の小言は身に染みる どうぬくめよう短いふたりの持ち時間 短いスピーチにポイントを効かす いのち短し恋の蛍火乱舞する 青春というには短かった日々 妻に贈るこんな短い言葉だが 短くなった命を一度裏返す 敗戦の苦労短足ものがたり 持ち時間もううかうかとしておれぬ 嫁がせる残り短い日を数え 短いが辛味のきいた師の叱言 話せば長い書けば短い私小説 ハラハラといのち短しさくら散る 前向きに生きて短い二十四時 はなむけの言葉短く温か 人生百年短い命だと思う 珠玉の短編に会う古本屋 まあるくチビた鉛筆だからお友達 手短に言うと二分で済むはなし お別れのあいさつ短い方がよい 瞬きのあいだに消えた夢いくつ 愛は短く始まった 短く急所突いてくる かすみ 希久子 寿美子 たず子 ますみ 扶美代 たもつ 高 文 重 柳宏子 Ξ 秋 人 治 裏切らぬ土へやさしい花の苗 婦警さんやさしく諫め切符切る やさしさが欠点になるお人好 やさしさが特効薬になる介護 遠望の富士はやさしい顔である 秘密持つたびにやさしくなってゆく やさしい人の名札はちゃんと見て帰る 今ならばやさしく出来たのに 母さん やさしさの泉を妻はもっている やさしさへ本音ちらちらいじめっ子 誰にでもやさしい人に頼らない 何かある妻があまりにやさし過ぎ やさしさで少し真実曲げておく とつぐ娘に父はひと言達者でな やさしくて芯が強くて姉御肌 金曜の駅はやさしい人ばかり やさしさに甘えて老化してしまう 相合傘の雫やさしい手が触れる 神の掌に届かなかった縄梯子 生いたちを書く鉛筆が短すぎ ありがとうとても短い言葉だが 真実を吐いて短くなった芯 言のやさしさに泣く老母がいる 本 英 子 希久子 たず子 あやめ 夕 扶美代 ダン吉 しげお 寿 富 風清 美 湖 ほころびを縫うてやさしい糸切歯 傷ついた分やさしさに飢えてい 私より外の女にやさしすぎ ありがとう孫が麦茶を入れてくれ やさしさごっこにそろそろ飽きてきた仮面 胃を切ってやさしい言葉つめてくる 怖いけどやっぱりやさしいのは妻だ やさしさはだまって横にすわるだけ 美容院やさしい男ばかりなり やさしさが紫陽花に似て七変化 やさしさをもらう一番いい薬 やさしさにどっぷり浸るちひろの絵 悲しみの底でやさしい人と知り 姑かなしだんだんやさしくなってゆく ボーナスへやさしい声に変る妻 環境にやさしいゴミを出しに行く やさしさに溺れてみたい赤ワイン 盲導犬なんとやさしいエスコート 誕生日やさしい言葉だけでよい 駅員も人もやさしい山の駅 病床へみんなやさしい嘘を言う 嫁の留守息子やさしくしてくれる 猫にだけやさしい声の出せる嫁 ファスナーをやさしく下ろしてあげている 章 T 柳宏子 かすみ いわゑ しげお 千枝子 諷云児

子

久

里

お決れにやさしい嘘も添えました

みつ子

母さんのびくともしない避雷針

雷が落ちて煩悩一つ消え 遠雷を聞くふる里に母ひとり 父の雷笑って躱す齢になり 禁煙のデスク雷よく落とす 大物になりそう雷こわがらぬ むかしむかし雷こわいと言った妻 雷が胸のつかえを吹き飛ばす 雷鳴へ子の手がきつうきつうなり 雷を落として社長席を立つ 雷に男らしさを試される さっきまでのカミナリ鼾かいてはる 雷が遠のき夫婦もめ直し 雷を落とす教師は愛を抱く 雷に打たれたような初対面 遠雷にときどき山が浮き上がる 雷鳴へ派手な音さす台所 春雷にあしたの虹を信じよう 子には子の暮し遠雷聞きながら 病床で雷聞いているいのち ヒルガオは雷雨にこころ許してる かみなりも愛も一途に突っ走る ぼくの雷とっくに効き目切れている 鳴ったのは父の雷かも知れぬ 師の伝言を聞きもらす しげお 武庫坊 希久子 洞 いわゑ

英 子 + 遠雷に金借りた人ふと思い 叱る娘へやんわり母の避雷針 遠雷は核に怒った天の 雷を恐れぬ臍が闊歩する 雷を恐がる男はんといる 雷鳴の響き女の愛試す 雷鳴に心の奥を見透かされ 雷になれない父の無表情 雷鳴が夫婦喧嘩を連れて逃げ 雷鳴が止んで続きを叱られる 雷を落してほしいおとうさん

春雷に心の迷いふっ切れる 雷を小言に変えた父の老い

雷が恋しくなって墓の前

いわゑ

懐に雷抱いたままの父

虹ひとつ置き雷は沖に

雷が鳴るとやさしい妻になる 雷を落とすおやじの温 40 顔

勺

花

文

村

切れそうな絆へ迷う裁ち鋏 電動の蟹の鋏が客を呼び ごめんねと母さん紫陽花に鋏 縁日で買ったはさみがよく切れ 姑が切れば鋏も切れる音

三手先読めて冷たい花鋏 鋏みな歯こぼれしてる永田 はさみ 田 田 中 Œ

坊 みつ子

絆切るはさみ時々欲しくなる

風

雷神の涙あじさい色の

子郎

みんな嫁く一人残った裁ちばさみ 切れ味の悪い鋏の機嫌とる

出稼ぎを守るおんなの裁ちばさみ 断髪の鋏に巨漢べそをかき 小錦を泣かせる鋏はいります 目を吊り上げて妻が鋏を研いでいる 亡母の付けた鋏の鈴はもう鳴らぬ ファッションへ夢がひろがる裁ち鋏 慕情ひとつすんなり切れぬ花ばさみ 化鋏余計なことを喋りすぎ

しげお

子花

義理一つ断ち切るはさみ重すぎる 剪定ばさみ一日かかる松がある 美しく咲くとはさみを持って来る 古はさみ母が握れば良く切れる 近頃は紐ばかり切る裁ちばさみ

鬼澄哲金信鬼周

子郎太子游

その度に心が疼く花ばさみ 植木屋の鋏昼まで降りてこず ジェラシーを断ち切るはさみ研いでいる いじわるなはさみに枝は強くなる 小気味よいはさみストレス消えてゆく しげお 三男

凜と咲く百合にははさみ向けられぬ ますみ ダン吉

断ち切った過去に刃こぼれした鋏 ストレスを溶かしてくれる花鋏 梅雨晴れ間忙しくなる庭ばさみ

裁ちばさみ母はふたりの娘を育て み 寿 周 つ子 美 信

諷云児

干し大根日向の匂い老母の味土の無いくらしおふくろ馴染まな おふくろに似た人ばかり天王寺 おふくろにやさしい孫だありがたし おふくろの資格審査を孫にさせ おふくろのくせを真似てる孫の口 石臼の重さでおふくろ家守る 五十過ぎてもおふくろがおふくろが おふくろに少し心配させておき おふくろと一度も呼んだことがない 或る日からおふくろなどと呼んでくれ 切れ過ぎる鋏で役をはずされる ところどころ鋏入れたい僕の過去 はさみより手早い母の糸切り ささやかな髪に鋏は気をつかい 父なき児ちゃんと育てた裁ち鋏 男など頼りにしない裁ち鋏 戦中の飢えを凌いだ裁ち鋏 汗知らぬはさみがテープカットする 選ばれて今日は臍の緒切る鋏 ンケルのはさみを持っている自信 一輪仏と話す花ばさみ 高 蕭 風 千枝子 洞 泰 夕 みつ子 昭 鬼 Œ かすみ 巳 萬 T 重 周 勇 石 螢 文 村 花 的 步 舟 出世しておふくろさんと言うてみる 辞書にない字をおふくろは知っている 出世しておふくろさんを自慢する おふくろさん歌っと機嫌よい社長 友達のおふくろにまた叱られる おふくろがわたしを庇う嘘ひとつ 楢山へ行くとおふくろてこずらす おふくろが大往生を読んでいる 口癖におふくろ戦争を憎み 落ちぶれてもおふくろだけは目が温い おふくろを越せぬ男が書く童話 おふくろも昔はモガであったらし 連れだって歩くおふくろ若すぎる 受話器から老母のやさしさほこほこと 家族和ますおふくろのカタカナ語 おふくろも携帯電話持っている 娘三人私おふくろにはなれぬ おふくろは愚弟の僕と住んでいる おふくろの元気な証拠さじ加減 なに不自由ないおふくろの粗衣粗食 おふくろの寝酒出張先で買う 僕の好物おふくろの好きなもの おふくろの皺をふやした悪い僕 茶髪にしてもおふくろ気にもせぬ様子 おふくろの味ハンバーグに変り行く おふくろの言うた通りに風邪をひき 言居士にもおふくろという泣きどころ

> おふくろが呼びにくるはずないんだが おふくろの機嫌で一人撮っておく 希久子

燕

冬

葉

希久子

吉太郎

友がみなおふくろと呼ぶ僕の

シマ子

N H K 学園 根上川柳大会

事前投句(締切終了) ところ JR北陸本線寺井駅下車徒歩5分 石川県根上町総合文化会館

「楽しい」 橘高 中山 薫風選.

シマ子

千枝子 洋敏 賢 周信

とき

7月12日(日)受付開始午前10

度

申込先800東京都国立市富士見台2―36 ・大会への出席希望者は往復ハガキで申 当日投句(各題2句・締切午後 円(投句料500円作品集代700 込んでください。当日会費=1200 〒186 NHK学園根上川柳大会事務局 演「種田山頭火」 3 **2**042−572−3151 福井 山本 片岡つとむ 中島 政枝選 一臣選

諷云児 ダン吉 しげお

希久子

男

石 文

舟子

男



さようなら中野欅子さん

瀬 戸 まさよ

えられた。
中野光さんは静かに生を終

号は 「欅子」ロマンに溢れた名である。六 十年前、彼女は母校である夕陽丘高女の修学 旅行の際、仙台の県木でもあるケヤキの埋木 旅行の際、仙台の県木でもあるケヤキの埋木 旅行の際、仙台の県木でもあるケヤキの埋木 加工を友人への土産とした。友人は彼女が、 『川柳塔』の同人に推せんされたとき、その 『上柳塔』の同人に推せんされたとき、その 『上柳塔』の同人に推せんされたとき、その 『川柳塔』の同人に推せんされたとき、その 『上の名を贈ったのであ る。彼女は当時、机を並べていた朝日カルチ なってから、その香り高 い名を祝福された。それにふさわしく欅子さ んは次々と佳句を生み出された。

ある。切ない思いをずっと胸に秘められていたのだ。切ない思いをずっと胸に秘められていたのだ。

されるお一人だった。

加され、落ち着いた華やぎの雰囲気を醸しだ

落だった。カルチャー教室の催しには率先参落だった。カルチャー教室の催しには率先表しい仮名な対なす。
思い出は尽きない。ファッションに熱いま見とれるほどの腕前でもあった。
思い出は尽きない。ファッションに熱いま見とれるほどの腕前でもあった。

り返されておられたが一残念なことである。 今年の賀状はいつもの毛筆でなくペン書き 今年の賀状はいつもの毛筆でなくペン書き

「今年は元気を出して遠のいた川柳を呼び戻したく思っております。年齢と共に気力を戻したく思っております。年齢と共に気力をにくして自分でもはがゆく思っております。

一下成十年五月二日 寂 でを賞してくださることと思います。 でを賞してくださることと思います。 でと褒賞してくださることと思います。

三人までも亡くされている。辛い、悲しい、立たれている。それに四人のお子さんのうち

勇気湧く東尋坊の濤しぶき

戒名 慈法院彗光妙傳大姉

ではない。欅子さんも十五年前、ご主人に先

しかし、人の一生は順風満帆のときばかり

欅子さんはまさに、その女性であった。美しく、賢く、素直がいい」と言っている。

イギリスの作家サマセットモームは「女は

0.4



嗚呼、松下たつみさん

時は、大変なショックであった。死亡日時は 去る五月十八日午前二時十五分であった。 信半疑であったが、現実であることを知った 若い時は義勇軍で、満州で活躍され、 松下たつみさんの訃報を聞いたときは、

麻生路郎師の薫陶を受けた。昭和三十九年に 年七月に川柳雑誌本社句会へ初出席、 阿萬萬的氏等のご指導で作句の腕を磨き、 社へ転勤し大鉄川柳会へ入会、正本水客氏、 道管理局へ入職、昭和三十八年四月、 で帰国し昭和二十三年四月、旧国鉄の米子鉄 百

昭和五十年には全国鉄の全国大会を開催した 年三月に定年退職をされている 客車区助役と要職を歴任、昭和五十四年四月 勤務の方はその後、米子機関区助役、 旧国鉄の鳥取川柳会を指導され、 現することもなく、逝かれてしまった。 平成三年十月一日、栄えある路郎賞準優秀

に川柳塔社の同人となり、今日に及んでいた。 は、川雑不朽洞会員となり、昭和四十年十月

> 関係者の脳裏からいまだ去っていない。 を発揮し、大成功のうちに閉幕したことは、 とき、大会委員長として周到な計画と指導力 ら尊敬され、良き管理者であった。 川柳においても大変世話強い人で、昭和五 たつみさんは上司から信頼が厚く、部下か

会をやりましょう」と、話をしていたが、 川柳教室を開催していたので「一度、合同句 団地」の川柳教室を開き、指導されていた。 そして代議員も六期十二年間も担当された。 昭和六十二年から住んでおられる「こしき 私も「こしき団地」の隣の溝口町で、 実

十二年には鳥取県川柳作家協会の監事を務め

ただき、会の活気が一層広がる思いで、嬉し をしている「松露川柳会」の会員になってい それより前の昭和五十二年には、私が代表

作を獲得され、柳友から祝福を受けた。

更に、平成五年には、米子社会保健健康セン ターの柳壇選者として、その手腕を発揮され 平成四年には朝日新聞地方版の柳壇選者

手術をされた。病名は直腸癌であった。 考えていた矢先の訃報には、驚きの一語につ いるので、全快され退院されたものと思い、 者名簿を見ると、たつみさんの氏名が消えて 検査を受けているので、受診した後、入院患 おられたが、今年三月、三回目の入院で再度 検査入院されたが異状なく退院され、喜んで 入院して手術をされた。平成九年十二月には 度電話するか、お伺いしてお話をしたいと 去る三月十五日、私もこの病院で定期的に しかし、平成八年四月頃から体調を崩し、

皈元辰應良秀居士

きる思いである。享年七十一歳

合

人生のあしたへ辞書を買うてくる 後を継ぐ約束のない父の城 きっと消える噂だ我慢しておこう 悟ったか風の便りを気にしない 争わぬ男に垢がたまりだす たつみ 11



毎月25日締切・ 30句以内厳守

編集部

宮崎シマ子報

すんなりと信じて裏が読みきれず すんなりと決めた割にはもめている 盆の僧麦茶半分飲んで立ち 褒められて道が険しくなってくる 褒められて頻染める娘はもついない すんなりと昨日のものが出ぬこわさ すんなりと四島還ること祈る すんなりと今があるやに人は言う 田実子 シマ子 欣史子 喜美子 弘 直

柳塔きゃらぼく 政岡日枝子報

バージンロードがとっても嫌いなおとうさん 老母が逝く不足一言口にせず 新緑を縫って電車の人となる 緑濃い森で出合ったおじいさん 開き出す牡丹にもらう息づかい あっけらかんおててつないでピアスくん ともかくも感謝を込めた神詣で 人として遺せるものが何もない ふくろうの真うしろ風が守っている 花 八重子 日枝子 富美子 子. 雀 子 子

> 芍薬の呼吸でボタン愛でている 言葉失いもどかしい日が多くなり 待ちぼうけやけにブランコ揺れている 約束をした小指には夢がある 檻というかたちに子らを遊ばせる 何げなくそして重宝新聞紙 面ぬいでおてんと様に手を合わす 朝晩の髪に情けの要る鏡 生きて来たあかしあの駅この 裏を読むことも覚えて飢えている

とっとり川柳会 武田

内定の通知うきうき封を切る 勝算は確かうきうき米を磨ぐ 多哥由 和典 郎 子 枝

石花菜 粗 枝 良 男

晴天や稚児の拾ひし春落葉

千玲 品 てい子 公園のつづき古墳群があり 言い訳をしない拳を握り締め 監視カメラに握られていて動けない 公園の鳩にあだ名をつけられる 公園に住所不定が幅利かす 人混みを避け公園で昼寝する 公園の猿が抜け毛を悩んでる 公園で不倫の人とすれ違う

よしえ

雀 郎 釜

悲しいね祖母が砂場で遊び出す 週刊誌一冊持って公園 公園に煙草一本吸いに行く

すみえ

サークル檸檬

花の雨 それぞれがびっくり箱をかくし持つ 箱を開ければ陽気な集積回 美しい箱から鳩は出なかった ロボットの腕に介護をされそうだ 傾く少年兵の墓

初恋が眠り続けている文箱

喜美子

すべり出す本音がこわい今日のペン 幸せか何も思い出せぬ日々よ しなやかに横糸に罪織りこもう 乙姫の注意忘れた玉手箱 っくり箱つぎつぎあいて逃げ惑う

智恵子 あずき

横浜あおば川柳会

人類の力を試すエルニーニョ つかんでた凧の糸にもある自由

子

帆雀報

新調のドレスうきうきまだ女 うきうきと今朝の婆ちゃん活きがいい うきっきとしてたら財布すりとられ 居酒屋にうきうきさせる城がある 老い二人うきうき旅をして巡 合格へ一家うきうき豪華ばん 夫の留守ついうきうきと歌が出る

うきうきとしすぎる葬式の花輪 勝たせたい手に汗握る一点差 血を引いた握り箸だが気に入らず 通帳と判を握って死んでいる

神様のあとでサタンと握手する

ローン会社が権利を握る僕の家

握り飯敗戦の味忘れない 握らせた方へ傾くヤジロベエ

小林

みつ子 希久子 いわる 96

尼崎尾浜川柳会

働いた汗を知ってる握りめ 飛びついたところで消える電話ベル 二次会になると人格変ります 一次会を抜ける理由を思案中

代美閑

君だけと話した秘密羽根が生え 涙腺をからかいに来た杉花粉 公私混同自分の首を絞めている

> 志 美代子

敏

耳よりな話をさげて居酒屋 チューリップ一本くれた孫の愛

力むなと言っても力む初ゴルフ 伝統に風を吹き込む若女将 花活けて私一人のドラマです

達

一歳のよろける背なに力餅 一目惚れつかんだ心離さない 肩たたき孫の力をほめてやる 百歳を生きる仏の力かも

薬にも毒にもならぬ祝辞聞く

かづ子

カルチャーの妻が手引きをする余生 大法螺に乗った方にもあっ

た欲

一浪生晴れて髭剃る志望校

隅っこのここは素顔のままで良 弁解を聞くほう下を向いている 弁解はしない男の太い眉 世直しの一票私も持ってます

重

サト子 道

純

引き継いだのれんに強い意地がある 目の毒がずらり並んだ貴金属

為佐子 真っ白であなたにとってある未来 星空に地球の未来問うてみる 未来派といわれる男の不眠症 いい顔だ未来みつめた入社式 考える姿勢のままで未来まで

毒々し化粧の下のあどけなさ 我が夢は春の四国の遍路旅

しきたりを捨てて私は蝶になる 毒舌がひとり歩いて座が白け 毒舌を吐いて親友一人減る

> 句多留 ちよ路

弁解もしないかわりに木偶の坊

昭

握りめし三個作って妻は留守 父子家庭少しいびつな握りめ 二次会で結ばれました赤い糸

亚 子

昇

ミルク一滴未来を占う朝のくせ 遂にヒト科が珍獣となる未来 子沢山未来の希望有り余る

みつこ

がぶり四つ桟敷も汗を握りしめ

女の毒を乳房二つにかくし持つ

見早子

宮大工百年先を読むカンナ 少子化の波に吞まれる里神楽

手話宣誓スタンド沸かす入場式 今ひとつ苦労の種を蒔いておく サスペンススタンドの灯はまだ消さず 正直に生きてみんなに嫌われる どちらともとれる言葉で座を濁す

出物だと欠陥住宅つかまされ 伝統が校長室で欠伸する

大金をつかんで出世運狂う 森深く毒のきのこの媚に負け 本心は酒の力を借りて言い 要領をつかんでからの棒グラフ

次会になると元気を出す男

郎

たけし

買い足した灯油が残るエルニーニョ 五線譜に弱いがマイク放さない ほおばってごたく並べる握りめ 弱虫は嫌いわたしも弱いから

鉛

太

す正満寿蔵

弱そうに見える妻だが隙がない 勇次郎

佳句 地 十選 (6月号から

りつえ

俊

男

蟻の列その一匹に僕が居る まめなかや兄の訛りは温か 登りつめ痛み忘れた足の裏 靴底に妻の呪文が敷いてある そして春信じて胸の窓あける 若いっていいな仕事に炎えている 駆けてくる子供を抱けば陽の匂い 言い分は聞かずに花は散っていく より道をしてきた父の人間味 能面の白さに塗って心閉ず ハ 十 田 洞 輿みつ子 個あきら 小智恵子 シマ子 りつえ アキエ

住

手を出した方が悪いとバラの棘 はびきの市民川柳会 安芸田泰子報

子

砂被り不況へこもる蟻の列 スタンドを沸かしてプロ入り決めて

いる

扶美代

節くれた指に馴染んだ握りめし ゆで卵彼の弱点知り尽す 弱そうで肚のすわった強い人 もう一度食べたい亡母の塩にぎり 握りめし拡げてはしゃぐハイキング 母さんの心が温い握りめし 匹狼で弱音を聞いたことがない 柳宏子 夢之助 十四郎 13 石

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

愚痴るから幸せだんだん遠く逃げ 他人の愚痴茶のみばなしに聞いている サボテンに似合わぬ程の花が咲き 古時計突然止るかも知れ 愚痴捨てに行けばほほえむすみれ草 突然の再会名前が出てこない 突然に帯もたすきもうろたえる 猫やなぎ雪になにやら話しかけ 突然の倒産なんてふざけるな 清流のほとりがすきな猫柳 かつ子 鈴 はるみ ちよえ 好

江

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

まだ青い意見だ赤い鼻が言う 幸せに気付かぬリンゴ青いまま 還暦のまだらうっすら蒙古斑 神の掌で青い阿寒に浮くマリモ 金持ちがうっとりしてる床の壺 青い波今年は何故か黒い波 青年の情けをもらう車椅子 一杯吸って吐きだす青嵐

昭弘

休業の文字が気になる冬の町 なごやかに妻と母との橋になる 均等法妻と休みがすれちがう 鬼も仏もぼくも一緒に渡る橋 休火山じっくり男練りあげる 休館日もジンベイ鮫は休まない ずる休みイベント場で鉢合せ 大正の女は休むこと知らぬ 休診と書いてあるから痛くなる

古本へ掘出しものを血眼に 古い話するとき姑は呆けてない 裸婦像の胸に瞳が溶けてゆく 古い葉が目立たぬように散っ でこぼこの道を知ってる古い靴 古い肩書まだよう捨てずひとり飲む 古傷をあばく些細なヒステリ てゆく

ローズ川柳会 君子報

清 里 子

何残そう好き好き好きと言う孫に 焼きたてを待って香りを買うパン屋 献杯に甘露甘露と亡父の声 春は曙今日も何かを待っている 春風は早通り過ぎ涼風こうる 人間が好きでなかなか逝かれない ミサヲ 哲 みつ子 キク子 てる

シマ子 頂留子 和歌子 ますみ

葛橋の深い命にふれてみる 吊り橋のゆれるたんびに他人めく 他人様の哀しみとして渡る橋 まっすぐに渡る火の橋風の橋 一の橋を渡り絆を深くする ダン吉 度

たもつ 一柳 勝 男

> 駅弁が好きローカル線の旅をする 野っ原で遊んだ仲間みんな好き 好きですと言ってしまえば嘘になる 心機一転わたしを活かす時を待つ 雁二羽の対がふえてる春の河 柿若葉好きな季節を旅に出る 好き勝手言わせぬ父のきびしい目 飢えぬため新しい風待っている 雨に佇ち花につぶやく待ち呆け 何もかも揃わないから運を待つ リラの風 紋白蝶を泳がせる 渡せないチョコを涙と食べている

> > 武庫坊

女子子平代

はつ絵 発

まさお

トニエ

南大阪川柳会

制服を着てた体形懐かしむ 体形の修正汗のレオタード 体形に気遣っている適齢期 体形より気立てですよとお仲人 形見分け兄だけ父の服が合い ずんどうのわたしを嗤う影ぼうし 体形の悪さ遺伝のせいにする

多事多難男に隙が多過ぎる 年齢がどれにも合わず無職です 対象にされてひと際赤いバラ 子供対象の動画に規制できました からぶりの減税株価あがらない 自己満足している着痩せするタイプ

子

秋的

多事多難風に逆らい走ってる 多事多難子供が怖い世を嘆く

吉川

頂留子 郎

98

背伸びするたびに生き恥陽に晒す 都合がいい時は仲間の顔をする 鯛を釣るえびもこの頃高くなり 鯛の値を聞いて鰯の市場かご 鯛を釣るエビをあれこれ選っている 制服が揃い個性を無視される 伸びるものは伸ばし切るものは切った庭 反対派仲間にしたい時もある 豆の蔓伸び葛藤に巻き込まれ 餓鬼大将が椎の実くれて仲間入り どんぐりが揃い目玉が決まらない 仲間には表も裏も見てもらう 惜別の涙が袂を重くする 事故以後は橋の袂に地蔵様 長野では和でとび取った金メダル 戦争も平和も橋の袂から くっ付くがすぐに袂を分つ党 母の袂中からいつも夢が出た 献金の袂の分は裏の方 ライバルと生きる勇気を競い合い 両雄は並び立たない袂分け 羞恥心かくす袂が見当らず 多事多難花の盛りが過ぎました 多事多忙鏡の前も忘れがち 多事多難ネジ締め直す六十路坂 多事多難乗せて地球は回ってる 多事多難ダブルパンチに見舞われる 柳塔おおとり 原 みさを報 ゆきの 幸次郎 庸 由多香 艷 雄 風 佳 柳宏子 直 東 シメ子 章朝 修 秋 伸 7 17

酒くさい腐った鯛を飼っている お揃いの制服孫の顔見えぬ 養殖の鯛釣りあげてときの声 中学生右に揃えが大きらい ばあちゃんを追い越す程に伸びている 鯛網の観光瀬戸も海汚れ ぬいだ下駄揃えてあがる子のしつけ 遠慮なく知恵の貸し借りする仲間 背伸びした分だけ遅い春となる 披露宴大きな鯛を目で食べる 長電話さぬきうどんが伸びている みさを 敬之介 道子 和小 伝 孝 せつ子 野登

柳塔まつえ吟社 恒松 叮紅報

3

JII

きみ子

アキエ 登美子 早房 茂 螢 美 江 子

父さんの一喝利いた日本晴

鳥唄い山も笑って日本晴れ 晴れマーク森林浴か万歩計 上向いて歩こう空は晴れている 晴天に女の意地を干してい

田植機の音晴天の朝を出る

上品な風のこだまを聞いている

上品な後ろ姿が訛り出し また朝が来て上品に化けている

上品な言葉の裏が透けてくる

雑談でパンクしそうなバスの旅 雑談で親子のふれあいとりもどす 切り札の父の一声和んでる 雑談で点滴が知る回復期

草

揃うのを待ちくたびれた茶碗む

老いなりの夢が膨らむ青葉陰 切り札を入れると金が出てくれる 切り札は持っている気の酒の燗

多章 午 子 峰 朗 午み朗え

子

生

余生まだ膨らむ夢を持っている 膨らむと母性本能目覚めだす 耳打ちで膨らんでくる裏話 安心の中で膨らむ明日の夢 膨らんで元に戻って来た噂

昌枝 きみえ ひふみ 畔 末席に座って風を読んでいる 止り木に負け犬の席空けてある となりの席におんなごころを置いて去る

雑談が本題までの間をもたす 雑談へ耳の掃除をしておこう 揚げ足をねらい雑談の中にいる 上品な言葉に舌がついて来ぬ 品の良さ真似れば私ピエロめく

> 色あせた切り札出番待っている 切り札があるから背筋伸ばしてる やすやすと切り札等は出しません

> > 寿美子 子

江

登志子

住

与根一 泡 子

杜的報 叮

松川

じゃんけんぽん泣く子は乗せぬ縄電車 美しい手のじゃんけんに負けている じゃんけんぽん饅頭一つ残ってる じゃんけんの強い男についてゆく じゃんけんに勝っていくつの修羅越える 泣き虫の子がじゃんけんに強いのだ ジャンケンで妻には勝ったことがない とみ子 諷云児 百合子 柳宏子 治

席あけて待っているのに連れが来ず 席順はもう気にしないループタイ 白渓子 武庫坊 吉之助

定刻に 定刻に発車をさせて帽子置くばんやりのようでごまかしきかぬ 僕の席地獄に無いから生きている 補助席の音痴がマイクはなさな 定刻があって無いよな京都人 定刻のめしを待てない伸び盛り 退社ベルやっと首枷はずされる 春うらら影もぼんやりした歩幅 母の呼ぶ声縄電車 女 睦酔 修

賛美歌の聞こえる席にある懺悔 新入社員花の席取る腕だめし 定刻に寝て定刻に食べる父 ぼんやりと聞いても急所だけ押さえ 高 ただし とし子 友 水的

再会の場は本丸と決めておく 葉桜のベンチ大人の恋らしい 子をみんな育てた母の子守歌 本丸に立てば人間小さくなる 春風に乗った花木も歌い出す 葉桜へ献杯をする粗酒粗肴 本丸に桜の精が夜泣きする 本丸を嫁に渡して丸く住む

良

圭 郎 ひろ子

本丸はとっくに女房に乗っ取られ 酔い痴れて歌か口説きか判らない 葉桜よやがて父の忌めぐり来る 冷や酒で堪忍の二字ぐっと呑む

みか月 交歓句会 土橋

岩美川柳

波留吉

野次馬の先頭にいるわたしの子 野の広さおじけづいたか土踏り 野次馬になれば他人の顔になる 野暮を承知で親は生木を裂きにくる 野心家がめしも食わずに立っている いい女あれは野狐かも知れん まず

生恵子 ふさる 城 これからの事はくよくよ思うまい これからを期待して出す軍資金 ゴミばかり掬って僕はお人好し 掬っても泥鰌のいない川になり み仏に掬われてから我が命 これからの長い余生は亀となる これからに資格を生かす職がな

母ゴメンもう葉ざくらになり候

葉桜を愛でて男が野に下る 葉桜の道を無言の老い二人 葉桜の風は嘆きの歌になる 葉桜がみどりの風を連れてくる

大北

はるお 登美枝 幸 よしえ

しげる 花 人閃 介 今日の垢そっと掬っている湯舟 両の手で掬うかたちに光さす 味方から幸せ掬う知恵貰う ボランティア柄杓で重油掬いとる ジゲ起こし泥鰌掬いのカリキュラム

車

かさかさと葉桜が咲くカテーテル

順

悪の芽を掬う流れが欲しくなる ライバルの知恵を少うしずつ掬う よく切れるナイフに僕の顔映す 浅沼稲次郎刺したナイフに戦いた 掬われた雑魚も味方の数に入れ 哀しみを掬う柄杓が見つからぬ 天の網わたしを掬い取りにくる

完公

乃良

物騒な時代ですねとナイフ買う 幸せなナイフ果物ばかり切り 毒舌のナイフ心に受けたまま 恋人の胸で素直になるナイフ

三姉妹会話はナイフより切れる 時というナイフの先が背なにある 見初められ一生尻尾にぎられる 有難い話に何故か腹が立つ 誰も叱らぬ傘寿のわたし我叱る しんみりとうれし涙を嚙みしめる 病床で豊かな体恋しがる 探してる物は額の老眼鏡 冷蔵庫に入れようかっかしたナイフ

富久江 三千代 喜与志 八重子

美恵子 公和

かつ乃

男 司

-100 -

五楽庵

花 東 "

木

尾根はまだ切っ先向けてくるナイフ

希久代

燗でよし冷や酒でよし花の宴 悲しくてもっと悲しい歌うたう

葉桜に輪廻転生告げる風

カスは葉桜にして去って行く

雅 慕 男盛りを桜散る下に立つ 花びらが川面を白く春暮れる プラスマイナス零に人生締め括る 駅長の時計定刻しか知らず 定刻は頑固に守る明治です

川柳塔みちのく

花峯報

野の花がゆらぐ静かな母の画布 満月へ一歩近づく柳友が増え 赤心を見せた椿の花の色

孔美子

宣

正

空想へいつか詩人になっている 怠農戒め大根の花が咲く 悪人はひとりもいない五月晴れ 野いばらがきれい道草したくなり 心にもない言葉を飾り酌をする 吟行会自分の履いた靴がない 声出して叱る神ならついてゆ

きみ子

石花菜 螢

JII

怪しい影うしろをむくと父だった

マイペースこのごろ少し速度おち

柳弘報

怪しいと言われるうちが華やった 自分には奇跡のような妻がいる ガキの頃想いて義母の死に涙 親の恩忘れず供養の墓参り 亡き友に酒一口の供養する

ご供養になればと色紙一句添え 夜なべする母思い出す針供養 御先祖へ仏供養の盆参り 吠えないで怪しい者ではありません 怪しいぞいつも金曜休んでる 墓参り元気な姿見せに行く 山の辺の道に引かれて四季歩く 雅鉄良 かよこ 叭青川喜 巣心 笑

ミラクルな余生夢みてクジを買う 比呂志 希久志 本蔭棒 舟花

> 魚心計る物差しなど持たぬ 紫陽花の心を測る走り梅雨

どこ掘ってみても大和路遺跡出る 満開の桜墓石を供養する 信心も不精も混ざる供養塔 心地よい素足へ初夏の音を聞

悲しみは涙の量で計れない

上役を除いた会議知恵が出る

世の中は加減乗除で出ぬ答え

六十五以上は除く献血車

一府三県寄せて父母の供養する

ミラクルな心があせて恋なくす でこぼこの道を歩いて丸くなる 道ひとつ聞くのに美人探してる 孫の手が金魚を埋める庭の隅 ついて来いと言う若者が少なすぎ

くに子

道楽の域は出てない庭いじり 怪しいぞ百面相がうますぎる 歩行者を拒否する橋は架かったが ミラクルが起きずにどん尻を走る 番に朝のお水を供えてる

ダン吉

重

西宮北口川柳会 亀岡

哲子報

賑やかなのが来ては話をわやにする ここだけの話をみんな知っている 峠を越えると風も話題を変えてくる 聞かでもの話を聞いた左耳 ほんとうの話だれにも教えない 雑魚の話すこし冒険したらしい マジシャンのハンカチ鳩を飼っている ハンカチは悲喜こもごもに濡らされる 能 紫 絹正義 子坊 子子

天秤にかけて仕事を取る若さ 蜘蛛の巣に計られている人の首 庭の石聞かないことにしてくれる 話半分に聞いてもまだあまる コーヒーの香りの中でいい話 ソコンも恋の深さは測れない 比ろ志 しげお キク子 正とし たず子 諷云児

> 嬉しくて駅の階段二段とび 計り知れない魔球を女から貰う 生きて来た月日を計る豆御飯 はかりごとあるのか女優し過ぎ どの子にも同じ秤が母にある

まつお

步 風

柳宏子

泣きぼくろ芯の強さは母ゆずり 母さんを嬉しがらせたカーネーション 嬉しさも半分わけして喜寿と古稀 碁に勝って嬉しさこらえ憎たらし 嬉しさの限界母は泣いている

壁に向かって一人の球を打ち返す 燕来て修理を急ぐマイホーム

きり込んで来る立話抜けられず

どの夢も除けば乾いてゆくあばら 除かれる方の痛みはわからない 女らしい男におんな立ち上がる 腹が立つ今日はメロンを厚く切る 這い這いが立てた歩いた踊るよに 立ち見席背伸びの癖をつけてくる 立ち話連れてる犬が欠伸する お立ち台ほころぶ笑顔はずむ声

ただし よしろう

母の日の手持ち無沙汰な父がいる 松春煙蘭 みつ子 トミエ 柳宏子 佳石晴 秋舟美

ほたる川柳同好会 井上 直次報

門限を除くと自由だった家 プライドを除くと猫が寄ってくる 和歌子 喜美子 英 正 子風安

-101 -

副作用軽く言うまい恐い薬害 喜寿来ても妻だけ毒舌はいている 子の一言不安の壁を取り除く 出世枠から除かれている気配 普段着を除けば空になるタンス 浮き沈みあって人生万華鏡 賞味期限すぎた毒味は夫から 沈んでも息切れ早い老い河童 毒舌が冴える回復室の義母 毒舌の消えた親父を子は案じ 毒になる程の個性も持てぬまま シベリヤの沈まぬ太陽ダモイ乞う

吉太郎

いただいた生命でローン追ってゆく 酔っぱらいこんなゆとりのある主役 最果ての駅までつづく縄電車 堪忍を包む風呂敷娘に持たす

子

正剣報

聞きながら断る言葉探してる 新党に次の党首が雑居する 挨拶を交わせば消えるわだかまり なぜ急ぐたった一度の人生を 空の青桜の紅は京友禅 人の字を書いて天狗の鼻を折り

夫

食わず嫌い歌舞伎文楽薪能 単身の父がめざしを持ち帰る 倒産をすると予定に入れてない 皮下脂肪溜まってからの職探し 五十年負けない母の隠し味

柳ささやま 靖子報

風に誘われ気ままな一人旅に発つ

純

子

方円の水が眩しいひと昔 名水百選どこも同じ味がする

こっそりと隣り合わせに目くばせる 久仁於 虹 儿 高 正 弘

> 沈丁花隣の新居から包う 千の罪消して主役が米を磨ぐ カスミ草主役の花を引き立てる 先頭の蟻が知ってる甘い風 ご先祖にローンのことは言ってない 盃に一期一会のさくら酌む 七人の敵へ構える朝の靴 葉ざくらに惜しい人影だけ残る 欠け皿にいつもローンが盛ってある 匹で主役顔する膳の鯛 川柳塔わかやま吟社

> > 富 和 つや子

正三郎

セツ子 昭

宮口 克子報

馥郁と薫る孫抱く風呂上がり 水は激しく心の壁を押し倒す 良心の裏を覗いた箸枕 顔洗う女ひとりの水の音 薫風を突っきる若さ頼もし 薫風へ遠出したがる万歩計 養老の水で長命しています ランスの脆さ大事にして仲間 柳宏子 保 州 男

む 重

名水の溢れる里にある歴史

水向けて見たら彼女も虎ファン

水替えて金魚の舞を見て飽かず

多美子 美智子 八重子 とよ子 野 無駄遣い出来ぬボトルで買った水 バランスを保ち揺るがぬ心柱 苦い水飲んで人間らしくなる 羊水を離れてからの修業道 水よりも濃い血も世代差に勝てず 水たまり跳べて自信がわいてきた

> めぐみ 紀美女

バランスもモラルも崩れさむ 絶妙にバランス崩してるピエロ バランスの支点に母のいる安堵 バランスへ一枝足した水墨画

とみ子

良心を売ってのれんに艶が出る 良心が乾き素直に出てこな 良心が根付くまで待つ花の種 良心的客が宣伝してくれる 良心の声はひっそりしています 人間のバランス拒むエルニーニ 良心の呵責でしょうか苦い

竹原川柳会

時広

路報

思い出の坂機関車の父がいた この坂を上がればあなたまで少し この坂を登ったランドセルも卒業 卒園のひ孫これから坂いくつ 坂道を一歩一歩と踏む幸よ 夢で見る急な坂道のぼれない 少年老いてあの日の坂を写生する あの貴方と歩いてみたい坂がある 過疎の情 坂の地蔵は立ち続け

軽々とリュックは春の坂登る 大1史 喜久恵 千代美 カツ子

い街 3 富美子 さち子 紀久子 蹐

-102

あすなろを植えて未来の夢を見る 夏野菜植える楽しみ春の風 植え替えをしながら根っこ太くなり 植えもせぬ草伸び伸びと生い茂る 鉢の若木大地に植えかえる 喜美子 枝 長茄子と丸い茄子とを分けて植え また下がる家に内緒で買った株 紫をころさぬ母の茄子料理 恋の電波は百万ボルトより上 生年月日だけは内緒にしておい 会議室波立つ声が漏れてくる

竹林と文化の息吹偲ぶ路地 植えました話し相手になる花を ひまわりを植えると風は夏を呼ぶ お手植えの松を根付かすジョロの意地 早植えは何にしようか種袋 忍の字の植えてやりたい甘えん坊 千年枝 子枝

休肝日作ってみたが守れない

和

よしえ

知りたいナ内緒話は特になお 生活がかかっていない曲がり茄子

紀美子

賀寿恵

町並みに小店を出してみたくなる 花に酔い人にも酔って春を吸う 町並みのガイドを買った今日の僕 貞正節年房

適切な注意を発す茄子のヘタ

わたくしに休み下さい独楽鼠

旅人の顔でガイドの話聞 格子窓昔さかえた塩旦那

休日は安定剤を飲みません

荒波が好きでとうとうおぼれ死ぬ わたくしの嫌いな茄子をまたくれる 茄子の花知らぬ娘を嫁に出す 連休のプラン机上で海外旅行

留守番に花を預けて旅にでる 欲張って見ようか二十一世紀 耳学問なぜ何故なぜに行きづまり

内緒だというのに皆知っている 不覚にも内緒話を妻にした 内緒かな礼を言ってもいいかしら 長い目で見れば小さな波でし 人吞んだ波とは知らぬ今朝の凪 内緒ごとばかりしている官僚界 聞かぬ振りしても心に波が立ち 人前だ内緒話はするでない かつみ あけ美 17

普明閣掌の移り香よ金宝樹 普明閣蟻がのぼっている柱

耳糞を取ってあげたら婿に来た

橋本多哥由報

婆ちゃんは耳学問でよく喋る 馬の骨に賭けた娘の角かくし 春が来た孫は福耳おしゃまさん 鍋物で我が家の幸はことたれり

> うつの日のバラは真っ赤な目の色だ 石橋を叩いていてもまだ迷う

> > ユリ子

嫁が来る大きめの鍋買っておく 年寄りは福祉に預け共稼ぎ 欲ばりが来たから早々ににげる

子.

聞く耳は持たず頑固を通してる

多哥由

のたりと転び六時には起きる 木の芽のたり幹の色より抜け出せず のたりのたりするからいつも蹴躓く ホッとしてすぐにのたりとしてしまう ねそべって空をにらんでのたれ死に 登美枝 あづま

何食わぬ顔で図太い色眼鏡 どの眼鏡かけたら見える人だろう 世の移り早くて眼鏡度が合わぬ 老眼鏡ずり落ちてても苦にならず 子供らによくない眼鏡多過ぎる

幸せを一途にさがす無精卵 無精卵温めつづけるそれも愛 色々な力を借りてぼくがいる

ゆり子 和歌子

卵酒欲しくて風邪をひいたふり 卵酒過ぎて風邪より二日酔

設計図ここは鬼門という迷い 迷路にもどこかぬけ道あるはずだ 寂しくて卵も割れぬひとりの夜 春雷に卵いっきに割れてゆく

美恵子 和歌子

うぶみ川柳会 西村

黙光報

ひろ子 弘女 雀光

春の息吹衣替えして医者通い さわやかな十四の瞳は我が宝 登美子

新幹線首都のセンスを故里

訳ありの人生でした遍路旅 仕事一筋無趣味な父を責められぬ 食べ歩く趣味でまな板枯れている 包装紙のセンスに惹かれ買うお店 趣味趣向十人十色が乗る地球 少しだけ隙を見せたいルージュ 隙見せぬ女と他愛のない話 結願に杖ついて行く天王寺 海峡を染める夕陽にあすがある さわやかな話聞いてる峠茶屋 見つめれば優したくまし野辺の おたやんもセンスの良さがカバーする 板長のセンスが映える宴の席 太陽とスキンシップする春 手拍子を揃え踏んばる夫婦箸 息つぎが下手で溜息隠せない 東大出趣味が嵩じてチンドンヤ 難問が解けてさわやか空の青 アスファルト隙間に根づく草の意地 人情を少し含んだ隙間風 言い勝った方の背中へ風の鞭 ティーカップ妻のセンスで妻の味 青年の樹はさわやかに天を指す 次世紀の夢詰まってるランドセル 五月晴れ竿一ぱいにシャツ光る 風 引く 花 久留美 トヨ子 あやめ とし子 ただし あい子 寿美子 和歌子 多哥由 倫 Ŧ 公 枝 子子

> 名機には悩むぶ厚い説明書 バイクでも心にシートベルト 嫁いらず観音元気な顔ばか そうでした勝手に願ったのは私 昔味親子そろって食べ歩き ふり出しにもどって妻の手を引こう 嬉しさに古稀の祝杯こぼれがち 蕎麦の花勝ち負けにもっこだわら するめは足のほうが旨いと思う 花見酒酔うほどもなく人に酔 美しい落葉に逢うた老いの旅 春灯がぼんぼりのよう老いの部屋 正論はコップの中の多数決 向こう岸でも辛子菜を摘んでい 独善になって青い芽摘みとられ サラ金も駅のホームも無人くん 八起き目も甘えて母の歳を知る ふる里行きの風はどれだろ花の種 日を洗う男のコップ酒 掛け 3 X

幸川柳教室

三宅 保州報

手枕で単身寮の日が暮れる 広辞苑の枕が固いことを言う 離婚再婚それから凪いでくる枕 枕には夢の秘密を握られる 箸枕政治の裏を聞き飽きる 七人の敵に内緒の高枕 心音が枕にひびく失意の日 百合子 美智子 めぐみ IF.

薫風が試歩の背中をそっと押し

っ切れぬ風を抱いてるひとり旅

秋健

訳もなくむしゃくしゃします更年期

報

柳五郎 まさお 佐加恵 季銅治正 手の荒れがストッキングを走らせる 原因は忘れたけれど荒れている 紅差し指荒れて訣れを察知する 荒れる日があって二人の惚け防 荒削りのままで嫁いだ娘を思 貴乃花黒星祖母が荒れている

Vi

さち子

起世子

ıĿ

球形の荒野に葦が折れている 遮断機も荒れる心を止められ 柳緑花紅心を乱す春あらし

朱昭三親み正 夏枝子路ね一

相方にセリフはいらぬツーとカー 何もかも受け入れ海が荒れてい 飛鳥人のドラマも宇宙かけめぐる モナリザはパントマイムを演じきる 人形劇指で伝える息遣い る

子

たけ志

風

道

過去をもつ酒場の女の攻め上手 仲人の口を今さらせめたとて あほらしゆうて攻める気もせぬヌカに釘 劇場の中でもタフな女の胃 ネクタイを締めた喜劇を演じ切る 生も死も人生劇のひとくさり

満洲子

美智子

信

則

金

吉正敏桃

秀

攻めている責められているナイフの背 蓋してもオンブズマンが攻めて来る 豊太郎

羽津川公乃報

黙らっしゃい天井裏に耳がある 生き写しいやなくせまで孫に出て 網膜に写して消えぬ美女の笑み 本願寺の格天井に天女の絵 レントゲン腹黒までは写らない

男

希久代 蟹 男 郎 子

仲人にかかればみんなまじめです 愚かさをまじめに変えて罪ばかり 嫁ぐ娘の涙も写す晴れの日に 生臭い口を拭って写経する まじめな紐も緩んでしまう銭の音 鉛筆の芯がまじめにちびてゆく 何があろうとまじめに晩酌だけはする 艶ばなし真面目な顔で喋りだす 冗談をまじめに聞いたプロポー ストレスを溜めてまじめな足の裏 不器用でまじめな父のいかり肩 まじめな顔で欠伸ころしている女 不真面目にまじめに夫婦演じ切る 生真面目な胃袋すぐに赤くなる 赤い糸まじめに引いて切れそうな 政治家はまじめな顔で嘘を言う 賞罰なしまじめ人間続けよう 一 多 芳 夫 由 江 はるお きみ子 和歌子 忠 正 螢 漁 瑶 幻の酒も論吉も偽が出る 旬の花ばっかりですよ仏さま 橋かけて狭い日本をせまくする 平凡な幸せでいい手巻ずし 祭り寿司遠い絆を呼び寄せる 人妻と食べる一番高い寿 乗りつぎの岡山で買う祭り 山には山の川には川の善さ拾っ 靴の音父は疲れているらしい 自己主張持っているらしちぎれ雲 胃袋も財布も少し花疲れ 憂きことは酔ってうかれて忘れよう 脱ぎ捨てた靴もうかれる花の下 春帽子うしろ姿のうかれよう 娘の結婚うかれていても泣いて 夜桜のライトアップにうかれ出る 五目ずし愛の深さを確かめる 古里の秋は御輿と祭り寿

る

子

照泰靖

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

眠いのはお互い様の二日酔い床の間の壺が主役の喜寿の宴 母さんに歩幅を合わす車椅子 ヨチョチでいいの死ぬまで歩きます 悲しさが抜けたら眠くなる瞳 墨壺に曲った性根正される 要領は相手の壺を心得る 茶の子 あやめ 白渓子 波留吉

蟻の歩幅と二十一世紀を歩む 山小屋が見えて歩幅が広くなる段々と歩幅がちぢみどっこいし

密恵美子

間違いは誰にもあると助け舟

秘書がもつ黒いカバンが重すぎる

武庫坊

なと歩幅がちぢみどっこいしょ

消しゴムで消える間違いなら許 間違えて拳骨もらう双生児 間違って誰も見てない汗を拭く 目の中に入れて育てた子の謀反 目に涙ためて女のしたたかさ 目も鼻も春が泣かせる花粉症

川竹 松風報

Ш

春や春古い思考を塗り替える 長生きはしたいがポックリ寺に居る

敏 功 風宏鳥 子

> 地図片手心も弾む旅の空 お入学親が描いてる未来地図 終り善し吉でまとめる辻易者

> > テルミ

和

しげお スミ子

見当はだいたい地図でつけてある こんなにも国があるのか世界地図 ダムが出来地図から消えている母校 助手席の地図を頼って遠回り

風郎風雄江

地図にない街で心の傷が癒え

小 西 4

夢のある人生だから面白

公美枝

女

子

稲高 よ志子

とし子

石

両親の夢を背負って塾通い 夢枕亡母が立ってる昨日今日 夢だけは大きく持てと子に贈る 夢を抱き転地旗揚げするそうな 夢を売る仕事に生きて語が冴える 大空に夢もふくらむ鯉のぼり

背伸びしてみたがかなわぬ夢と知り 夢に出る亡妻の言葉が聞こえない いい夢に出合い束の間シンデレラ 超不況余生の夢を脅かす

諷 晴節大求正柳宏 宏 美子輔芽坊子

接待を受けるカバンが光ってる 表現のなんとソフトな小悪魔 少年のナイフの先に棲む悪魔 もの凄い美人が飼っている悪魔 大津絵の鬼は悪魔の顔でな ばっは 朝 也

静 鈴 光代枝 江枝 子的

敬

-105 -

花いっぱい咲かせ学び舎後にする シャボン玉追って七彩はじけ散り ケ防止欲も出て来る手内職 貞 いさむ 文 Ħ 仙 さようなら後ろ姿にレンズ拭く 太い手でレンズを覆う時の人

延寿庵野鶴報

伸郎

せ

っつ川柳万画会

新商品ウンと言わせた開発課 老人の介護に尽くす尊い手

目の鱗ぽろり剝がれる法話聞く 喜びが寂しさになる入寮日 あでやかな新妻と酌む古ワイン 新しい指輪待ってる薬指

シマ子 柳宏子 頂留子

新しい靴いきいきと二度の職 新顔がくぐる校門花吹雪

木村あきら報

野仏の今も昔も風百夜 職安で昔の地位をひた隠す 昔むかし父よ貴方は強かった 簡単に見えたパズルに意地になり 隠し芸になると張り切る平社員 風と話し雨と話をする蕾 哀愁がこもる別れの汽笛鳴る お賽銭千円入れた鈴の音 バタヤンのギター年季の音で鳴る おとぎの森へ行ってしまった鳩時計 旅カバン一つで世界股にかけ 栄転のカバンに夢が詰めてある

坊太郎 まっ先に犬が喜ぶ帰宅かな 新説が鏡の面に入り乱れ 新しい明石大橋タコ怒る

へ千羽のツルを飛ばさんか 柳塔おっぱこ吟社

かくし事皆はがされて四面楚歌 ぎこちなく新人がつぐ朝のお茶 長生きを喜び居れぬ国になる 春風とフレッシュマンが街を行く 新幹線別れの言葉手話でして 親の見栄新入生が背負い込み

マツエ あきら くに子 よしみ

チカエ なみ子 かおり 点滴に尊い命あずけてる 政治家を尊大にした罰我にあり 新娶りようおいでたと過疎の村 五臓六腑地酒喜ぶ花の宴 亡くなって初めてわかる父母の恩

加寿老

富鈴

仲人は今がチャンスと煽り立て 煽られて買ったバブルの傷癒えず

> 白光子 すみえ

かがり火に煽られてくる般若面 おだてられ帰宅をいそぐ給料日 治 IE

自己責任負けても次に自信つく 問章

てるな急ぐな迎え来るまでは やさしさを花に託して春ウララ

兀気とは負け心棒に支えられ

桜咲く遍路の笠も揺れて春 年金が机に化けた新学期 極楽の浄土を目指す遍路杖 三猿の掟を破り不眠症 開発がふる里の地図塗りかえる 花冷えが忘れた風邪を呼び戻し

兀気出るように磨いている鏡

小石でもつまずく恐さ秘めている 夢を追う事に疲れた絵の具Ⅲ 急転回あの子との距離近くなる

はつ恵 ひかり

東大寺尊い仏おわします 修身で尊ぶ心の復活を

夢之助

興次郎 喜久造 やすよ

富美子

昭 古稀すぎて天下御免の素浪人 昨日の証券マン今日素浪人 三浪がすねをかじって趣味の道 でこぼこのレンズに顔が泣き笑い レンズからミクロの菌が動き出す

美津江

富志子

外でよく家でわがまま妻泣かせ わがままが通るナイフを子らが持つ 素浪人ですと確定申告書 リストラの浪人列が長すぎる 浪人苦春まだ遠い無精ひげ 浪人の悔しさを聞くコップ酒

人間のわがまま幾つも橋架ける わがままは最後の日までとっておく 親に似たわがまま本気で叱れない きっかけが作れず貝になる二人

仲裁がご両人からあおられる 盆栽は父のわがまま知っている わがままを笑顔で聞いてやるゆとり わがままを許してくれた無人駅

辰

煽られて赤旗ふった日もあった スポーツ紙球趣を煽る大見出し 甚 弥

けい子 美智子

-106 -

浪速子 柳宏子

齋

星条旗によく煽られている総理

高田美代子報

ダン吉 頂上の椅子で孤独な風に会う しがみつく椅子が冷たい不況風

あとつぎを欲しがっている鬼の椅子 極楽の夢を見ていた春の椅子

かわはら川柳会 占

みよ子

俊路報

川がよびお城もよんだあゆの里 河鹿らはおらが天下と川で鳴く 世も川の恵みでひと生きる

過去の罪川に流して生きている いくつもの涙流した過去の川 旅先で川の流れに手をひたす

茂登子

ライバルの眼のやさしさは敵わない ライバルが腹に一物口走る

子代

釣り好きが鯛の魚拓を見せたがる

自慢話また聞かされる耳にたこ 健康美胸の大きいのが自慢 ライバルの自慢話が耳を刺す

智

郎

自慢話聞き流してるタダの酒 自慢の腕期待が重く芽が出ない 春風が私の裾に触れてゆく 枯れ枝と見せてほのおを抱く新芽

の夏を待つ

しゃべ 無口では思いを逃す恋もある る人無口な人に先越され

ふじ子

澄み切った川へ邪心は捨てられぬ

扶美代 かつみ代

嫁がせて父の無口が深くなる

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

婦美枝

素人の指だと知っている陶土

桂恒 美

雄

評論家 右も左も斬っておく 右向け右 軍靴の響き夢の中 長生きを支えてくれた土踏まず 課長補佐 右総代で罪かぶる

後輩に椅子をゆずった日の孤独 二度の職昔の部下は回り椅子 蛇口からぽろりと噂出る団地 修復のきかぬ言葉をぽろり吐 人間に戻ってぽろり吐く本音 お見舞いの客がポロリと癌告知 パラリンピックぼろりと涙金メダル それ以上言うな自慢が嘘になる 正直に生きたとエンマに自慢する 会心の笑みを浮かべて出る自慢

史和敦志正

手話の子の眼が澄んでいる笑ってる 陽が沈む妖しい影が動きだす 皮肉屋がたっぷり持っている吹き矢 檄文の漢字も仮名も右上がり 水替えて澄んだ金魚の瞳と出合う たっぷりの母乳を飲んでよく笑う ただし しば 正正 正 三 郎 坊 笛

野心家の男で次を狙う椅子

椅子とりに負けてそのまま平社員 リストラに課長の椅子が消えてゆく

子子子点郎子子

- 椅子付きで外遊するファイト マニエル夫人の椅子が眼裏に

和花

美代子 樹

町内を束ねるうちの粗大ゴミ

老眼鏡見えぬものまで見てしまう 泥水につかって強くなるカエル めんど見のよいおばあちゃんが居る長屋 有り余る時間があって何もせず 五月雨を集めて重い地球かな

> 柳宏子 博

史

明石

尼崎いくしま川柳会

裏でライバル越す手立て

トロ箱の魚成仏の顔でいる 庄下川赤い化粧の鯉遊ぶ 命いつまで生け簀に泳ぐ艶の鯛 ライバルが来ない少うし気にしてる 健闘を讃えて握手ノーサイド

居酒屋で魚一匹平らげる 童謡の魚と泳いだ川が消え 一〇〇万円の夢を見ている池 の鯉

諷云児

不用意につぶやけば老い案じら 世の中をぶつぶつ生きるホー 海にゆかん魚のつぶやき消えぬ間に つぶやきが礫に変わる夕茜 つぶやきの老いの中味は過去の花 n とみ子

好きなことし合いながらに愚痴が出る 日出男

平和です女は元気過半数

シャンソンを流す駅前喫茶店 落花しきり川面も道もつす紅に

富弘義

世

武庫坊

夢之助

達者だが心の中に癌がある 産声がはじけて一人 天地創造 風薫るタンポポの咲く庭のすみ 地に伸びる枝も私もあまのじゃく

IE

小さくて重い荷物の金メダル プライドが邪魔をしている二度の

職

カード一枚あれば手ぶらの旅がよ

10

かすみ

比ろ志

酌ぐだけの芸しか下戸は持っていず おふくろの味ハンバーガーに変り行く ねむるでもなく手あし投出すひとり部屋 春だからゆるむ 仁王さまの拳 白渓子 吉太郎 ハツエ

色艶が良いと気休め真に受ける 児玉

岩木山五月の桜よく似合う カラフルな夏真っ白い服を選る いつもの所犬も覚えた散歩道

> 希久子 志華子 砂

花の色染めて私だけの服

いそいそと栗色に染め姑出かけ 熊野古道五月に歩く風つれて 花咲かそう雨も休まず散歩する

叡

鉢巻を看板にしてがんこ寿司

7

五月病ベンチに憩う皮鞄 夫より先に相談する財布 カラフルな下着ファッション眼の保養

再婚は白いドレスを着られない 柏餅プラス思考でいくつもり 藍色の紬で作るワンピース 赤提灯雑学博士コップ酒 赤い服誰も褒めてはくれません 絵手紙に薫る五月の一行詩 影法師今日の散歩は不機嫌か 大金持ちそんな素振りはつゆ見せず

> 快復の膳に色かえ品を替え 保護色をまとうて群へまぎれ込み いつとなく彩とりどりのはぎれ箱 白を白と言うて仲間にうとまれる 年金で百まで生きる意地を持ち 年金の枠でゆっくり遊びます 顔色を先ずほめている見舞い客 きれい事言うても金で世は回り 旗色が悪くなったらすぐにねる お金出来たらしい笑顔と饒舌と

そのうちに水着になるや色直し 柳ねやがわ 江口

メーデーの鉢巻緩む不況風 鉢巻をしめるとやる気わいてくる 鉢巻の声は負けない応援歌 鉢巻をしめると口が回り出

孫達にわさび利かせるお祖母ちゃん ちょくちょくとわさび効かして名訓示 鉢巻を枕に明日の策を練る 鉢巻を外しうれしい合格日

千正楓

梢 坊楽

恭 会

荷物にはならぬ笑顔をそっとくれないか 洗剤を買って待ってる息子の荷物 子の家を荷物のように回される 練りわさび一つにレジの長い列 荷物などいらぬあの世は無の世界 いい躾荷物に入れて嫁がせる 煮え切らぬ男まるごとわさび漬け 波留吉

みつ子 巳

周

蛙 子子子

さと美 日出子

あやめ 権 亜也子 頂留子 亜 太成

> 肩の荷を下ろす積りで書く日記 溜め息が小言十回より辛い ひたむきに生きた証に墓地を買う 反省はしたかと迫るエルニーニョ 日ロ会議ノーネクタイに見る重さ 当然のことをこんなに喜ばれ ちょこまかと孫が嬉しい邪魔をする 邪魔になど出来ぬ大事な老母だから 肩書きが邪魔な二度目の職探し 案じての意見を邪魔にされている

幸子報

軋むまでは良かった家が傾いた ふくれ面あきあきしたよもう五日 ぎしぎしと軋むふすまが気をもませ ひたひたと老いの足音やってくる 戸が軋みコツを覚えて足でける 隙間風二人の仲を軋ませる 川柳塔打吹 (牧)信 禎 京 たけよ 元 子

この着物あきあきしたが捨てられぬ 花よりも団子の孫にひっぱられ 世が軋む財布が軋む気が軋む 幾万回時を刻んで振る振り子 あきあきとした脳味噌に活入れる じいちゃんが八ッ当りした戸が軋む 夜桜を子供寝かせて見にいった セツ子 しろう 光

邪魔者と言われ長生きしています 小ルイ子 たもつ 風 子 知佑

ポマードの頭あきあき見ています あきあきとせずに三食昼寝する 不景気の足音高くなって来る あきあきとされぬ私になるつもり ミニ菜園自給自足の鍬を振る 飲み助は桜の下で飲む話 世紀の足音聞こえて来るよ夜明け 足音に今日のノルマを乗せて出る 急ぐのに電話がなって邪魔をする 急ぐのよごめんなさいねおばあちゃん こっそりと咲いておどかすぼけの花 昼下り三味の調べにうっとりと 尾瀬に来て空気のうまさ知りました 賞味期限切れた夫婦で恙無く ありました古い日記にハート 捨て切れず簞笥に眠る裾模様 姥桜だって見頃はありました あきあきとしても私の影法師 講演が四角四面で欠伸する ローン終る頃には家も軋みだし エンヤコラ綱引く母は太陽だ 八十路すぎこの身が軋む春の雨 夫と二人サンタクルスの丘にたつ とり急ぎ乱筆詫びるきれいな字 川柳クラブわたの花 吉村 0 H 前 か和康明孝一玲弘富のな好子美恵京子朗枝 いつふみ 知佐子 石花菜 美代子 風

> 天 根

> 和 泉

太

石 H

津 H

佐 藤 岳 俊

金

+ 居

高 杉

窪 \mathbb{H}

早 良

森

天 根

脇

 \mathbf{H}

なかはられい

家 完 司

築

地 大 破

中

PE

折

鬼 游

会/門

草

舟

都

暹

学

秋

美

葉

かずお

模様替え老いの部屋にも春うごく 大空を蹴ってブランコ春をこぐ 父きとく車中の通路走りたい 病む父へ明るい柄の羽ぶとん 嫁姑仲をとりもつ孫の橋 **涙あと古い日記の恋のシミ 営董品鑑定されて夢つぶれ** すんなりと嚙めない蛸が意地になる 花盛り春一番に模様替え 0 H 17

トップにはなれぬ男が軋み出す

17

責任をとる足音が逃げてゆく

寿隆幸一春君道 子代盛枝風子江子子治

新聞のチラシに急ぐお買物 春風がワルになれよとそそのかす 宅配便急いで出れば隣の荷

急がずに夢はゆっくりふくらます 急ぐのになんと電話のながいこと スーパーへ心が急ぐ不意の客 模様替えして退院の父を待つ 桜観る今年は花の恋しくて 花筏乗っていきたやあの世まで まる花のもと

トシエ 道 まさと 子

川柳展望全国大会 第2回

8月2日(日)10時30分開場 ٢

「マリエ・ド・クール空港」(☎06-857-1200) 池田市空港1-12-8 (阪急「蛍池」から徒歩15分)

司

2000円 参加費

◇あいさつ ◇題と選者

席題

Γ 宿題 光 r 髪 Γ 戸 Г 夏

> 友 釘 j 吟 白 曲 吟 自 曲 Ħ 由 吟

吟 由 Ħ 曲 吟 自 由 吟

É 曲 吟

自由吟は各選者に違う句 ※各題2句·12時締切· 選者、 ◇質疑応答 出席者相互 進行

※8月1日夕には前夜祭・大会終了後懇親パーティーあり (要申込)

事務局 〒563-0102 大阪府豊能郡豊能町ときわ台 3 - 4 - 17

大阪川柳の会

00円 とき 8月4日 わり・礒野いさむ 江時子△流れる・平山繁夫△海・阿萬萬的△やん イビル本館3階322号室 (改定) (火) 17時開場 18時締切 各題2句 題と選者―背中・長 席題なし ところ=サンケ

ぬ独楽二つ」など5句 橋政良氏が選ばれた。 賞の第1席に本社同人の大 ゑさんと福士慕情さん。 ★函館川柳社の第6回青柳 定。次点は同点で小枝ふさ く年度賞は斉藤劦さんに決 ★平成9年度川柳塔みちの 「止まる日のことには触れ に埋設展示する。テーマ= 公募し 創立40周年記念事業の一環 松江市のホテル白鳥で同氏 の遺徳を偲ぶ に石彫りにしてはめ込み、 ★十和田市文化協会では、 「野外文芸館」として永久 官庁街通りの舗道 短詩型文学を全国 厚別区厚別東一条4-7-**一**004-0001札幌市 月31日 風柳 雄・高田寄生木・ちば東北 紙またはB6判 料=1000円 猿田寒坊・笠原高二・大野 子・藤沢岳豊・黒沢かかし 投句数=2句 投句用紙=規定用 投句先 締切=7 参加

与根一・尼れいじ・金村青 川柳会・松江城西川柳クラ 本社同人の恒松叮紅・舟木 しておられなかったので、 ブの共催で6月28日に開か 川柳塔まつえ吟社・いずも 集発刊記念の追悼句会が、 長だった津川紫吻氏の遺句 ★元島根県川柳協会副理事 紫吻氏は結社に所属 回誌上川柳大会が次のよう 田市教育委員会内 和田市西三番町2-先二十034-0083十 月31日・応募料なし・応募 者—森中恵美子·締切—7 道(未発表作1句)川柳選 芸館」事務局 に開催される。課題=「霧 ★北方領土川柳社主催第5 「野外文 14十和 年後を予想する「川柳人大 半世紀」の作品を募集する。 を記念して句文集 8進藤嬰児 下にタイムカプセルとして く建立する「川柳金字塔」の 回答子言などを掲載、 予言」。句文集に応募全句と ★弓削川柳社は創立50周年 創」「未来」各題2句と50

湖の四氏が発起人となって

選者(8人共選) = 斎藤大

保存。

西暦2048年11月

新 人 紹 介

黙光 田 緑良· 宣の **螢推薦** 子:

98 年度 尼崎 III 柳 大会

٢ ところ ŧ 園田学園女子大学図書館2階321教室 7月20日(国民の祝日)午前11時半開場 阪急神戸線塚口駅下車南西徒歩10分

課 会 題 1000円 顔 (昼食 大会報呈

旅 サナス

選 選

詠 L

内 芙巳代 栄 選 選 選

「川柳町

午後1

時締切・各題2句以内

(欠席投句拝辞

懇親会 尼崎市長賞・兵庫県川柳協会賞ほか 会費3000円

主 尼 崎 JII 柳 協 会

連絡先 **〒**661 −0001 尼崎市塚口本町2-26 田中薫方 電話06 尼崎川柳協会事務局 422 3886

記念大会に開器、宇宙はる に限る。参加費2000円 か・浦島太郎の両氏が選句。 1日弓削川柳社創立10周年 締切7月31日。規定の用紙 柳塔わかやま』誌上で感想 息吹を見守ってゆく努力を を述べておられる。 惜しんではならないと『川 像に触れて、川柳の新しい

■5月10日、第9回時の川 ▽人事往来△

が出席した。

鬼遊相談役はじめ同人多数 柳交歓川柳大会に薫風主幹

良参与はジュニアの選を担 笑理事長がされた。牛尾緑 を薫風主幹、作品添削を天 公開講座が開催され、お話 5月17日、 十五歳の中学生の人間 「岬川柳会」

役員報を発行

末の子定 なった。第一回は八月 年四回発行することに す」と題する役員報を の交流を密にするため 「こんにちは川柳塔で 本社と役員の方々と

V 訂正とお詫び▲

下段9行目娘よ晴れ姿→娘 の晴れ姿▼ P90 ■6月号=P23 (川柳塔 (路郎賞候

八木千代参与を選者に同人 天笑理事長·鬼遊相談役 40周年記念大会は薫風主幹 ■5月24日、川柳玉島創立 塔賞候補作品)上段26行目 長→牛尾緑良▼P92 補作品)下段13行目牛尾緑 水村親路一木村親路 (川柳

を発刊。B6判156頁。 市)が川柳句集『夫婦道 ■同人の椎江清芳氏(箕面 多数が参加して盛大に開催 は茴香の花欄選者及び二賞 段18行目川島諷云児の作品 中段最終行川島諷云児·下 ■P90上段最終行西出楓楽 選考委員のため、削除

▽出

版△

▼計 報▲

■川久保勝弘氏(同人川久

約1000句を収録 橘高薫風・片岡つとむ序文

同人多数が見送った。 米子市永泉閣の告別式には のため死去。71歳。19日、 取県)は5月18日、直腸癌 ■松下たつみ氏(同人・鳥 はじめ同人多数が参列。 会館の告別式には薫風主幹 死去。65歳。19日、太子橋 は5月17日、脳溢血のため 保睦子さん夫君・大阪市

句

投句料1000円(作品集呈)

投句締切8月15日必着で左記

第22回 茗人賞川柳大会

٢ 3 8月30日 (日)

ところ ホテルモナーク鳥取 午前9時開場 10時半開会

鳥取市永楽温泉町403

お 話 各題2句・席題なし タン吉 氏

高須賀 \mathbb{H}

金

由多香 章

百 選選選選

切 午前11時半

遊

3

2000円(作品集呈

懇親会費 昼食は各自でお願いします。 3000円 (希望者)

〒680 −0805

鳥取市相生町3丁目204

電話0857-23-4672 森田熊生方 うみなり川柳会

水 煙 抄

6月号から

霜 石

みが先行したり、テクニックだけが目立った っぱち大いに結構と思います。でも、単語の な句ばかりを私なりに選んでみました。 この句は多分この作者でしか書けない、そん 実かどうかは作者でないとわかりませんが、 実」を書いている句に魅かれます。勿論、真 誤解のないように申し添えますが、句は嘘 これだけの数の句に接すると、やはり「真

いつまでも子供ではない子供部屋 渡辺南

りすると、ちょっとがっかりするのです。

剤など出てこなければいいとしましょうか。 大騒ぎしたものでしたが、今はナイフや覚醒 私たちの少年時代はヌード写真ひとつでも

セクハラの相手が今の妻でした

でも、訴えられなくてよかったです。ハイ。 恋がつのり、故意に手を出したのですな。

お布施から和尚 新聞代払う

こういう和尚に会うとホッとしますね。 いけれど、この和尚は庶民派。こういう句、 笑いました。世にキンキラキンの和尚も多 川島良子

ふるさとの水のボトルを買いにゆく 立蔵信子

の水」とか買ってしまいますから。 か、故郷・津軽に住んでいてもつい 生命保険満期の金で旅をする 信子さんの故郷はどちらでしょう。私なん 「岩木山

Ш 原 昭 水

三世代同居パン党御飯党

を鑑賞してみます。 らは、真実の中の「発見」というテーマで句 を絵に描けばこうなるという見本がこれ。 痴でも言ってみたいところでしょうが、幸せ 冒頭で「真実」の句と書きましたが、次か おめでとう御座います。本人はちょっと愚 柏本靖

石みれば一応蹴ってみる子供

幸枝さんの観察眼は温かく、そして鋭い。 人と人 犬と犬との長話

川幸

ふむ。あれは犬同士も話してるのですか。

国会で答になってない答

員居眠り番付表でも発表すればいいのに。 りしたりしている議員が随分いるよねえ。議 国会中継をちゃんと見るのかも。でも、居眠 もっと本音でちゃんと答弁すれば、我々も 島ちよえ

門限のない未亡人よく喋る

や同居人が心配するけれど、別にいいのか。 門限ですか。そうか、遅くなれば普通家族

桜」と認める青森県は弘前市。 ようです。私の故郷は、自他共に「日本一の 私は実にいい時期にこの欄の鑑賞に当った

佳句に出会いました。本当にラッキーでした。 今回、この水煙抄鑑賞で、実に沢山の桜の

あの世にも電話をしたい花見酒

敵も味方も桜の下で脱ぐ仮面

吉村

さち子

お隣の桜で花見すみました

藤 智 子

春爛漫ちょっと道草したくなる

不破 緑

さくらさくら山寺埋めて人埋めて 田 美也子

JII Ш 口

句 披坂 4題 者 選 22 があった一切発表に によっ 0 ホ 各題秀句 ルに て各賞が 本 先立ち 111 大会各賞は、 5 1 9 2句ずつ、 山 決定。 口 名の 大会 Щ 聖子の三氏の子の三氏の は 6 前投 を得て 句 14 句のうち は次のとおり。 句 0 氏 3題 貢 献か 0 感謝状 れ口 . 第2 当日

去 る日は花の散るように 文部大臣奨 一分別賞

兵

庫

斎木

敏

子

役を

百 選 0 豊かな水で菜を洗 院 長

Ш

梨

佐

野

悟

柳

Ш 大

全日本川柳大会賞 画 になれる貌 を持 Ш

漫

ドの光の中の父で る春 こだまする が白 0) ある 青 広 Ŧ 兵 西 角 南金華 功 悦 峰

〇賞

弱真子ほバ

0

仲間

黒を決

て白

にせ

X

有

8 17 から仲間

無くても箸

を頼る秋桜

負

をふところ

岐 Ш 岐 爱 Ш

は

び

輪

が

揃

3

浦 原

あ は

る子

宙

は君のもの

等みん

な卒寿の と二十

の母

0) 1

世紀

椅子

輝い

てい

ジンロー

全日本川 五回 「さんま川

柳

誌

上大会

題

〇投 句 住所、 は *募集を何で知ったか付記してください。 がき一枚に2句(一人二枚ま 氏名(柳名)、電話番号を明記のこと で

投句先 988-0064

0

仙沼市九条四九四一一五

幸四郎方「さんま川

0 〇二次選 0 0 発 締 次選 切 九川 *大会発表誌は郵便小為替六百円 111 t 月十日(木) さんま川柳全国誌上大会号で 柳宫城野社主幹 柳 月三十一日 けせんぬ (金)消印有効 ま吟社・選考委員会 ちば東北子氏

第五回記念吟社賞20句)に生鮮さんま一 呈(宅送)します。 添えて申し込んでください 70句(特選5句·秀逸10句· 佳 作 35 を 句

特選五句には八賞句入り楯 *

氨仙沼市魚食健康都市推進協議会 整全日本川柳協会・川柳宮城野社 111 けけせ んぬま吟社(日川協加盟) 2 2

-113 -

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3 小島蘭幸方

500号誌上川柳大会御支援よろしくお願いいたします。

会監会計查長

山三古古岩藤古石岡森岩時小 内宅田田本解谷原本井本広島 ほか 房不比太文静節淑清菁笑一蘭 日子朽子虚晴風夫子水居子路幸

川柳塔わかやま吟社

主 同 顧 柿尾小小内 岩 野 4 JII III 人 問 斡 花 倉 芝 倉 村 原 F <u></u> H 山 尾 紀綾太ア 太茂 道 登 富 大 緑 天 夫 女 子 代彦 湖 輪 + 良 天 寺 垂 玉谷 杉芝 中 冨 田 塩澤 坂 # F 満 H # 井 中山 谷 H 部 栄 光 裕 千 豊 信 輝 精 佐 和 紀 あ 公 寿 子 子太子 子 to 美 宮宮松堀 福 横 森 細 福 中 中 中 II 景 端川本 か 垣 原 H 村 田 島後 会 忠 射 寿 英 克 \equiv 稚 和 君 員 誠 IE. 清 枝 月 芳子子男代子子枝 子 7 博 史

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良方 TEL 0734-46-2855 〒 TELO八六七―二八―二五三― 〒3614 岡山県久米郡久米南町 下弓削 山田方 弓削川柳科

記念大会 平成十年十一月一日旧記念すべき年を迎えました。

暑中お見舞申し上げます

童

いずも川柳会

会長 尼 れいじ 会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町 2 8 4 吉 岡 きみえ方 TEL0853-22-1068

暑中お見舞い申し上げます 夏バてになりませぬよう 1998年 盛夏

私たち"川柳塔鹿野みか月"の第19回大会は今秋、開催をいたしたく皆様のご支援を心からお待ち申しております。

※ 詳しくは改めて御連絡したいと存じます。

川柳塔鹿野みか月

事務局 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原 諷人方 〒689-0405 電話 (0857) 84-2100

暑中お見舞申し上げます

長 柳 会

網 沢 佐 國 木 木 岸 梶 柏 加 大 大 妹 網 前 原 木 木 片 田 中 茂 嘉 良 オ 由 文 輝 明 俊 正 正 子 子 幸 男 子 仁 男 子 一 次 子 義 郎 美 一

板 吉 山 水 松 樋 濱 西 西 西 中 中 等 部 և 川 原 岡 谷 谷 岡 口 野 山 浦 浦 久太郎 岳 泰 輝 子子 虹子 雄 醇 慧 人 永郎 廪 博

わた 中お見舞い 中に上げま、

川柳若葉の会

暑中お見舞

吉 山 宮 宮 古 中 辻 椎 黒 橘 田 内 崎 本 川 島 川 江 田 高 番 本 弘 欣史子 直 巻 子 勇 風 を 全 子 直 を 子 勇 風

暑中お見舞い申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 🗕 🥫

月例句会は第三木曜日

暑中御見舞

サークル 檸檬

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

暑中お見舞い申し上げますほたる川柳同好会

ほ前松藤古中富田玉滝田 嵯栗黒北奥岡江上板池一月湯井橘 が田本原川山永辺置北中 峨田崎村村本口田山田瀬原浅上高 明 にた は 真 当 世 保 久 恭 正 ず 志 書 福 方 馬 直 薫 同子し子子子子郎子史柳子子子安之郎光秋子守一郎洗次風

定例句会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛍池公民館

八尾市民川柳会

会員一同

南大阪川柳会

会 員 一 同

岸 暑 島岩 高 柿 古 原堂 長 井 井 H 中お 佐 須 谷川 崎 和 花 免 齋 伊 中 妻 賀 ダン 冨 昭 敏 苑 路 東 文 呂 志 見舞 光 子 子 齋 万 時 芳 内村寺古 徳 藪 宮 加 善 原 柳会 庄 野 野 地 藤 野 垣 H 田 野 さよ 美智 ケイ 美 鹿 太甚 狸 津 子 基之 郎一 村子 弥

もくせい川柳会

満松 桝 星 西 辻 玉 玉 田 滝 住 小 岸 木 北 岡 江 安 黒 橘 仲 本 本 野 田 川 置 置 中 北 谷 池 田 村 山 本 口 藤 川 高 中 北 谷 池 田 村 山 本 日 藤 川 高 彦 代 彦 孝 重 正 博 石 げ 香 宙 郎 郎 光 子 香 郎 郎 光 子 香 風

定例句会 每月第3月曜日 豊中市立中央公民館

お暑うございます

奥 松竹 藤 川小松辻 四 IF. 山 内 島 Ш 池 村 Ш Ш 萬 JII 本 美 花 諷 ル 白 芳 杜 萬 水 代 云 渓 智 げ 子子女 子 子 児 お 的 子 的 香

川柳ねやがわ

暑中お見舞い申し上げます

川柳大阪

会員一同

大阪市交通局互助組合文化部·川柳部

暑中お見舞申し上げます

児太高福武楠赤高川福中高吉笠他島田田田部 木津端元島田岡原 一 与扶治悦敦昭和三六の高洋子房江 同志代子子子子郎点る洋子房江

川柳藤井寺

西宮ローズ川柳会

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

連絡先 〒675-0101 加古川市平岡町新在家2006-8 吐田公一方 電話0 0794-22-3681

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館 (阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本 義子

久木菊神亀川門小小奥奥上井井浅秋正黒 保村池原岡見谷倉熊山田上上野元本川 ま貴上 哲絹たず 美智子 秋子煙子る客香

吉山山水牧藤春春林長西西長富住小小黒田水牧藤春春林長西西長富住小小黒田本崎田渕村城城 川田 石間 に 1 日本崎田 水 武年 は 春 宏 子 子 平 子 女 坊 代 絵 蘭子 ゑ 子 子 平 子 女 坊 代 絵 蘭子 ゑ 子 ぞ お け に 子

川柳塔社

常副 副 理 主任 理 主事 長 幹 長 幹

西 河 神 奥 岩 板 宮 高 橘 河 須 内 磯田 佐 尾 口 内 高 П 金 月 典 2 岳 笛 天 董 Vi わ 太 子子 4 吉 笑 風

 吉
 山
 宮
 前
 西

 古
 店
 店
 ら
 た
 も

 本
 赤
 キ
 キ
 カマ子

 ま
 寿
 寿
 よ
 キ

川柳塔社常任理事会

7 月 各 地 句 会 案 内

	, .	7 A A 13
句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎いくしま	3日(金)午後1時から 虫・走る・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	4日(土)午後1時から 棚・ギザギザ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒步 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
堺川柳会	9日(木)午後1時から 食べる・このごろ(共選)・するめ(折句)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天美
八尾市民 川 柳 会	10日(金)午後 6 時から うらおもて・反抗・浜・夏	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔まつえ	11日(土)午後1時半から 漫 面 ・ 餌 ・ なじむ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松叮紅
川柳塔わかやま	12日(日)午後1時から 背 ・健康 ・助ける	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後1時から パン・浮く・かなり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳同好会	14日(火)午後1時から ワープロ・約束・女女しい	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市蛍池中町3-10-28 井上直次
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16日(木) 正午から 派手・替える・あこがれ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島凞云児
岸和田川柳会	18日(土)午後1時半から 連絡・ローブ・わけまえ・あざやか	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒569-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	19日(日) 正午から プライド・贈る・道具・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町 9 - 9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	20日(月·祝)午後1時から 悪口・トマト・落ちる・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南大阪川柳会	22日(水)午後6時から 泥酔・手柄・適切・手品	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
京都塔の会	24日(金)午後1時から 平・ごっそり・磁石	ハートビア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
東大阪市 川 柳 同 好 会	25日(土)午後6時から まさか・夜・折る・女神	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	26日(日)午後1時から 接待・マニア・「目的」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

[★]日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編 後 記

地球滅びるなど思えず」と えるのは甘すぎるのだろう ポーツのイメージトレーニ と限りなく不安になる。 は地球はどうなるのかなど 年は天候異変が多い。 止みなく聞こえている。 いう句が浮かぶ。 に向かうとプラス志向に考 はずだから、 ことが続くと、このままで ルニーニョの影響らしく今 か。薫風主幹の「蕎麦の花 ングのように、 タンの核実験と許しがたい ★その上、 ★梅雨の走りか雨の音が小 インド、パキス きっと良い方 人類は賢い ス I

載されていた。 たら、 結果、 柳がアマチュアに拡散した ち無用とは言わないが、 れを言い合うようなものば する浩瀚(こうかん)な現代 の巻頭言にも同じことが掲 今届いた『川柳塔まつえ』 て、この欄に書き出したら 数の中に埋没しているとし かりである。それもあなが おられる。また「サラリー 川柳史となった」と述べて やかな痛憤は、 貶(おとし)めに対するおだ したので織田氏の了解を得 ことである」とあり、 7 ン川柳は飲み屋で駄じゃ 川柳にとって不幸な 世に出るべき秀作が 水府を核と 共感

介して「川柳に対する誤解、 の夕刊に作家の織田正吉氏 雨に別れて以来なり』を紹 「川柳の現在」と題した 『道頓堀の 朝日新聞 改め、 いと計画している。 数居られるので、ページを 同人のうち、 に掲載されていない方が多 の句・私の句の欄があるが ★本誌目次の両側に、 順にまとめて載せた 今までこの欄 3 座右

につながり、二〇〇五年ま

で郵便料を値上げせずにす

名も省略でき、

めの手書きの手間や、コン すという。ただし、そのた むので、ご協力お願いしま

れまで通りの住所を書いて

となのだろうか。

3

は、数字に振り回されるこ

が、

私の場合も七桁の上こ

コラムの中に、

★四月二十一日、

同人になって

皆様の末席に追いつける句を作り のくの名を汚さないように、早く 参加させていただき、あっという間 師の温かい人柄に引かれて句会に 波多野五楽庵師からお誘いを受け を心掛けております。昨年二月、 たいと乱読乱作にくれ、ご指導を いただき、 この度、 一年が過ぎました。川柳塔みち 身の引締る思いで作句 川柳塔社同人承認証を

ひとこと

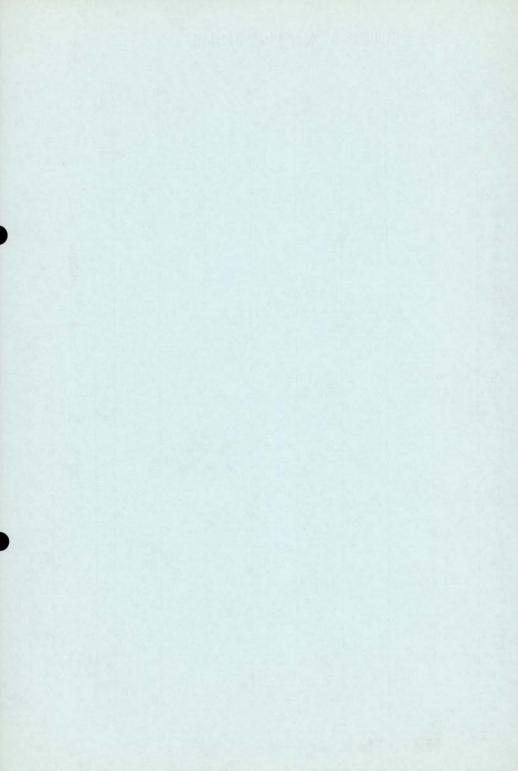
柳塔社の皆様のご指導とご厚情を す。良き師と良き仲間に会えてこ 慕情を私の一生の宿題として自分 柳号「慕情」を拝名いたしました。 が分かって来たように思います。 んな嬉しいことはありません。川 の句を創作していきたいと思いま いただき、やっと句を作る楽しさ 昨年の忘年句会で五楽庵師から

福士

お願いするものでございます。

その都度「ぽすたるガイド」 場合は同人名簿が出来たの もう五ヵ月になる。柳友の 約二千億円のコストダウン の郵政省は、 を繰っている で楽なのだが、それ以外は O郵便番号が七桁になって 労働力節減で 要するに合理化の一 更、その他事務用品など諸 ピュータープログラムの変 O七桁へ住所省略 しつけなのである ては存じませんとのこと。 々の作りかえの費用につい 出来もせず 方的押 靖巳 いる。 れてしまう

さえ書けば届くわけなのだ このシステムによると町 番地と名前 が進歩して行くということ 局番が四桁になる。 手間を損した気分にさせら だから、何やら七桁を書く さすぎ、どうも抵抗がある。 だけではあまりに味気がな も知れないが、数字の羅列 O染みついた習慣のせいか 〇来年から大阪市内の電話 世の中



作品募集

苘 渺 水川 初 課題吟 香 步 湖 煙 柳 (3句) 教 0 室 花 抄 抄 塔 9 3 月号発表 降 3 8 8 決める」(3句 句 句 句 句 沢 り指 3 ·月 15 西八河 11 H 出木内 高 締 Ŀ 原 H H 千天 薫 公 柳 否 Ŧi. 楽 代 笑 風 郎 水文

「しばらく」「ほめる」 10 課題吟 初歩教室 「輪」

選選

選

選選

担

月号

夜市川柳募集

第2回「勘定」 高杉鬼遊選 ハガキに3句 7月末締切 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑方 堺川柳会

〒545 定 半 発編 行人兼 十 年年 価 振替〇〇九八〇-五-三三二六八番 阪市阿倍野区 分分 六 年 ウエムラ第2ビ 四 美橘 百 千 円 明町 研 百円円 送 ---〇--六 料 六九 (送料 84 \mathbb{H} iii 共 並

路郎忌 本社 7 月句会

会 席 兼 ところ 地下鉄谷町 天王寺区石ヶ辻町19 題 題 き 役 3. ウィー 月7 0 題 0 男指た 洒 14 円 B 者 口日発表 Ė 徒 投句料 步 12 (各題2句以 分 電 後5 橘 片 Ш 西 沂 4 時 鉄 7772 0 高 X 島 L 内 本 円 薫 11 町 湖 諷 笛 わ 徒 兒 風 風 4: 多 步 3

本社 8 月句会 7 日 (金) 予定

選 選 選 選 分

T5 く」「コーヒー」「身 辺| 11/ 等」「養 う

第17年度 夜 市 川

題 選 者 締切 11 西出 楓楽 6月末 ② 「勘 定 | 高杉 鬼游 7月末 (3) 鱼 高田美代子 8月末 (4) 恋 菱田 満秋 9月末 ⑤ 「海峡」 小島 蘭幸 10月末 (6) IIII 長谷川博子 11月末 ⑦ 「読 む」 泉 比呂史 12月末 (8) 「傾 < 1 今川 乱魚 1月末 9 「名 前 天根 夢草 2月末 10 「洗 5 外山あきら 3月末 11) 嫁 寺尾 俊平 4月末 (12) 祝 橘高 薫風 5月末

第16回夜市川柳大会は8月1日(土) に開催、ご参加をお待ちいたします。

(1000円(多) 2句以内を一枚のB5大用紙に 2句以内を一枚のB5大用紙に 2句以内を一枚のB5大用紙に 2句以内を一枚のB5大用紙に 2句以内を一枚のB5大用紙に (大会当日出句) 1 JII 社創立 平成10年11月 (水南町中央) (応募締切 (応募締切・) (本募締切・) (本募締切・) 事久平前米成 50 周年記念·紋 清水 梶川雄次郎・小林-小松原爽介・田口 小松原爽介・田口 水 惣七 惣七 H 記名清記 午前9時開場 へて左記へ 念•岡山県芸術祭参 市 市 市 多 香 音 音 尾 住



美子俊秀

削

柳

前会 出

月31

会費 5000円 会費 5000円

記・記念品呈)

からへ 込み は8

U

半世紀」

語募集 月 31日

7 月 31

25 日

3

JII

柳社

ま

【イメージ・キーワード】 "Value for Human バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの 紬 服

〒540-0024 大阪市中央区南新町 1 (06) 941-9631